勝家ハモト織田信行ノ臣

勝家ノ武功

長光寺ノ籠城

## 〔武家事紀〕十三 續集織田家臣 柴田修理亮勝家 初名權六、佐久間大學等ト

モニ、織田武藏守信行（初名勘十郎、信長弟、）ノ家臣トシテ末森ニ在リ、（信行在末森城、）弘治二年、林佐渡守（信長老臣、）弟美作守ト、柴田勝家相ハカツテ信長ヲ害シ、信行ヲ取立ン事ヲ議ス、因此兄弟稻生合戰アリ、此時信行戰ヤフレケレハ、末森ヲステヽ剃髮シ、信長ニ降ス、柴田剃髮シテ、從之テ名護屋城ニアリ、（名護屋元信長居城、信長遷清洲、令織田孫三郎信光居此城、信光遇災、林佐渡守守此林在此城企此逆謀、）信行隱謀猶不止、柴田勝家ヒソカニ清洲ニ至テ此事ヲ告、因此信長ツイニ信行ヲ害ス、而ノ弘治三年、柴田勝家、信長ノ近臣タリ、勝家武勇絕倫、信長軍旅ヲ率スルゴトニ、必ス先軍ヲツトメ、城ヲ攻、邑ヲ破ル、信長兵ヲカヘス時、其退口大節ナランニハ、勝家又後殿ヲ承ル、野田、福嶋ノ退口、長嶋ノ退去、小谷、八相ノ時ノ後殿、元龜二八月、木本ノ退口、皆勝家其殿ヲ司トル、勝家江州武佐長光寺ニ在城ノ時、元龜元年六月、佐々木承禎父子、江州甲賀ヨリ野須郡ニ出勢ノ、長光寺城ヲ圍、承禎鄉民ヲヨヒ出ノ案內ヲ問ニ、此城水不自由ニテ、後ノ谷ヨリ掛樋ニテ水ヲ城中ニ取入ル、事ヲ聞、平井甚助ヲ以テ水手ヲトメシム、城中水少ノ危シ、勝家居間ノ緣ニ水ヲカメニ入テ三瓶ヲナラヘ、士卒ヲ呼テ是ヲミセ、城ノ水ワツカ



壺劇柴田
鬼柴田

信長ノ家ト中勝家ト地位ヲ爭フモノナシ

北莊城

是計也、兵士渴死無疑、未力ノツカレサル內ニ、城外ニ出テ必死ノ戰ヲ可仕ト云、兵士皆肯之、勝家乃三瓶ヲ打割テ捨、必死ノ志ヲ示シ、翌十六日出城テ大戰、承禎カ旗本ヲ切崩ス、惣軍自敗、野洲河原ヘ追討ス、三雲、高野瀨、水原、宗徒ノ佐々木カ勢ヲ討取ル、是ヨリ俗ニツボワリ柴田、鬼柴田ト呼ナリ、此戰功ニ因テ、信長三万貫ノ領地ヲ加增、其後天正三年九月、信長越前ヲ征伐アツテ、越前ノ守護職ヲ柴田勝家ニ賜ル、勝家越前北庄ニ在城ノ、北陸道ノ惣轄タリ、信長治世ノ始、國ノ守護職ヲ與ル事勝家ニ始レリ、サレハ武勇ト云、大名ト云、信長崇敬ト云、万人コレヲ競望スル事ヲ不得也、信長逝去ノ後、天正十一年、賤嶽ノ一戰ニ利ヲ失ヒ、四月廿四日、越前北ノ庄ニ於テ自殺、行年五十七、嫡子柴田權六生捕レテ、佐久間盛政ト一所ニ害セラル、勝家嘗テ前田利家ニ云ケルハ、今程上方ニ出頭人明智光秀、菅屋九右衞門ナト云モノ出來テ、諸事ニ口入スルトキケリ、我信長ニツカヘテ今ニ至ルマテ、戰功凡廿四度ニ及ノ間、誰々出頭ノ事アリト云トモ無心許事（ナシ脫カ）ト語レリト也、

## 〔柴田勝家始末記〕柴田勝家公來歷

往昔勝家公之居館、越前今立郡中新莊村卯之方ょ當る山之麓ょ、東西四町

勝家越前ニ入ル

南北五町計之内、土居堀、矢倉臺、同所北之方ニ五十間計土居堀等ありしか、天正元癸酉年、織田信長卿、同國足羽郡一乘谷之城主朝倉彈正左衛門尉義景公を責亡れ、信長卿ゟ城内之守護として、朝倉家之殘臣桂田播磨守長俊、（初前波九郎兵衛吉繼ト云、）北之莊朝倉土佐守景行之館ニハ、信長卿之三人衆津田九郎次郎、明智十兵衛、木下助左衛門を居置候の處、大坂本願寺之門徒坊主共一揆ゟ起し、（○中略、下間頼清、國中ノ政柄ヲ執ルコトニカヽル、）信長卿一揆退治として、究竟之良臣を引具せらるゝ、同暦三乙亥年八月十二日、御進發あり、同十四日、敦賀へ著陣し玉ひ、木之目口ニハ勝家公之手勢を勝り立、杉津口ゟ忽ニ責破り、同九月上旬迄ニ一揆退治せしむる處、信長卿ゟ中筋八郡ハ勝家公進退すへく、府中邊二郡ハ佐々内藏助、前田又左衛門尉、及勝家公之臣不破彦三司るゝ、大野郡三分二ハ金森五郎八、三分一ハ勝家公之臣原彦次郎、敦賀郡ハ武藤宗右衛門尉成敗ゟなすへく、越前ハ大國ト云、北陸之要道なるゝハ、文武の道德を以て慈悲之忠罰なくんハ、國中農民ニ至迄歸服せす、治國永久ゟるゝらほと、勝家公ゟ告命ゟるれ處、（○中略、頼清、高田派一揆ニ殺サルヽコトニカヽル、）然而惣張本人頼

勝家一揆ノ武器ヲ農具ニ改造セシム

九頭龍川ニ舟橋ヲ架ス

足羽川ニモ架橋ス

近江越前ノ道路ヲ開ク

盛政裏切ストノ説

無準三幅對

清を捕討及平穩之上ハ、一揆黨共之甲冑、鎗、薙刀、太刀、矢之根、鳥銃等ニ至まて、悉く農具ニ鍛ひせて、國中れ諸民へ與へし餘ハ、鎖りニ打せて、同暦六戊寅年三月、九頭龍川舟渡の運賃ゟ除んゝゟめ、國中浦々ゟ四十八艘之役舟を出させ、彼の鎖りを以て舟橋となし、後世ニ至るとも、浦々ゟ舟れ破損ゟ修補せしむる課役之法令を定め置ゟ、足羽川之舟渡も運賃を除んゝゟめ、石と板との掛分ニして、九十九間の橋ゟ掛渡さゝ、又西近江街道とて、海津ゟ敦賀七里半の山中を通り、疋田ゟ木之目峠越へ、二ツ屋宿よりれ往還ゟ、東近江中河内と云所ゟ越前栃之木峠越へ、板取（往昔虎杖ト書、）を云所へ街道往還れ辨路を開き、西近江街道ゟ脇往還とし給ふも、皆是勝家公厚き仁惠を以てれ故也しゝ、同暦十一癸未年、志津嶽合戰之折柄、養息伊賀守勝豐、（或勝令、）甥佐久間玄蕃允成政（盛）等敵方へ裏切して、兩人共虜る之故、羽柴筑前守秀吉ニ責寄らゝ、四月廿四日、勝家公居城之矢倉ニおゐて、自害せしむゝくと覺悟ゟ極められし時、寵臣中村文荷齋ニ（或德庵、）下知し玉ふハ、信長卿ゟ拜領せし諸道具を出させ、大書院れ床ニハ、無準筆三幅對（中達摩、左右龍虎、）之掛物、少書院の

天正十一年四月二十四日

牧溪ノ筆ニ虚堂ノ賛かぶらなしノ花入姨口ノ釜

床よゐ牧溪筆踊り布袋よ虚堂讃の掛物よ、かぶらなしれ花入、唐具之卓に青磁之香爐、廣間よゐ姨口の釜汝始、數多れ器を飾付させらを、其中に信長卿ゟ拝領之時、大國を宛行るにより、大切よ思召下し置ると宣ひし御祕藏之茶入を、汝よ與へる之間、予汝思ひ出し候時ゐ、此茶入よて茶之湯得させよと命しらをしろゐ、文荷齋謹て戴れ、莞爾与打笑ミ、柱へ投付打碎き、恐なゟら一首ニ、〇中略、文荷齋辭世ニカ、ル、前掲太閤記ニ同ジ、と詠せしろゐ、汝も予ゟ供いなすゟと悦ひ玉ひて、〇中略、勝家ノ辭世ニカ、ル、前掲太閤記ニ同ジ、斯詠せらを、即座よ自害なし玉ふ、古跡ゐ福井城内染之門或鳩ノ門、南舛形之所、杉浦某屋敷と而、當時杉田某居住す、然ルよ前來ゐ奇異之事も有けるゟ、何之頃よりゟ彼ノ屋敷之主、勝家公靈魂之石祠を建、毎歳四月廿四日、祭禮式をなす之故、其以來奇異之事もおく、加之國主公ゟも、祭式之節御代拜始り、初穗を供備ありて、神道方粕谷某於靈前祈念をなす也、

右一綴者、

嘉永七甲寅天

〔花押彙纂〕シ之部 柴田勝家

佐々木源左衛門安貞補誌之

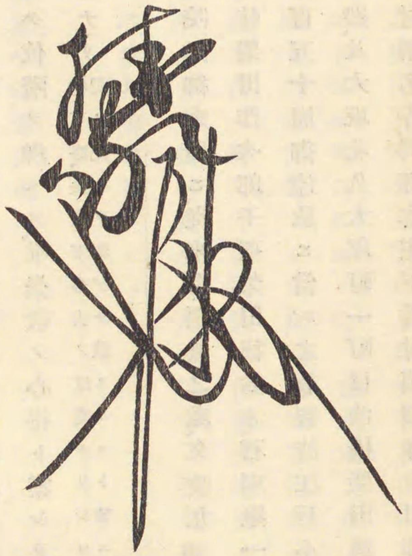


花押

印章

天正十一年四月二十四日

〔印章彙纂〕柴田勝家



〇保阪潤治氏所藏文書（越前）

十二月十九日附徳山秀現等宛

柴田勝家書狀

〇劍神社文書（越前）

天正四年九月二日附織田寺所々名主百姓中宛米錢催促狀

淀殿淺井氏勝家ノ爲メニ冥福ヲ修ス勝家廟所

山中長俊五輪塔ヲ建ツ

作次郎子孫柴田德翁廟所ノ瑞垣ヲ作ル

勝家二百五十回忌

## 〔江州淺井家之靈簿〕

日始觀淨金大禪定門、施主伏見ノ御カミサマ、御志爲柴田殿也、文祿四年卯月廿一日立之、

## 〔柴田勝家始末記〕

摧鬼院殿御廟所五輪塔造建之由緒

山中山城守長俊ト云ハ、慶長之頃ニ至、太閤秀吉公ニ屬シ祐筆ゐるの處、前來柴田勝家公ゐ舊恩之所緣を以、摧鬼院殿之靈骸ゐ五輪塔汶造建シテ、山中山城守ト令彫刻事、

但摧鬼院殿之五輪塔臺座之横ニ、修理亮ヲ修理大輔ト彫刻アルハ、山城守全ク位階ヲ辨ヘス、唯崇敬ノ心得ト察シラル、譯ハ從五位下ニテハ亮相當ナリ、〇下略、長俊ガ秀吉ノ臣屬ナリシコトヲ、太閤記ノ記事ヲ擧ゲテ證スルコト等ニカヽル、

一摧鬼院殿御廟所ニ、從來御園無之處、文政九丙戌年、勝家公之孝子攝刕大坂之住柴田作次郎子孫柴田德翁ゟ、石瑞籬一式獻備有之、後天保三壬辰年、貳百五十周御遠忌ニ當ル之故、親族江戸小川町廣小路御旗本柴田出雲守殿、及大坂北久太郎町一町目法橋柴田德翁、其餘由緒柄當國坂井郡黒目村稱名寺、同郡本庄下番村福圓寺、吉田郡寮村勝緣寺等ゐ前廉及案



勝家ノ木像

作次郎彫刻シテ西光寺ニ安置ス

木像損ス

內置之處、出雲守殿ゟ、書面を以御香奠白銀三枚、法橋柴田德翁ゟ晒大幕二張、紋一ツ雁金ト下リ藤ニ一ツ之字、法橋柴田德翁ト記、一獻備有之、四月朔日ゟ同七日迄大御法會中ニ、國主公御代拜トシテ、御側物頭杉浦雄藏殿を以、御香奠金貳百疋被供、寺社奉行水野善左衞門殿ゟ御香奠金百疋、御城下町年寄共ゟ通札銀百匁、稱名寺ゟ御香資金百疋、福圓寺ゟ通札銀拾匁、勝緣寺ゟ金百疋供備ニ而、各參拜有之事、

### 勝家公御像由緒

勝家公御肖像ハ、文祿年之頃、孝子柴田作次郎攝刕大坂ゐ寓居し、慶長元丙申年ゟ至テ、慈父勝家公之御肖像汶彫刻し、光明山西光寺ゐ安置奉り度、發願之旨趣ニ付、西光寺ゟ國主堀左衞門督秀治公へ訴へしらハ、堂內ゟ安置すへきと令許容之間、作次郎ハ御肖像汶守護して下向し、御開眼之式を執行ひ、堂內ゐ安置し奉る來曆（歷カ）之處、文政元戊寅年七月十一日、山ノ奥横町ト云所ゟ出火之砌、西光寺惣門鐘樓等燒失し、既ゟ本堂可及灰燼程之次第ニ而、御肖像多分損却ほしますの故、弘化二乙巳年七月廿八日、住職眞融上人

徳翁影堂ヲ營ミテ木像ヲ安置ス

參內之折柄、御肖像汰御撥(發)遣之上、奉守護て、柴田作次郎子孫大坂北久太郎町一丁目柴田法眼德翁方へ到著之舊例ゟ泥ミ、御修補之儀を牒し合置之處、嘉永四辛亥年三月下旬、法眼德翁下向汰なし、御肖像を從來之通堂內ゟ安置し奉りてハ、非常之愁汰恐るの間、一寄進を以、境內ゟ新規御像堂奉造營度との志願故、其旨國主公ゟ及達訴之處、許容ゟるに任せ、造營をなし、同曆六壬(癸カ)丑春ゟ至令成就こ付、同三月下旬、法眼德翁御肖像汰奉守護て下向し、四月六日御開眼之式執行ひて、同十日ゟ至迄御遷座之式會中、天保之度貳百五拾周御遠忌之例ゟ任せらるを、國主公御代拜として、御側物頭武曾權大夫殿を以、御簾幷獻香金千疋之外、御祠堂金五兩寄附こ付、右利潤こ而、自今以後御像堂御修復可申上ゟ旨、西光寺及檀越加印之證書規定之上、式會中法眼德翁侍座汰なし、其餘親族江戶小川町廣小路御旗本柴田能登守殿、及由緒柄當國坂井郡黑目村稱名寺、同郡本莊下番村福圓寺、吉田郡寮村勝緣寺等に、前廉及案內置之處、能登守殿ゟ書面を以、御香奠白銀貳枚被供、稱名寺ハ御香資通札銀拾匁供備こ而參拜有之、福圓寺ハ御式會後、使僧を以、通札銀五匁供備あり、勝緣寺儀ハ、自火こ而堂宇悉燒失之折柄故ゟ、終ゟ往答之沙汰無之事、

請取寺納仕祠堂金之事

合金五兩也、　但兩替百三拾匁立、

此銀六百五拾匁

右者今般摧鬼院樣御像堂新規御補理、御尊像御遷座相濟候こ付、爲祠堂金御寄附被成候を、慥こ受取預り申置候、然ル上ゟ年々利潤元計置、不時御破損等出來候共、誠精御修復相加、聊麤略無之樣相守可申候、爲後日祠堂證文相渡候處仍如件、

嘉永六丑年三月

柴田德翁老

光明山
西光寺(岡)印

加印證人

多部五郎右衞門印

天正十一年四月二十四日

西光寺由緒

勝家次郎丸ヨリ北莊ニ移ス

勝家ノ遺骸ヲ西光寺ニ收ム

光明山乘律院西光寺由緒

天台律宗近江坂本西教寺眞盛上人（贈號圓戒國師）開基ニて、延德元己酉年、越前足羽郡一乘谷之城主朝倉彈正左衞門尉（初孫次郎）貞景公、吉田郡岡之保次郎丸村山之手ニおゐて、七堂之伽藍攸建立ゐり、光明山乘律院西光寺と號し、次郎丸、宮地、大畑、河水、奥花谷、西谷六ヶ村之內を以、高三百石之御朱印を賜り、山林ハ吉野藏王權現迄凡二里餘境地之處、天正元癸酉年、朝倉家及滅亡之後、兵火ニ罹るといへとも、柴田勝家公格別之歸依ニて、同曆十壬午年ニ至、足羽郡北之莊ゟ致轉地、東西四十七間四尺、南北二十六間四尺五寸ニて、千二百二十八步幷門前通行道としてて、幅二間二尺五寸、長二十五間四尺五寸之外、畑地東西七間三尺御除地と成、次郎丸村之舊地ハ在來山林之外、東西十八間、南北二十四間ニて、三百六十四步御除地と成之故、一宇を建立して、西光寺と號し、北之莊光明山乘律院西光寺之末となし、左之通禁制札等を賜るといへとも、翌十一癸未年、勝家公志津嶽之合戰敗軍ニ及ふ、四月廿四日、居城之矢倉ニて自害し玉ふ故、其靈骸攸光明山西光寺ニ納ゐて、山中山城守長俊五輪塔攸造建す、

禁制

一寺內殺生之事、
一寄宿狼藉之事、
一剪採竹木事、
右之條々令停止畢、若有違犯之輩者、速可處罪科者也、

天正十年五月　日　勝家（御判）

岡
西光寺

勝家公御父土佐守殿法號
忠勇院殿精智善淨大居士　年號月日不詳、

親族

或書ニ勝家公息男トアレトモ、伊賀守勝豐ト云養子アルヲ考レハ、事實

柴田宮內少輔

勝家ノ父

勝家ノ一族

天正十一年四月二十四日

不詳、

高貳十萬石　加賀尾山城主

（中略、盛政ノ事蹟ニカル、五月十二日ノ條ニ收ム、）

高四萬石　越前勝山城主　勝家公甥　佐久間玄蕃允盛政（卑下同ジ）

（中略、勝政ノ事蹟ニカル、本月二十一日ノ條ニ收ム、）

大野郡牛首村ト云所　江越ス谷峠ニ、監物ノ墓有、

佐久間久右衛門尉安次

柴田監物義宣

同　源六郎實政

天正十一　癸未年、志津嶽合戰ノ圍ミヲ逃出、叔父勝家公落城ノ無念ヲ晴サンカタメ、從弟柴田六之助ト牒シ合、叔父紀州天野郡根來寺ノ住僧粉川法印方　江慕ヒ行、俱ニ旗ヲ靡シ、羽柴筑前守秀吉ト及對戰ノ處、運拙クテ粉川法印討死スルノ故、終ニ不得勝利、敗北ス、

不詳

佐久間帶刀左衛門尉　成政弟

柴田三左衛門尉勝政





一勝家公就自害、佐野之方及末森之方を（或ハ於蝶殿、）家臣上村六左衛門（或ハ太左衛門、）引具し、越前坂井郡里竹田邑ト云所之草菴ゟ退去せし処、六左衛門介錯ゟて生害之時、（中略、佐野方及ビ末森方ノ辭世ニカル、前掲太閤記ノ末森方柴田氏母子ノ辭世ニ同ジ、）

一柴田作次郎遺骸汝葬する所不詳と雖も、光明山西光寺ゟおゐて、摧鬼院殿之廟内ゟ、慶長十九甲寅天正月五日、樂峯淨安居士ト云、五輪形之石碑有、

一柴田伊賀守勝豐（或勝令、）幼息國丸ハ、光明山西光寺ゟ葬するの故、摧鬼院殿之廟内ゟ、天正十壬午年二月三日、法岸顯性禪定門ト云、五輪形之石碑有、

家臣

高三萬石　越前東郷城主、天正四丙子年同國丸岡城移、　安井左近太夫家清

高壹萬石　越前安居城主、　柴田源左衛門尉勝定

高壹萬石　近習　毛受久右衛門尉照景（或茂左衛門、）

近習　毛受勝助勝輝（或吉親、）

高壹萬石

（中略、勝介ノ事蹟ニカル、本月二十一日ノ條ニ收ム、）

高　越前藤鳴郷野中小畑邑ヨリ八町南ノ山戸倉城主、　毛受助兵衛

高貳千石　柴田徳永法印

勝家公就自害、佐野ノ方及末森ノ方（或蝶殿、）引具シ、越前坂井郡里竹田邑ト云所ノ草庵（江）退去ノ後、兩ノ方共生害シ玉フ時、介錯ヲナシ、近寺ノ僧ヲ頼テ供養ヲ遂ケ、施物ニハ兩ノ方ノ衣類ヲ與ヘ、草庵ニ放火シテ自殺ス、　上村六左衛門（或太左衛門、）

勝家公ノ自害ヲ見參シテ後、矢倉（江）放火シ自殺ス、（同ジ、）〇（下略、文荷齋ノ辭世ニカ、ル、前掲太閤記）　寵臣中村文荷齋（或徳菴、）

高千二百石　殉死小嶋若狭守

高千石　同　柴田彌右衛門尉

松本甚（辛カ）五左衛門金次（或兵衛、甚）

同近習中村與左衛門義高（或與三右衛門、）

舟橋奉行下條勘七

舟橋奉行福岡七左衛門



右福岡ノ子孫ハ、越前福井藩中本多飛驒ト云家臣之内、今ニ至福岡七左衛門与名乗居ル、

足輕大將　拜鄕五左衛門（或五助、）

同　一賴（額カ）新左衛門

徳山五兵衛尉

徳山吉右衛門尉

神部兵左衛門

淺野吉兵衛

宿屋七左衛門

原　彦次郎

原　勘兵衛

井上久八郎

井上清八郎

鷲見源次郎

鷲見九藏

不破彦三
青木勘七
長井五右衛門
豐嶋猪兵衛
毛屋新内
近藤右近
杉江彦四郎
富永新六
奥村金次郎
吉田某

〔武功雜記〕八　柴田ガ留守居、柴田彌右衛門、小嶋若狹、中川文庵、（中村文荷齋カ落）ラク齋、德庵、松平甚五兵衛、中川與左衛門也、諸事德庵大形下知仕候由、柴田子兩人アリ、權六、伊賀守、

龜田大隅
溝口半左衛門

〔龜田大隅一代働覺〕一勝家義退（儀下同ジ）治之刻、志津ケ嶽よこの海ニ而太刀打いさし、能首打取候、其時勝家と伊賀と不和ニ被罷成候、我等親溝口半左衛門義本ゟ伊賀家來ニ而、北庄旅屋預り居候へとも、勝家ニなしみ深き故、城ゟ取籠、勝家追腹仕果申候、此段具ニ太閤記六卷目ニ有之、右二ヶ條小足掃部能存候、

〔美濃國諸家系譜〕溝口氏系圖

某　溝口權之助、
某　溝口半左衛門、
某　溝口藏人、仕細川越中守忠興、
某　溝口半左衛門、　住羽栗郡二之森、仕柴田修理亮勝家、天正十一年癸未四月廿六日、於越前國北之庄戰死、五十歳、

○以下勝家室織田氏及ビ其子女ノコト等ニカヽル、

淀殿淺井氏生母織田氏ノ冥福ヲ薦ム

〔淺井家之靈簿〕○紀伊

日照月宗貞禪定尼　淺井

（長政）備前守殿御内儀、
（淀殿淺井氏）大坂二丸樣ヨリ御志、
天正十一曆四月廿四日、

○淀殿淺井氏、其父長政ノ冥福ヲ修セシムルコト及ビ長政竝ニ織田氏ノ像ヲ描カシムルコト、元年八月二十九日ノ條ニ見ユ、

〔諸寺過去帳〕中高野山過去帳

天正十一年四月二十四日

天正十一年四月二十四日

信長公妹初淺井備前守長政妻、後柴田修理亮勝家妻、

天正十一年四月二十四日、於越前北庄自害、照月宗貞、

〔十竹齋筆記〕一

信長公妹、淺井長政妻、後柴田勝家妻、

昭月宗貞禪定尼天正十一年四月二十四日生害、

〔寛政重修諸家譜〕四百八十八 織田

信秀彈正忠、備後守、

勝家室織田氏ノ姉妹

信長○以下男子略ス、

女子 淺井備前守長政が室となり、のち柴田修理亮勝家に嫁す、

女子 神保安藝守氏張が妻となり、のち稻葉右京亮貞通に再嫁す、

女子 犬山銕齋今の呈譜哲齋、が妻、

女子 飯尾隱岐守信宗が室、

女子 佐治八郎爲興に配し、後細川讃岐守昭元に嫁す、

女子 苗木勘太郎某が妻、

女子 乃不九郎某に嫁す、○織田氏兄弟姉妹ノコト、天文二十年三月三日ノ條、天正十年六月二日及ビ同年九月八日ノ條等ニ見ユ、

柴田勝家室織田氏畫像

和歌山縣高野山持明院所藏

原寸 縦〇・四二

勝家室織田氏ノ姉妹

〔十竹齋筆記〕一

信長公妹淺井長政妻、後柴田勝家妻、昭月宗貞禪定尼 天正十一年四月二十四日生害、

〔寛政重修諸家譜〕四百八十八 織田信秀 彈正忠、備後守、

―信長〇以下男子略ス、

―女子 淺井備前守長政が室となり、

―女子 神保安藝守氏張が妻となり、

―女子 犬山銕齋今の呈齋譜が妻、

―女子 飯尾隱岐守信宗が室、

―女子 佐治八郎爲興に配し、後細

―女子 苗木勘太郎某が妻、

―女子 乃不九郎某に嫁す、〇織田ノ條、天等ニ見ユ、

明院所藏

原寸 横 〇・四二二米

勝家室織田氏ノ姉妹

〔十竹齋筆記〕一

信長公妹、淺井長政妻、後柴田勝家妻、

昭月宗貞禪定尼 天正十一年四月二十四日生害、

〔寛政重修諸家譜〕四百八十八 織田

信秀 彈正忠、備後守、

信長 〇以下男子略ス、

女子 淺井備前守長政が室となり、のち柴田修理亮勝家に嫁す、

女子 神保安藝守氏張が妻となり、のち稻葉右京亮貞通に再嫁す、

女子 犬山銕齋 今の呈譜哲齋、が妻、

女子 飯尾隱岐守信宗が室、

女子 佐治八郎爲興に配し、後細川讃岐守昭元に嫁す、

女子 苗木勘太郎某が妻、

女子 乃不九郎某に嫁す、〇織田氏兄弟姉妹ノコト、天文二十年三月三日ノ條、天正十年六月二日及ビ同年九月八日ノ條等ニ見ユ、

柴田勝家室織田氏畫像

和歌山縣高野山持明院所藏

原寸　横　〇・四二米

明院所藏

原寸　横〇・四二三米

女子　[illegible]

女子　[illegible]

女子　乃不九郎某に嫁す○[illegible]

[illegible]修理亮勝家に嫁す、

[illegible]右京亮貞通に再嫁す、

[illegible]元に嫁す、

[illegible]

[illegible]ノコト、天文二十年三月三日[illegible]十年六月二日及ビ同年九月八日ノ條

[illegible]

織田氏ノ子女

お市

秀吉織田氏ヲ娶ラント欲ス

織田氏ノコトニ因リテ勝家

〔織田家雜錄〕

淺井長政
- 一淀殿 秀頼母、
- 二常高院 京極宰相高次妻、若狹守忠高母、
- 三崇源院 大猷公御母堂、

此三人母信長公妹、

信長公ノ御妹淺井殿ヘ御輿入候ヲ、お市と申候也、

〔豐臣太閤素生記〕

小谷御方 信長公妹、初淺井ニ嫁、女子三人、後勝家ニ嫁、勝家ト一所ニ生害、

- 女子 秀吉公別妻、淀ノ御方、幼名チヤ〳〵、秀頼母公也、
- 女子 高次京極宰相妻、無子、後ノ宰相ハ繼子ナリ、
- 女子 幼名コウ、尾刕左(佐治)地與九郎ニ嫁、無子、秀勝ニ嫁、女子一人、後台德院殿ニ嫁、崇源院ト號ス、〇本書、秀忠室ト細川信良室トヲ混同セリ、

〔十竹齋筆記〕三

一信長公ノ妹淺井長政寡婦艶レイナリシヲ、秀吉公聞及、何トソ手ニ入度思ワレケル處ニ、柴田ハ三七信孝トヨカリケレハ、幸ニ信孝ト一所ニカノ寡婦居ラレシヲ、勝家モライケルユヘ、秀吉公ト不

天正十一年四月二十四日

和ノ種トナル、柴田一所ニ自殺ナリ、

ト不和ニナル

おいち

長政ノ三女

男子萬福

長政室織田氏三女ト共ニ信長ノ叔父ニ頼ルトイフ

三女ヲ伴ヒテ勝家ニ配ス

## 〔溪心院文〕

一 (京極高次妻) 左、やう(樣)高院様(長政)あさ井殿(淺アルカ)とのさはこて御さ候、御ぬさりさはいのふ長さはの御れとこ〻こて、なめさは御いちさはと申、あさいさはゐ、京極の御おられよて候へとも、京極さは御いとけおふして、御身おしこと成まいらせらを候時、あふミ國のこらにあさゐさは御をやうよて、京極さはゐ御ちんおもものことく御をてをし、馬のかいをうとをを進上おうを候ゆへよ、京極さい相様とはう六万石よて、大津御城よ御さおされ候、ゐさいさはよ御ひめさはゐ御三うさい、大さうの御ぬ(淺脱)くろさは、左やう高院さは、大御(秀忠妻)臺様よて御さ候、まんふくさはとて若子さは御座候ゐ、あさゐ殿をのふ長様お御つふしのとき、あさい殿御同事よ御こしおい(ママ)との御おと、御いちさはと御なめさは御三うさい、のふ長様のおちこさはの御うさへ御のけおされ候よし、其後のふ長さは御ゐつゐひよて御座候、御をやさはうさとおさも御なのミ子さは、大御臺様こゐ御うふゐのうなのよし、御いちさはを左とさ殿こ御やをおし、御ひめさは御三方も御同道ゐきれさ候而、又左とさ殿をと左はちくせんの守殿御はふ



三女ノ年齢

織田氏自筆ノ消息ヲ以テ三女ヲ秀吉ニ依頼ス

織田氏ノ容貌

しかさを候、左とさ殿くつを候ゐ、御なめさは御十三、御十一、御九つのよし、左とさ殿御申こゐ、御いちさはよ御ひめさはうさ御同道こて御出おさを候へと、たつて御申候へとも、御いちさは仰よは、あさい殿時分出さ(較カ脱)せられさへ御くやしく候よ、何とて御出あるへきや、左とさ殿御一所との御事こ而、御ひめさはうさい御出しおさをうし、ちくせん守殿ゐのふ長公御かうおんの御人よて候間、あしくゐめさおましく候ゐゝ、ちくせん守殿へ御ゐのミおさを候半とて、御いちさは御ちひりこて御書を御そへおされ候、御ひめさは御うさを御こし壹つこ御めさせまし、女中のこらにとうゝよて御供いさし候へとも、初て御三ノ間まて御おくりあそとし候、との外御うつくしく、御とし頃ゐ御若こ御廿二三よもミへさせられ候との事、てきのちんもえも、おくさはうさ御出とてとつとおらき、御こし女中をとおし申候との事、御いちさはゐ左はさ殿御一所こ御おとをを被成との事、御ともの女中二三人との事、

## 〔以貴小傳〕

御所(秀忠)乃御臺所ゐ贈中納言藤原長政卿淺井備前守の御事なり、乃御女よて、御諱ゐ達子と申に、御母ゐ織田右府信長の御妹也、諸書におる所ミお妹といふ、然るよ溪心院といふ

織田氏ハ信長ノ從姉妹ナリトノ說

長ハ秀吉ノ側室トナル

末ハ德川秀忠ノ夫人トナル

女房の消息を見しに、信長乃いとこなりといふ、もしハいとこにておハせしを妹と披露して、長政卿にをくらせしにや、御兄右府乃はあらひにて長政卿に嫁し、姫君三所をはうに給ふ、長政卿越前乃朝倉をたけて、織田殿にそむかせしかは、はゐに近江國小谷の城にしてほろひ給ふ、室家小谷乃かたへ、織田殿の許に歸て給ひしに、家人柴田修理亮勝家に賜はりしあへ、姫君達をともなひて、越前國北乃庄にうつりたまふ、天正十一年の夏、勝家、羽柴筑前守秀吉のために、近江國志津かたけにたゝかひまけて、北の庄に逃歸り、はらきつてうせぬ、此時に小谷の方へ、息女とをもに落給へと、勝家をさすらいをめ給ともさらに聞いませして、ともにむかしくなて給ふ、子達のとへ、筑前守れもとにわたさるゝし、織田殿厚恩をうなし人なれへ、よもはしくへし給はしとて、みつあら文かきてはつらへ、姫君三方をおしひとつにめさせて、女房達も殘らせ添て城より出し給ひしかへ、敵の兵ともゝなあをあなて通しかり、秀吉息女達をむかへとりて、とにはいたはかしはきぬ、其後時うはて世あらたまりて、姉君へ豐臣太閤秀吉乃おもひものとなて給ふ、淀殿と申をしへ是なり、次へ京極乃宰相高次の室となりて、後に常光院殿と申をしへ是なり、御せゑへ御臺所にておはします、太閤いはきかしはきにいらをて、文祿四年乃九月、御所にあはせ參らに、後に大御臺所と申奉る、大猷院御所を始め奉りて、若君姫君はまたはうなさせ給へて、○下略、一說トシテ、秀忠夫人淺井氏、始メ佐治一成ニ嫁シ、後羽柴秀勝ニ再醮シ、更ニ秀忠ニ嫁ストイフコトニカヽル、柳營婦女傳系、玉輿記大抵同ジ、

織田氏ノ法名

〔柴田勝家始末記〕北之方お市殿或小谷之方、

初淺井備前守長政室之時、女子三人はりしか、長政滅亡れ後、勝家公に再入輿はりて、彼ノ三女子も厄介と成玉ふの處、勝家公自害れ砌、酒宴を設らる席にて、お市殿へ宣ふへ、當家へ入輿ありて纔の年月に付、其許へ羽柴筑前守秀吉の爲にへ、主家之事に候得へ、麤略にへ致間敷之間、三人れ女子を伴ひ、出城に及ま候樣と進め玉へへ、今更公を見捨參らせて、出城いたすゝれ哉、俱に死手れ山路を越へ、同し蓮れ臺に座せんとて、三女子に家臣富永新六、奥村金次郎を差添らま、秀吉の方へ差向らるまへ、毛頭麤略にへ仕間敷との返答ゆへ、勝家公れ自害を見參はり、續く生害し玉ふ、○中略、織田氏ノ辭世ニカヽル、前掲太閤記ニ同ジ、

法號　自性院殿微妙淨法大姉天正十一癸未年四月廿四日、壽三十七、

織田氏ノ遺骸ヲ足羽郡木田ノ自性院ニ葬ル

右

葬如意輪山自性院、洛陽大佛養源院ニ石碑有、

自性院殿之靈骸ゟ、光明山乘律院西光寺末足羽郡木田赤坂岡山（或ハ佛光寺山ト云）ヲ、後世誤テ分光寺山ト云、如意輪山願應寺自性院（往昔紫雲山佛光寺、）に葬するの處、故有て本寺西光寺ゟ離末ゟるし、武劦東叡山寛永寺直末と成之後、舍堂火災ゟ罹りて、數多の位牌過去帳を始、墳墓ニ至迄悉及灰燼之故、其以來西光寺ゟおゟて、自性院殿之安置（脱アルカ）せしゟ、自性院ハ同郡同所西屋敷と云所ゟ令轉地事、

○織田氏、淺井長政ニ嫁スルコト、永祿七年是春ノ條ニ、信長ノ許ニ歸ルコト、天正元年八月二十日ノ條ニ、勝家ニ再醮スルコト、同十年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

## 羽柴秀吉、越前安居大渡船頭ノ諸役ヲ免除ス、

〔越藩古書留〕

當渡船之事、如有來申付上者、諸役以下令免許者也、

天正十一四月廿四日　筑前守秀吉花押

（足羽郡）あこ大渡船頭中

御朱印覺書

一此朱印之儀は、天正十一年未四月二十四日、柴田勝家公落城之節、太閤樣幷前田美作守、越前福井庄愛宕山天魔池御陣取被遊候時、毛矢河戸に而、御使番舟越被爲成候節、私共所持之舟にて御用相勤候節、御褒美有之、御朱印被下置、永々諸役免許被仰付候御朱印に御座候、右御朱印御先代樣御高覽有之、殊に貞享二年丑五月九日、松平兵（吉品）部大輔樣一（マヽ）光山へ御通被遊候節、當所之御印可被爲成旨、被仰付候故、金屋村路邊に、年寄共御印を持罷候處、早速御披見被遊、松平勝兵衞殿、八木平六殿御取次にて、御前より、以後彌重寶に可仕旨御意之由、其上爲御褒美、鳥目被下置旨被仰付、則御鳥見半田嘉兵衞御取次にて、鳥目壹貫文頂戴仕候也、

貞享二年丑五月九日　安居小渡村

## 上杉景勝ノ老臣直江兼續、信濃ノ士大日方佐渡守ニ書ヲ遺リ、屋代城主屋代秀正ノ離叛ニ依リテ、景勝信濃ニ出馬スト報ズ、

〔大日方文書〕○信濃

來札本望之至候、仍而今度屋代逆心ニ付而、與風御出馬候、然者其地用心堅

固ニ候之由肝要候、不及參陣、其元ニ有之御番專用候、猶期後音候、恐々謹言、

（天正十一年）卯月廿四日　直江　兼續（花押）

大日方佐渡守殿　御返報

○秀正、信濃海津城ヲ去リテ、家康ニ屬スルコト、三月十四日及ビ四月二日ノ條ニ見ユ、

## 上杉景勝、蘆名盛隆ノ臣越後赤谷城主小田切彈正忠ニ、近ク新發田ニ出陣セントスルヲ告ゲ、仍リテ、盛隆及ビ彈正忠ノ援助ヲ請フ、

〔上杉年譜〕二十八　景勝八　（天正十一年四月）同月廿四日、會津城主蘆名盛隆ノ家臣小田切彈正忠所ヘ仰下サル、去冬盛隆ト隣好ヲ相結シ砌、脚力ニ預ルトイヘトモ、是ヨリハ音耗疎絶タルニ依テ、今般御使トシテ鴎閑齋ヲ以テ仰遣レケルハ、上口、信州表ノ仕置ハ今既成就ス、此ヨリ新發田ニ出馬シテ、凶徒ヲ誅罰スヘキ條、盛隆ニモ彌入覓此アル樣ニ諷諫有テ、各同前ニ走廻リ肝要タルヘシ、抑小田切カ居城赤谷ハ越後通路ノ地ナレハ、特ニ懇ニ仰越サル、其御書云、

其以來不能書面候、去冬盛隆以（マヽ）降意（ヽ）脚力之躰候、終不及使者之條、今般以



鴎閑齋申屆候、仍上口信州表仕置成就之間、下郡出馬令議定候、不相替盛隆御入覓之樣、皆々諷諫任入之由申越候條、定不可有別儀候歟、各同前肝煎任置候、猶可有彼口上候、恐々謹言、

卯月廿四日　景勝

小田切彈正忠殿

○景勝、盛隆ト好ヲ通ズルコト、十年十一月一日ノ條ニ見ユ、

## 二十五日、（丁丑）羽柴秀吉、進ンデ加賀ニ入ル、北陸ノ諸將風ヲ望ンデ降ル、秀吉、乃チ前田利家ニ石川、河北二郡ヲ與ヘテ、金澤ニ治セシム、

〔加能越古文叢〕三十九　加賀　○（能美郡）去廿五日、小松之城我ら（前田利家）請取、久太（堀秀政）へ相渡候、人數足弱以下千代（能美郡）まて遣し、彼城ニ我ら八十人計付置、翌廿六日至宮腰著陣候、金澤城今日（二十七日）可相果樣子ニ候、○秀吉、利家ヲ遣シテ、加賀ノ諸城ヲ降スコト、五月十一日ノ條ニ見ユ、方心（富田景政）中令察、一入笑止ニ思候、虎口之儀ニ候間、無是非事ニ可有分別、一段かひ〳〵しき働の由承り、尚以不便不得申候、尚以、爰許悉く落居候、樣體無頼の義共、羽筑我らへ一段入魂候間、可心易候、

天正十一年四月二十五日

秀吉二十八日金澤ニ入ル

金澤ニ抵リテ國々ノ處分ヲナス

上杉景勝質ヲ出シテ降ル

能登加賀越中マデ平定ス

四月廿七日

右は利家卿より富田治部（景政）左衞門へ賜る親翰也、

〔西村小六氏所藏文書〕

越州儀者不及申、賀州、能州、越中まて任存分候、長尾人質爲可相卜、今日越中境目至金澤城相越候、○上下略、卯月二十八日附、國司右京亮宛、秀吉書狀、全文ハ本月二十六日ノ條ニ收ム、

〔毛利家文書〕三

一廿五日賀州へ出馬、諸城雖相踏候、筑前守太刀風ニ驚、草木まても相靡體まて候之付而、越中境目金澤と申城ニ立馬、國々置目等申付候內ニ、越後長尾（上杉景勝）出人質、筑前次第令覺悟候之條、令赦免、○下略、秀吉、安土ニ歸ルコトニカヽル、五月七日ノ條ニ收ム、五月十五日附、小早川隆景宛、秀吉書狀、全文ハ五月十五日ノ條ニ收ム、

〔遊佐落合覺書〕輝宗公

遠藤山城（基信）ニ被仰付、秀吉公へ山城私ニ以使札馬を指上候ニ付、秀吉公御返書之寫

○上略

一從其直加州へ出馬候處ニ、諸城相抱候者、秀吉太刀風ニ驚、草木迄なひきしこうふ躰こて、能州、加州、越中迄平均相果候、依之越中之境目金澤ニ立馬、國之置目等申付候內ニ、越後長尾人質被出候條、令赦免候、至今日無異儀事、○中略

七月二日　秀吉

遠藤山城守殿　○全文ハ十三年七月二日ノ條ニ收ム、

右ハ天正十三年七月二日之御書ニ可有御座候、○下略

〔淺井文書〕○尾張

尙々、御懇札畏入存候、委御使可被申入候條、不能巨細候、以上、

御狀披閱本望之至候、依柴修不慮ニ敗軍候、筑州御入國ニ付而、國中早速相靜、則加州へ諸勢被打入候、又左（利家）殿も父子共同前之事候條、可御心易候、正淸樣無何事候旨、尤珍重存候、恐々謹言、

五月朔日　家延（花押）

奥村彌左衞門尉　家延

淺井藤次

叛クモノハ擊チ降ルモノハ

淺井□（藤）次殿　御返報

〔秀吉事記〕柴田退治

二十五日（四月）、秀吉加州有ニ出馬ニ、叛者討レ之、降者近レ之、山川澗岳難所之地、如ニ草葉隨ニ

利家利勝父子秀吉ニ從ヒテ加賀ニ入ル

奥村家延

近ク新屬國ノ掟ヲ定ム

利家ヲシテ金澤ニ居ラシム利家内々秀吉ニ志ヲ通ズ

金澤城ニ石川河北二郡ヲ添ヘテ利家ニ與フ

小松城主德山秀現利家ニ頼リテ秀吉ニ降ル



風、一篇歸服、故越中境目金澤城成滯留、北陸新屬之國々改掟專政道、其刻越後守護長尾喜平次景勝、秀吉成降屬幕下之條、取人質、○上下略、勝家、自殺スルコト及ビ秀吉、安土ニ歸ルコトニカヽル、本月二十四日及ビ五月七日ノ條ニ收ム、

〔豐鑑〕二　袖露

おきよわ秀吉加賀國尾山（金澤）ゟ至、此所ゟ前田筑前守利家を置て守らせ給ふ、うきハ柴田と同敵ゟてありしうとも、昔よりれよしミ深うりなわ、内々秀吉ゟ心さしを通しなれハ也、○上下略、勝家、勝豐ヲ疎ンズルコト及ビ秀吉、惟住長秀ニ越前、加賀ノ地ヲ與フルコトニカヽル、十年十二月二十日及ビ本月二十七日ノ條ニ收ム、

〔太閤記〕六　賀州表御出勢之事

（四月）廿六日にハ、加賀國御仕置乃きめ下向有しう、五三日滯留し、利家に金澤之城ゟ、石川、河北兩郡を相添賜ま、○下略、秀吉、長秀ニ越前、加賀ノ地ヲ與フルコトニカヽル、本月二十七日ノ條ニ收ム、

〔川角太閤記〕二ノ下　一、○中略、勝家、自殺スルコトニカヽル、本月二十四日ノ條ニ收ム、次の日（二十五日）、加賀國ハ被成御入候、小松乃城近き所ゟ、御陣を被居候處ゟ、小松の城主德山五兵衛（秀現）、前田又左衛門殿ゟ取付、とや城明渡し可申候、又左衛門殿御請取被成候へと、使者を立候事、

秀吉盛政ノ居城尾山ニ急グ

勝家ノ跡ヲ惟住長秀ニ與ヘントス

尾山城降ル

秀吉蜂須賀正勝ヲ遣シテ留守居ノモノヲシテ城外ニ立退カシム

一又左衛門殿、小松の城別條ゟく御請取候、又左衛門殿、秀吉ハ城主德山五兵衛事、無別儀城相渡し申上候、可被成御對面候哉と御伺候處ゟ、又左衛門殿ハ御意ゟゟ、先々同國お山れ城佐久間玄蕃居城ゟ可被成御急候、德山儀者、重而之談合こ可仕候との御意也、御分別ゟハ、柴田跡職をは、丹羽五郎左衛門殿ハ可進候う、德山も十二万石なれゟ、其まゝ被置候へハ、五郎左衛門殿へ被進候國ゟ疵付と思召御分別なり、それより直ゟ佐久間玄蕃居城ハ御急被成候處ゟ、お山れ城玄蕃留主所より使御座候、其樣子ゟ、玄蕃事御合戰場ゟ、いつ地ともなく落行候間、此城無左右明可渡との事也、小松とお山との中間ハ八里也、さらハと御意候て、それ日七里人數御おし候て、先手も御陣取のゐさまに陣取候へよと御意候て、蜂須賀彦（正勝）右衛門御使として、玄蕃留主居へ之御意ゟゟ、扨ハ玄蕃事ゟ、城ハ不歸候哉、一里是ゟひあへ候ハ、玄蕃家中乃下々迄れ妻子を、無相違のなさせんうため也、家財其外可被遣候間、一先面々の知行方ハと被仰遣候得と、留守居、扨ゟ面々の妻子共の悦申事不勝計、忝ありま申候事、

一御使たち申其日より、明日一日ゟ悉妻子を退、角と申上候、翌日三日目ゟ

長連龍降ル

秀吉連龍ヲシテ知行ヲ安堵セシム

秀吉能登ニ入ルト說佐々成政秀吉ノ來攻ヲ待ツ

秀吉末森城ノ修備ヲ利家ニ命ズ

利家秀吉ニ成政ヲ擊タンコトヲ勸ム秀吉長篠役ノ例ヲ引キテ成政ヲ攻メズ



玄蕃城お山れ城御請取被成候處ニ、能登より長九郎（連龍）左衛門自身加州小山ゟ祗候被仕候、切腹被仰付候共、命可被成御助共、御諚次第とて被參候、此上者只今れ持かゝ事の知行ニて、前田又左衛門と一味可仕候との御意ニて、命たもかゝれ之事らに、御知行迄居城ゟ安堵被仕候事、

一おもより能登を御覽被成、御仕置可被成と思召、能登ゟ御陣を被替候處、越中の國佐々内（成政）藏助覺悟ニハ、扨ゟ我國ゟ秀吉亂可入事ハ必定也、今日迄ハあのせゐれ秀吉天道よれよか、我國ゟ入からハ、合戰ゟも及ふまし、棒打ふして追立、ふミにふさん事ハ案れ内也、おもを天下へ切上らん事、何の子細ゐ可有と、いまやおそしと矢しりをかミ、秀吉ゟ待被懸候事、

一秀吉能登國中御見及被成、越中との堺目末森れ城、是を取立よ、扨まさ七尾乃城以上城二ツ御見及被成、委敷樣子は前田又左衛門へ被仰含候事、

○利家、末森城ヲ修シ、奥村永福ヲシテ、之ヲ守ラシムルコト、五月十一日ノ條ニ見ユ、

一前田又左衛門殿被申上候者、此御いきおひニ越中ゟ御取掛被成、内藏助御退治尤と被申上候、秀吉御返事ニゟ、其儀ニて候、思出したる事れ候そや、おもをいゐニと申に、天正三年亥れ年五月廿一日ゟ、甲斐れ國武田四

成政ハ剛ナル上ニ手利ノ上手

位詰

加賀半國ト能登トヲ利家ニ

郎勝頼と、三州長志野ニおゐて、信長公御合戰被成候時、頸數一萬三千餘討捕被成候を、貴殿も御供故、能々御存候ことく、其まゝ甲斐の國ゟ押込可被成ゟと、我も人も存候處、さゐ無御座候て、おもより御歸陣被成候事ハ、御きおひ御利運此上ゐなきと被思召、あやうれ時ゐ、必天魔乃所行もや有かん、一ツニゐ五三年も此まゝ被捨置候者、國ニ謀叛も出來、家中もまち〳〵にならん事を聞し召被出候者、それ時御馬を被出、可被成御退治との御分別と相聞え申候事、

一又左衛門殿を、皆々被聞候へ、勝家ニ打勝候へ者、秀吉も案堵不過之候、其上乍心まん氣を出來候ゟと覺候、其上下々以下ニ及ふまて、かつゐれる躰、とや〳〵いさミ悅、興ゟ乘もお躰なり、佐々内藏助ハ剛なる上ニ、手聞の上手也、合戰のならひかれと、人數れ多少ニハよらさに物也、是より一先引とり候ハん、其内ニ秀吉にれり出候者、くらいにめニ成候ハんと、内藏助も、又ゐ家中の者も思ひ可出事必定也、左候ハゝ、家中ニも謀叛者出來候ハん、何事ニも付候へ、身れ危見ゆおゐ、いきおひの過ぬ所也とて、さらハ引とり可申とて、加州お山の城ゟ被成御入候、加州半國、能登一國、前

天正十一年四月二十五日

田又左衛門利家ゟ被進之候、能登ゟ内長九郎左衛門ニ被仰出候旨者、前田又左衛門ゟ被付置候、何事を利家次第との御意也、

一佐々内藏助殿ゟ、一合戰ゟまくり付へきをれをと被思ゐるゟ、秀吉御引取被成候を見及、力をおとされ候と相聞申候事、

〔前田創業記〕上　因秀吉到加州金澤、守兵請赦宥降、秀吉入城、佐々成政亦恐懼秀吉權勢、以女爲質約盟、從秀吉剏々畏、秀吉亦收公之先領府中、割加州而賜河北、石川二郡於公、而歸大坂、（ママ）〇上下略

〔加賀金澤前田家譜〕一利家事蹟　秀吉、利家ニ謂テ曰、君宜ク河北、石川二郡ヲ幷セ領シ、尾山ニ徙リ治スヘシト、秀吉退テ左右ニ語リ曰、前田氏以テ敵ト爲セハ、勍ニシテ當リ易カラス、以テ與國トナセハ、終始賴ムヘキナリ、佐々成政越中ニ在リ、反側尤モ信ナキ者、今余レ前田氏ヲ尾山ニ置ク、復タ北顧ノ憂ナシト、乃チ振旅シテ還ル、是ニ於テ利家遂ニ尾山城（今ノ金澤）ニ徙リ、佐久間氏ノ苛政ヲ蠲キ、寬簡ノ治ヲ施ス、統內ノ者悅服ス、〇上下略、利家、秀吉ニ降ルコト及ビ利家、能登末森城ヲ永禄ヲシテ之ヲ守ラシムルコトニカヽル、本ヲ與フ



秀吉利長ヲ松任ニ封ズ

秀吉利家ノ女ヲ養フ

佐久間盛政利家ヲ疑フ

利家ノ言ニ聽カバ賤ノ戰ハ勝利ナリシナルベシトノ說

石川北二郡ノ加增

利家ハ賴モシキ人

成政ハ表裏者

〔加賀金澤前田家譜〕二利長事蹟　利家加州ヲ定ム、羽柴公、利長ヲ松任四萬石ニ徙シ封ス、〇上略

〔利家夜話〕上　一秀吉公ゟ利家卿御息女樣備（宇喜多秀家）前中納言殿へ御座候を、御幼少より御養子ゟて御座候故、殊ゟ利家卿能登の國の御主なれゟ、柴田殿ゟゟひなくてゟ不叶候、然は甥佐久間玄蕃殊之外利家卿を疑ひ申候、然共御侍はくに候へゟ、謀叛の御心ゟなく候、就夫前田（佐久間）玄蕃、荒木瀨兵衛城を攻候時、利家卿御指圖のごとくに仕候得ゟ、修理殿勝軍に可成を、疑ひ候て、玄蕃ゟ利家卿の御言葉を不聞入候ゆへ、如案負に成申候、其段秀吉公能御聞被成候故、又左衛門さりとてゟゐめしすくゟを大將也、味方にしても賴母敷人と御意ゟて、結句越前、加賀御手ニ入、北國押ゟ又左衛門殿賴入由御意ゟて、加州石河、川北二郡を利家卿へ御加增ゟて、御歸城被成候由、御物語候事、

〔村井重賴覺書〕一其時秀吉公御意ニ、又左衛門と申仁ゟ、てきにすをゟ六ケ敷ゐいて、味方こすれゟたのもしき仁ニ候、もろおやと言、殊ニ佐々内藏介越中をもち有之候、彼ものひやうりものニ候間、其おさへと存よし

天正十一年四月二十五日

府中城ヲ惟住長秀ニ渡ス

御意ニて、加賀國石川郡、河北郡二郡ヲ利家公へ其時加增ニ被遣候、其時府中御城を越前守(惟住長秀)殿へ可ㇾ渡ㇾ之由ニ候故、まつとうにて六萬石、孫四郎利長(勝)へ加へ地ニ渡り申候事、

利家ヲ以テ成政ノ押ヘトス

利家公右ニ至ル間ノ戰功ノコトニカ、ル、之後ハ越前府中御拜領、御人もちニ被爲成、度々御手柄、其後能登國御拜領候て、度々御手柄共、扨又やなり御陣相濟、加賀國石川郡河北郡二郡御加增御取候て、佐々内藏介おさへと秀吉公被仰出、其後内藏介無本(謀叛)ノ時、度々ノ利家公御手柄共不及申候事、

利家能登ヲ信長ヨリ預リ秀吉ヨリ與ヘラル

〔長家聞書〕ニ　一利家ハ、天正三年ニ越前府中を、不破、佐々三人ノ、十万石領ス也、天正八年、能登國ヲ利家、信長公ゟ預り、秀吉公ニ拜領也、天正十一年ニ、加賀之内石川、河北拜領と云、此時迄府中ニ在住也、此時加州利家江一家引越と云、何茂金澤へ相越、利家松任ニ茂ゐらく有之由也、津幡ニ前田右近大夫(秀継)有之ト云、末森ニハ奥村(永福)、長佐、千秋(範昌)有ト云、

〔横山家譜〕○上略、長知、柳瀬陣ニ功ヲ樹テ、利長ノ麾下トナルコトニカ、ル、本月二十一日ノ條ニ收ム、

○上加賀　横山山城守長知

公領内越前府中ヲ除キ、賀州石川、河北二郡ヲ賜リ、金澤及ヒ松住(任下同ジ)ノ城ヘ、利家公、利長公各渡御シ給ヒ、長知、利長公ニ屬從シ、移テ松住ニ居住ス、此ニ奉仕スル時、初テ食祿ヲ拜受ス、員數等末ニ記ス、及ヒ長知母弟妹、大野ヨリ松住ニ移ス、

横山長知利勝ニ從ヒテ松任ニ居ル

○利家、秀吉ニ降ルコト、本月二十二日ノ條ニ、上杉景勝、質ヲ秀吉ニ致スコト、七月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十六日秀吉金澤ニ入ルトノ說

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕十　勝家自殺信孝衰滅、付誅佐久間盛政、柴田權六、幷瀧川一益服從部

廿六日(四月)、至ニ賀州尾山ニ暫留滯、今按、四日也、雖レ恚ㇾ前田利家登ニ能州一、今般屬ニ勝家一敵ㇾ秀吉、依レ察ㇾ爲ニ其隣一勝家、不レ得レ已一旦屬ニ彼猛威一敢非ㇾ其素志一、使レ之先略ニ金澤城一以ニ其功忽成ニ賞之一、添ニ加賀之内石川、河北兩郡及金澤城一、以ニ封利家一、恰髣髴ニ高帝先封ニ雍齒一而克定ニ群侯之志者乎一、故利家自ニ能州一始徙ニ于金澤一乃使ニ前田五郎(安勝)兵衛、利家同孫左衛門(利好)、後號播磨、高畠織部(定吉)、後號石見、中川清六(光重)、後號武藏、長九郎(連龍)左衛門等三千兵一留ニ七尾一以守ㇾ能登一、越後長尾景勝又知ニ其鋒不ㇾ可ㇾ及ニ秀吉一、忽出レ質降參、於是北陸

今按、時治ニ能登國一城ニ七尾一、今般屬ニ勝家一敵ㇾ秀吉、依レ察ㇾ爲ニ其隣一勝家、不レ得レ已一旦屬ニ彼猛威一敢非ㇾ其素志一、使レ之先略ニ金澤城一以

利家金澤ニ移リ前田安勝長連龍等登能シテ守ラシム

盛政ノ舊領ヲ利家ニ與フ

德山秀現利家ノ家臣トナル

金澤

尾山八町

道悉平均、○上下略、秀吉、毛受勝介ノ遺族ニ地ヲ與フルコト及ビ秀吉、長秀ニ越前加賀等ノ地ヲ與フルコトニカヽル、本月二十一日及ビ同二十七日ノ條ニ收ム、

〔越登賀三州志〕沿革圖傳　天正十一癸亥年圖譜○圖略ス、

石川河北二郡　高德(利家)公御領分黃色、

今年四月二十六日、佐久間盛政ノ舊領及尾山城ヲ秀吉公ヨリ賜之、此時改尾山、名金澤城、

石川郡ノ內松任　世子瑞龍(利勝)公御領分薄紅色、

今年四月二十六日、志津ケ嶽役以後、當先城主德山則秀(秀現)、○川角太閤記ニハ、秀現ハ小松城主ニ作ル、高德公ノ御家臣ト成、依テ當城松任四万石ヲ、秀吉公ヨリ瑞龍公ニ賜フ、此時松任ノ石高初テ見ユ、

〔越登賀三州志〕二十五來因槩覽附錄二　國府沿革幷街巷來因

按スルニ、天正十一年、國祖當城ヘ始封ノ比ハ、其街狀今日ニ似者ナシ、農里ノ編戶ノ若シト、其餘波今モ枯木橋畔革工ノ徒住存ス、或云、佐久間氏ノ時、此邊街尾也ト、枯木橋ハ正保ノ比マテハ、丸木ヲ竝ヘ、山間ノ溪橋ノ如シ、時ニ其傍枯木一株アリシヲ以テ、人皆此橋號ニ呼シト也、橋場町懸作町モ、昔ハ河原ナリシカ、後ニ一方ノ岸畔ニ棧作ノ架屋シ、夫ヨリ漸次ヲ以テ、戶數倍列シタリ、故ニ今モ此遺名存スト云、然レ𪜈尾山八町ハ、佐久間

尾張町

松任

氏本町ト定ル名目也、是マテハ凡テ尾山町ト唱フト云、所謂西町、佐久間氏時代正門ノ向ヒニアリ、堤町、佐久間氏ノ時代城內ニ在、南町、此ヰ城ノ南際ニアリ、金谷町、此時今ノ金谷ノ門前ニ在シト云、松原町、此ヰ松原門前ニ在、材木町、此ヰ今ノ紺屋坂邊ニ在、近江町、何ユヘ此名ヲ有スルヤ不詳、安江町、是レ安江邑內ユヘ此名アルカ、鍛冶町八幡社記ニ說アレ𪜈、附會難信、安江盛高ノ事本記ニアリ、可考、以上是也、尾張町ハ其始メ國祖ニ從フ諸士、尾州荒子ヨリ越前府中ニ扈從シ來リ、荒子府中ノ事及ヒ其從臣ノ名本記ニ詳也、府中ヨリ、天正九年辛巳、能州七尾ニ從ヒ居住ス、故ニ其比ハ能州所口ニモ、尾張町ノ名アリシト云、夫ヨリ十一年癸未、又金府ヘ從ヒ來リ、此町ニ造屋並住ス、故ニ尾張町ノ號アリト云、新町ハ其後尾張町ニ造屋人多ク、日々倍蓰スルヲ以テ、其地不足ニヨリ、新タニ此一町ヲ設クト云、今町モ大底此義成ヘシ、天正ノ晩年マデハ、當城二三ノ丸ニ大祿閥閱ノ臣ノ第宅多シ、夫ノミナラス、城中ニ堤町、金谷町等ノ工商人ノ比屋ノ街モ有シ也、○上下略

〔越登賀三州志〕三十二石川郡　故墟考四　松任　有澤永貞圖ニ、惣構百廿間餘四方也、本丸南北三十四間、東西廿四間、其四面塹ニテ、其幅十五間、二丸東西六十間、南北二十六間、又東ニ牢郭アリ、此處ニ古ヘ獄アリト云、三丸東西六十間、南北廿二間半ト云々、近年牧忠輔ノ圖ニテハ、多分畑トナリ變スレ𪜈、永貞カ本丸ト圖セシ所ハ、間數等サノミ違ハス、其餘今紛然ト云、○中略

十一(天正)年、瑞龍公四万石ヲ太閤ヨリ賜ヒ、此城ニ移リ玉フ、此時則秀降テ我臣トナル、今將軍家旗本德山權十郎

祖、○下略

〔越登加三州志〕三十二 故墟考四 鳥越 在井上莊倉見村與笠野鄉七黑村之領界、鳥越村ヨリ十町許南ナリ、(天正)○中略十一年、國祖此地ニ築堡シ、目賀田又右衞門、丹羽源十郎等ヲ置テ、加越境戍トス、

津幡 在井上莊、東鑑作都幡、理盡抄作津波多、北條九代記作津旗、皆同、○中略(天正)十一年、前田秀繼君父子此城ヲ守ル、十三年、今石動ニ移、○上下略

〔附錄〕二十五 來因槩覽附錄ニ寶圓寺 ○上略(天正)同十一年、公、石川、(河北)加賀ノ二郡ヲ領シ、金澤城ヘ徒ラセ、今ノ寶圓寺建立、大透ヲ開山トス、昌披問答ニ、初メ寶圓寺奧村伊豫(永編)第ノ處ニ建立、其後今ノ小立野ニ徒シ建トアリ、寶圓寺由來記ニハ、此コトヲ載セス、他日追考スヘシ、寬文九年、(編紀)松雲公再ヒ建立、伽藍ヲ爲ス、然ルニ寶曆九年ノ火ニ罹テ烏有トナル、其後三年ニシテ今ノ寶剎成ル、同所下祠堂其初メ造ラセラルハ、寬永八年、大坂ノ役ニ功名アル士ヲ、重テ選定アッテ、四十有一人鬪死ノ士ヲ、祖廟ノ側ニ配享スルナリ、

羽柴秀吉、宇喜多秀家ニ書ヲ遣リテ、柴田勝家ノ敗死ト、北陸ノ平定トヲ





報ズ、

〔小早川家文書〕一第八號秀吉公ヨリ隆景公外五名ヘ賜ル御朱印

一筆令啓候、仍去廿一日、江北至柳瀨表、兩三ケ度及合戰、切崩、五千餘討捕候、柴田修理亮馬乘四五騎よて、越州北庄居城へ北入候之處を、卽追詰、天主土井際迄責込候之處、柴修天主へ火をうけ相果候、將亦賀州、能登、越中手置幷越後長尾人質等爲可相分、明日廿六、越中際(金澤カ)うおうら崎ニ至て相越候、彼表早速隙明、可令歸陣候間、萬々期其節候、恐々謹言、

卯月廿五日　筑前守

八郎殿(宇喜多秀家)御宿所　秀吉(花押)

島津義久、遊行僧同念ノ請ヲ納レ、日向都於郡光照、光臺二寺ヲ貸與ス、

〔薩藩舊記雜錄〕後十四 御文庫廿二番箱四卷中 義久公御譜中案文有之トアリ 編裏カキ

天正十一年癸未

上書有之、遊行上人御在國之時老名敷中案文

日刕都於郡之光臺寺、光照寺兩道場頻依御懇望、不被及異儀、一節陋邦ゟ御

滞在中ノ寄附前代未聞ノ例

滞在中被致寄附候、於御上國已後者、從爰元可申付候、其謂前代未聞候之條、如斯候、併應御返章可得其心候、恐惶敬白、

（本田）親貞
（伊集院）忠棟

朱カキ「御譜中天正十一年」卯月廿五日

同念福島ニ著ス

〔上井覺兼日帳〕九日向　一五月廿日、〇中略、田尻鑑種、龍造寺隆信ト戰フコト及ビ深江、安徳兩城降ルコトニカ、ル、正月十三日及ビ五月六日ノ條ニ牧ム、又遊行上人近習御中

（同念）遊行上人

一廿一日、如常、遊行上人來月始福嶋へ著被成候、然ハ調之儀、（宮崎郡）清武、田野、（東諸縣郡）穆佐、藏岡彼方へ相副調可被成之由、忠棟より承候條、彼方へ申渡候也、〇下略、忠棟、田尻鑑種ガ龍造寺隆信ノ兵ヲ破レルヲ義久ニ賀スルコトニカ、ル、

〔上井覺兼日帳〕十日向　一五月廿八日、〇中略、富田ノ大宮司等、覺兼ノ病チ見舞フコトニカ、ル、六月六日ノ條ニ牧ム、此日清武より使也、遊行御調之儀、又續之儀兩方難成候由侘也、いつ迄も鹿兒島より御感まて被仰候條、拙者養性寂中と申、鹿へ御窺候て可然之由、柏將まて返事申候、〇下略、鹿兒島ニ於ケル祈禱ノコトニカ、ル、六月六日ノ條ニ牧ム、一七月廿四日、地藏井へ別而讀經共仕候、此日八木越（島津義弘）後守殿今月中縣へ越



同念福島ニ滞留ス

候而逗留候、歸候由ニ而被來候砌、遊行上人當時福島へ滞留候、然ハ此月末飫肥へ被越候、從夫當國へ御さ候する間、案内承候由候間、二之寮使僧ニ預候、驚而參會仕候、上人より段子、一端、扇一本、預候、使僧より小刀、一扇相添候、卽會尺仕候、座躰客居使僧、次ニ伴兩人、其次當所之師阿、主居拙者、次八木越、柏原將也、肴冷麵參會候、種々肴ニ而御酒參會候、八木越持參なと酌被申候、閑談まて酒宴也、使僧宿へ柏將まて禮申候也、〇下略、茶湯ノコトニカ、ル、七月是月ノ條ニ牧ム、

使ヲ遣シテ覺兼ニ物ヲ贈ル

一八月廿日、遊行上人飫肥より都於郡へ移被成候、就其儀、安樂阿波介飫肥へ遣候、歸候條送之儀共談合仕、諸所へ申渡候也、乘馬八十疋、夫駄三百可入由也、來ル廿三日、上人ハ飫肥より常（浄）瑠璃寺まて越山之由也、

飫肥ヨリ都於郡ニ移ル乘馬八十夫駄三百

〔遊行歷代譜〕三十一代同念（佛天）二十五代御弟子、元其阿、

百七代正親町院卽位十六年元龜四癸酉七月十八日、於常州江戸崎顯聲寺賦筆、五十六、遊行十二年、後陽成院卽位元年天正十五丁亥六月廿八日、於日向國都於郡池上山光照寺入滅、七十、獨住四年、〇下略

〇同念、義久ニ光明、光臺二寺ヲ借ラントスルコト、十年年末雜載、佛寺

ノ條ニ見ユ、

二十六日、戊寅羽柴秀吉、越前誠照寺及ビ其末寺ノ僧侶ヲシテ、還住シテ寺務ヲ行ハシム、

〔誠照寺文書〕前○越

當寺幷諸末寺以下、如有來不可有異儀、還住候而、執行專要候也、仍狀如件、

天正十一　　筑前守

四月廿六日　　秀吉（花押）

越前國鯖江（今立郡）

誠照寺

是ヨリ先、毛利輝元、小早川隆景、使ヲ羽柴秀吉ニ遣シテ物ヲ贈ル、是日、秀吉、隆景ニ答ヘテ、北國平定ヲ報ズ、尋デ、輝元ニモ亦之ヲ告グ、

〔小早川家文書〕一　第十五號太閤秀吉公側陋以來之御書翰　（端裏切封）「　ゝ　」

今月十三日御狀、昨日廿五日、於越州北庄令拜閱候、殊毛氈廿枚送賜候、遠路之御懇志、祝著之至候、抑去廿一日、於柳瀨表及一戰、切崩、佐久間始玄蕃（盛政）一類

二十五日秀吉北莊ニ在リ毛氈

五月十日頃上洛スベシ

銀子十枚

其外五千餘討捕、同廿二日、越州至府中追詰候、然而柴田（勝家）北庄へ逃入候之間、則取卷候、數年雖相拵用害（要）候、卽時本城へ乘入候之處ニ、天守へ取上、妻子以下刺殺、切腹、廿四日辰下剋相果候、越劣儀者不及申、賀州、能州、越中迄、悉任存分候條、彼表手置等爲可申付、越州境目至金澤相越候、來十日比可令上洛候間、追々可申入候、隨而先度御返事、手前故延引所存外候、恐々謹言、

卯月廿六日　　秀吉（花押）

小早川左衞門佐（隆景）殿　御返報

〔毛利家文書〕三（ウハ書）

毛利右馬頭（輝元）殿　參御報　　羽柴筑前守

秀吉」

先度御使札、殊御太刀一腰、馬一疋、銀子拾枚令拜受候、誠御（衍カ）御懇之至、畏存候、則御返事可申入候之處ニ、勢州表幷北國之模樣御使者へ見可申與存延引段、併背本意候、抑去廿一日、於柳瀨表及一戰、切崩、佐久間始玄番（蕃）、其外柴田一類五千餘討捕、同廿二日、至越州府中相越候處ニ、柴田居城北庄へ逃入候之條、追詰、本城取卷候、數年雖拵置要害候、卽時乘崩候之付而、天守へ取上、妻子

天正十一年四月二十六日

以下刺敍、切腹、廿四日辰下刻相果候、依之、越前之儀者不及申、賀州、能州、越中迄、一時ニ任存分候、然間、右國々手置等爲可申付、越中境目至金澤令出馬候、來十日比可令上洛候之間、旁其砌可得貴意候、恐惶謹言、

卯月廿七日　　秀吉(花押)

毛利右馬頭殿　參御報

## 〔西村小六氏所藏文書〕

尙々、右之趣、輝元ニ茂一々可被申候、委事ハ跡ヨリ追々可申候、此趣存分可然頼入候、已上、

書狀令披見候、廿一日及合戰、悉討果候、柴田北庄へ逃入間、追詰、本城乘崩候之處ヨ、天主ヘ取上、女房衆以下刺敍、切腹相果候、佐久間玄蕃搦取之條、載車洛中可被渡旨申付候、越州儀者不及申、賀州、能州、越中まて任存分候、長尾人質爲可相下、今日越中境目至金澤城相越候、來十日ゟ内ニ可歸陣候、尙其刻可申聞候、恐々謹言、

卯月廿八日　　筑前守

秀吉(花押)

盛政ヲ捕フ



五月朔日越前ヲ長秀ニ與フ

## 〔萩藩閥閱錄〕

十五ノ一　國司隼人

國司右京亮(元武)殿

飛驒守元相嫡子　國司右京亮元武

一天正十年、輝元公ニ羽柴秀吉ト備中之御和睦相整、秀吉歸京以後、翌十一年二月、柴田勝家ヲ爲退治、越前ニ趣(赴)キ、同四月廿一日、勝家之居城北庄ヲ取卷、勝家不叶及切腹候、依其從輝元公被仰付候間、右京亮元武より秀吉之御家臣迄、安否尋之書狀被遣候處、秀吉より元武ヘ對シ返翰有之、〇(下略、四月二十八日附、國司右京亮宛、秀吉書狀ニ同ジ、前掲西村小六氏所藏文書ニ同ジ、)

二十七日、已卯、羽柴秀吉、惟住長秀ノ功ヲ賞シ、越前及ビ加賀ノ内能美、江沼二郡ヲ與ヘテ、越前北莊城ニ治セシム、

## 〔豐鑑〕

二　袖露

丹羽越前守長秀若狹國ヨあづかりしを、越前、加賀二郡を添て、越前守よおしてうつし給ふ、〇(上下略、秀吉、利家ニ加賀ノ地ヲ與フルコト及ビ信孝ヲシテ、自盡セシムルコトニカ、ル、本月二十五日及ビ五月二日ノ條ニ收ム、)

## 〔太閤記〕

六　賀州表御出勢之事

〇(上略、秀吉、利家ニ石川、河北二郡ヲ與フルコトニカ、ル、本月二十五日ノ條ニ收ム、)頓て引歸し、五月朔日、至北庄丹

天正十一年四月二十七日

トノ説

越前マデ上リテ之ヲ長秀ニ與フトノ説

おとな村上義明ニ小松ヲ與フ

溝口秀勝ニ大聖寺ヲ與フ

惟住長秀

羽五郎左衛門尉長秀、今度一ゟさからぬ忠節に因て、越前、若狹、賀州之内能美、惠那(江沼)二郡可被進退之旨被申渡、即越前守ゟ任をられ可然おもさんやと戯をさせ給ひ、○中略、秀吉、坂本城ニ歸陣スルコトニカヽル、五月十一日ノ條ニ收ム、

評曰、○中略長秀、利家とハ、去春まて牛角なるもうもいにて有し故、知行割等聊斟酌之義有、

〔川角太閤記〕二ノ下　一秀吉ハ越前の國まて御上り被成、越前一國、加賀半國、丹羽五郎左衛門殿へ被進之候、○秀吉二十八日、金澤ニ入ルコト、本月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔村井重頼覺書〕一扨越前一國、加賀も、徳山五兵衛、佐久間玄蕃跡御手ニ入候時、丹羽五郎左衛門と申人、信長公ゟ秀吉公御もうもい、其時も味方ゟされ候人ゆへ、即越前守と被成、越前一國、扨兩おとな村神(上)すわう守小松城ニ八万石、そぞ口もうき守ニ大聖寺城ニ四万石、御朱印にて被遣、越前守殿へはき申候事、

〔寛永諸家系圖傳〕百十　丹羽長秀五郎左衛門尉、少名万千代、兒玉の人なり、　長秀、勝家ゟ子權六、ならびゟ佐久間玄蕃允を虜、これをせてまける、秀吉より長秀ゟ、越前、若狹、加賀半國をさはいり、越前守ゟ任も、○上下略

丹羽長重府中ニ居ス

秀吉長秀ノ盡力ニ酬ユ

長秀坂本ヨリ北莊ニ移ル北陸道總追捕使

長重少名鍋、五郎左衛門尉、加賀守、　天正十一年、柴田と合戰し、長秀とおなしく功あり、長秀越前守ゟ任し、長重五郎左衛門尉と號も、越前府中の城ゟ居も、○寛政重修諸家譜丹羽長秀、同長重譜異事ナシ、

〔丹羽家譜傳〕二長秀譜傳　五月朔日(天正十一年)、公(長秀)、秀吉ニ北庄ニ會ス、秀吉闕國ヲ分テ、越前一國、加州能美、惠那、二郡ヲ以、公ノ領國トス、若州、江州如故、

秀吉、公ノ手ヲ執テ曰、今度速ニ凶徒ヲ盡シ、大功ヲ立ル事、是皆公ノ力ニ因レリ、何レノ日カ是ヲ忘ンヤ、謝セントスルニ、涙墮テ言ヲ盡ス事能ハス、越前一國、賀州二郡ヲ以卿ノ領國トセン、今ヨリメ越前ノ大守ト稱セント云テ、相共ニ辭シ去、

公坂本城ヨリ越前北庄ノ城ニ徙リ居ス、長子ヲメ同國府中ノ城ニ遷シ、家臣ヲ分テ、封内ノ諸城ヲ戍ラシム、於是北陸道総追捕使ト稱シ、北國ノ諸城主各々弊ヲ執テ旗下ニ屬ス、○丹羽歷代年譜ニ、越前、若狹、加賀半國、江州之内兼領、ソノ高都合ニテ、百二十三萬石餘、北陸ノ藩鎭トナルトアリ、ナホ丹羽系譜幷年譜異事ナシ、

〔丹羽家譜傳〕三長重譜傳　五月(天正十一年)、公元服、五郎左衛門長重ト稱ス、豐臣家加冠シ、手カラ青江ノ刀完爾ト號ス、ヲ賜フ、

柴田權六ノ刀

此刀柴田權六カ帶スル所ナリ、(長秀)總光公權六ヲ捕ル時、コレヲ得、併テ豐臣家ニ贈ル、因テコレヲ賜テ、元服ヲ賀セラル、

若狹近江ノ本領ハ元ノ如シ

公越前府中城ニ徙ル、

此時總光君同國北庄城ニ徙ル、(丹羽歷代年譜、丹羽系譜幷年譜異事ナシ、)

〔丹羽家譜〕(長秀年譜)　秀吉自ラ天下ノ權ヲ司リ、長秀カ我爲ニ功有シ事ヲ賞シテ、本領ナレハ若狹、近江ノ地ハ云ニ及ハス、越前國ニ加賀國二郡ヲソ添テ賜リケル、

○中略　五月一日、秀吉北庄ニ在リ、長秀ノ手ヲ執テ云ク、年來ノ厚志、今囘ノ忠烈、勇奮閥閱、ソノ功勞謝セント欲スルニ心盡キ、言ハント欲スルニ語極ル、昔源義家多年奥州ニ軍旅ス、其弟義光、遠ク京都ヨリ來リ勞フ、義家當時ソノ欣抃ニ堪ヘスト聞ク、今度卿曹懇切ニ援ケ來ル、某カ感歡今ヲ以テ古ヲ知ルモノナリト、頻リニ淚ヲ拭フ、且ツ曰ク、今ヨリ若狹全州、近江二郡ニ、越前全州、加賀二郡(能美、惠那、)ヲ添ヒ、卿之レヲ領シ、宜シク越前守トナルヘシト、其辭氣甚謙ナリ、遂ニ封スルニ北陸道ノ總管領ヲ以テス、其後前田利家カ如キモ亦來テ年賀ヲ序ツルニ至ル、今玆長秀鍋丸ヲ誘ヒ行ク、時ニ秀吉之レヲ待ツヤ、慈愛誠ニ吾カ兒ニ異ナラス、便チ柴田權六帶ル所ノ名刀(其銘青江、)ヲ賜フ、其刀字ヲ莞爾ト云フ、古人此劍ヲ以テ人ヲ斬ルニ、竹ヲ破ルカ如シ、然ルニ彼レ其傷ツク所ヲ知ラス、相顧テ莞爾トシテ笑ヒ行クコト六七十步許ニシテ通體分裂ス、是レソノ名ツクル所以ナリ、(○秀吉、長重ニ名刀ヲ與フルコト、長重年譜異事ナシ、)

名刀莞爾

百萬石、又七十萬石餘ト云、長秀後越前守ニ任スト云、系圖ニ見ヘス、(正)家譜ニ云フ、今年ヨリ越前、若狹、加賀半國、江州ノ內兼領ス、ソノ高合セテ百二十三萬石餘、北陸ノ藩鎭トナル、因テ功臣ヘ悉ク采邑ヲ加ヘ、封內ノ諸城ヲ守ラシム、且長秀越前守トナル事、家譜ヲ見ルニ、天正十一年、越前平夷ノ時ナリトアリ、或ハ翌十二年、長秀上洛ス、時ニ秀吉執奏シテ侍從ニ任シ、名ヲ越前守ト改ムトモアリ、兩年ノ間イツレカ判然ナルヲ知ラス、然レ𪜈越前守ニ任スル事疑ヒヲ容ル、ニ及ハス、

所領併セテ百二十三萬石

長秀越前守ヲ稱ス

〔丹羽歷代年譜附錄〕(家臣傳)　一村上二郎右衞門尉源義明ノ傳、(始名政之助、後四品ノ周防守ニ敍、但御家傳ニハ賴勝トアリ、)

村上義明

翌年(天正十一年)五月、志津嶽合戰ニハ、世子鍋丸長重侯後見三將ノ內ノ隨一ニテ、七千餘兵ノ軍配ヲ司リ、柴田ノ大軍ヲ切崩シ、猛將佐

久間盛政ノ備ヲ破リ、盛政ヲ生捕、北之庄城攻戰功比類ナキニ因テ、越前江移封ノ時、數年ノ功勞ヲ賞セラレ、加州能美郡小松城六万千二百石ヲ授ケラル、〇上下略

長秀江沼郡ヲ溝口秀勝ニ與フ秀吉モ同意ス

〔溝口文書〕

越前國幷賀州内余禰郡(江沼ト同ジ)、能美郡兩郡、惟五郎(惟住長秀)左へ一職申談候之處、余禰郡之儀、其方へ惟五被進之候、於秀吉尤候條、彼郡一職召置、百姓等召返、政道以下專要候、在々に雖可申觸候、其方堅可被申付候、爲其如此候、仍如件、

天正十一　四月廿七日　筑前守(花押)

溝口金右衛門尉殿(秀勝)

溝口秀勝

〔寛永諸家系圖傳〕三十二　溝口秀勝(童名竹、伯耆守、生國尾張、)同(天正)十一年、豐臣秀吉、柴田を合戰乃時、秀勝若州より越前の敦賀におもむきて、秀吉に志さゞひて忠節をいさす、その功により、賀州大勝(聖)寺の城、あらひに江沼郡、能美郡の内にて、四万四千石れ領地をたまいる、秀吉の御朱印、いまに所持す、〇越後新發田溝口家譜、コノ次ニ、又伯耆守ニ任ジ、從五位下ニ敍ストアリ、ナホ寶廟記異事ナシ、

〇長秀、越前及ビ加賀二郡ヲ與ヘラルヽコト、月日未ダ詳ナラズ、秀吉、長秀ト謀リテ、江沼郡ヲ溝口秀勝ニ與フル日ニ係ケテ、姑ク茲ニ掲グ、ナホ長秀、松原五郎兵衛ニ知行ヲ與フルコト、五月七日ノ條ニ見ユ、

若狹本領トナル

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕十　勝家自殺信孝衰滅、付誅佐久間盛政柴田權六、幷瀧川一益服從部

五月朔日、秀吉皈北庄、甚感丹羽長秀今般之巨功、割捭若狹(今按、先レ是長秀假知二若狹之事一、至レ此始爲二本領一、)越前幷加州内能美、江沼兩郡、(今按、祿數凡百十七萬石餘云々、)任越前守、故長秀自坂本始移于越前北庄、使嫡子鍋丸分祿五万石、居府中城、(今按、此時前田孫四郎利勝、以二秀吉之命一自二越前府中一徙二于加州松任城一、是依二長秀惣領一越前也、〇上下略、秀吉、利家ニ加賀ノ地ヲ與フルコト及ビ信孝ヲ自盡セシムルコトニカヽル、本月二十五日及ビ五月二日ノ條ニ收ム、)

〔松府來歷金花抄〕中〇岩代　畠山氏代々京都將軍御諱の字を賜る、幷天下變易れ事

秀吉、勝家江州の柳ケ瀨に於て、一戰を決するに及んで、勝家討負て、越前北ノ庄の城におゐて自殺に、秀吉此とき勝家ゟ舊領越前一國、加賀半國に、長

近江ハ二郡

丹羽秀重

長東正家

鯖江ヲ與ヘラル

桑山重晴

秀の領地若狹國、近江二郡を長秀へ恩賜、都合百二十万石よ及ふ、〇上略下

〇長秀、其臣丹羽秀重、長東正家、桑山重晴等ニ所領ヲ給スル月日未ダ詳ナラズ、便宜左ニ合敍ス、

## 〔丹羽歷代年譜附錄〕家臣傳

一丹羽九兵衞尉藤原秀重ノ傳　大坂御陣戰死、尾張州丹羽郡兒玉ノ產、實ハ北陸藩鎭越前守丹羽長秀侯ノ舍弟也、十七歲ニテ臣下ニ列ス、若年ヨリ其質秀逸ニテ、智勇常ナラス、數年ノ戰功忠貞諸臣ニ超セリ、長秀君越前江移封ノ時、諸臣ト尼ニ加賜有リト雖尼辭之、僅ニ五千石ヲ領ス、〇下略

一長東藤兵衞尉藤原正家ノ傳　後年從四位、侍從、大藏少輔ニ敍任、翌年（天正十二年）五月、志津嶽合戰長重侯初陣ニハ、後見三將ノ內、七千餘兵ヲ軍配シ、柴田ノ大軍ヲ破リ、進テ北ノ庄城責ニハ、正家責口ヨリ攻入、柴田國丸ヲ生捕、戰功ノ軍忠大也、因テ越前江移封ノ時、鯖江城三万五千石ヲ授ケラル、〇上下略

一桑山修理亮藤原重晴ノ傳　尾張州ノ產、智勇ノ英士也、長秀侯江奉仕、數度戰功有之、信長公ヨリモ御稱美ノ者ナリ、柳瀨合戰ニハ志津嶽城ヲ守ル處、柴田ノ大軍防キ難ク、退クノ時、長秀侯馳付ラルニ付再、守之、合戰ニ



青山宗勝

丸岡城ヲ與ヘラル

戶田重政

重政政治ヲ掌ル

太田政之

奧山貞信

至リ、佐久間玄蕃允ノ軍ヲ破リ、首級ヲ得、軍忠大也、因テ越前江移封ノ節、

一万石一本ニハ七千石トアリ、非也、ヲ授ケラル、〇下略

一青山修理亮藤原宗勝ノ傳　翌年（天正十一年）志津嶽合戰ニモ軍忠アリ、此宗勝ハ、秀吉公木下藤吉郎ノ時、至テ別懇ノ由也、長秀侯越前江移封ノ時、丸岡城三万五千石ヲ授ケラル、〇上下略

一戶田武藏守藤原勝成ノ傳　始名半右衞門尉、翌年（天正十二年）五月、志津嶽ノ合戰ニハ、粉骨ヲ盡シ、北國勢ヲ破リ、猛將佐久間盛政ノ軍ヲ切崩シ、自身ニ勝家ノ騎兵三騎討取、數十人ニ手ヲ負セ、大ニ血戰シ、比類ナキ働ニ付、越前江移封ノ時、松岡城二万五千石一本ニ一萬石トアリ、非也、ヲ授ケラレ、國中ノ制事（敍法）向ヲ取計セラル、〇上下略

一太田飛驒守源政之ノ傳　始名小源吾、改美作守、再改飛驒守ニ改、父政一ニ劣ラサル英士ニテ、數度戰功ニ因テ、越前江移封ノ時、一万石ヲ授ケラル、〇上下略

一奧山雅樂頭平貞信ノ傳　始雅樂、從五位下ニ敍ス、尾張州ノ產、長秀侯佐和山移封以前ヨリ奉仕、軍忠アリ、因テ越前江移封ノ時、七千石一本ニハ五千石ト有、四百石ヲ授ケラル、〇下略

天正十一年四月二十七日

青木重直

一青木加賀右衞門多治比重直ノ傳始メ一直ト云フカ、長秀侯ニ奉仕、戰功群ニ抽テ、信長公ノ御感狀ヲ賜リシ士ニテ、天正ノ山崎合戰、志津嶽合戰別テ粉骨ヲ盡シ、首數級ヲ得ル、因テ越前江移封ノ時、一万石ヲ授ケラル、〇下略

寺西是成

一寺西筑後守藤原是成ノ傳但天正補任錄ニハ、實名忠元トアリト云、美濃州ノ產、始信長公ニ奉仕ト雖モ未詳、天正十年、長秀侯若州半國江州ノ內御加恩ノ時、寺西筑後奉仕ト云、翌年柳瀨合戰ノ軍忠ニ因テ、越前江移封ノ時、一万石ヲ授ケラル、〇下略

上田重安

一上田左太郎源重安ノ傳後從五位下ニ敍シ、水正ト號ス、主シ首級ヲ得ル、因テ越前江移封ノ時、加賜一万石、〇上下略

德山秀現

一德山五兵衞尉藤原則秀ノ傳美濃州ノ產、一本ニハ尾州ト云、始メ柴田勝家ニ仕、武功ノ士ニテ、戰功數度也、後年長秀侯江奉仕、越前ニテ追々加賜八千石マテ授ケラル、〇下略

岡田善富

一岡田將監藤原善富ノ傳生國未詳、一本ニハ尾州ト云、武功ノ英士也、長秀侯佐和山御領ノ時ヨリ奉仕、父ハ信長公ノ臣、長門守子モ云、志津嶽合戰ニ高名有リ、因テ越前江移封ノ時、加賜七千石、一本ニハ六千石、〇下略



中井仙兵衞

一中井仙兵衞實姓名未詳ノ傳　生國未詳、長秀侯奉仕、越前御領ノ節八千石ヲ賜リ、越前勝山城主成田道德江附ラル、與力ノ內ニテ城代ヲ勤ムモ云、尤道德ノ聟ナル由、此者嫡子早世ト云、

坂井直政

一坂井與右衞門尉源直政ノ傳　長秀侯江奉仕以來軍忠、別テ志津嶽合戰高名有テ、越前江移封ノ時、采邑ヲ增シ、八千石ヲ授ケラル、〇上下略

江口正吉

一江口三郎右衞門尉藤原正吉ノ傳　近江州ノ產、父未詳織田家合力ヲ受シ者一男モ云、正吉幼年ヨリ武勇ノ士ニテ、長秀侯ニ近仕シ、戰功度々ニテ登庸有リ、別テ志津嶽合戰高名ニ付、越前移封ノ後、采邑七千六百石ヲ授ケラル、〇下略

大谷元秀

一大谷與兵衞藤原元秀ノ傳但大坂御陣ノ時ハ、實名元和トアリ、美濃州ノ產、元秀家ニテハ尾州トイフ、二階堂庶流、父彌兵衞吉秀ト云、此者長秀侯至テ小身ノ時、天文二十一年ヨリ奉仕、戰功數度ニテ、志津嶽合戰父子軍功有テ、越前江移封ノ時、一万石ヲ授ケラル、〇下略

成田正成

一成田兵庫藤原正成ノ傳後年名彌左衞門ニ改、尾張州ノ產、父ハ武藏州ノ產ト云、成田彌左衞門道德也、尾張州ニ到テ長秀侯江奉仕、武功ノ英士ト云、勤仕

以來數度ノ戰功ニ因テ追々加賜、越前御領ノ時、勝山城四万五千石（此内二萬石ハ柴田三左衛門舊領ニテ、與力ノ知行ナリトイフ、）授ケラル、（〇下略）

一安養寺猪之助源高明ノ傳　近江州ノ產、佐々木源氏ノ庶流、武功有テ、長秀侯江奉仕、數度ノ戰功ニ因テ、越前江移封ノ時、五千石授ケラレ、其後長重侯ニ奉仕、（〇下略）

## 武藏八王子城主北條氏照、同國子安鄉ヲシテ、未濟ノ年貢ヲ濟納セシム、〔武州文書〕

七生麥村百姓八郎右衛門所藏

（橘樹郡）子安鄉（天正十年）壬午歲干損之由申上付而、癸未四月、諸百姓被集有御糺明、干損速被引捨、納法干損仕分之御書出、

一八拾七貫四百七十文　關口外記助均（マヽ）

此内壹貫五百文夏成

此内名主

七貫貳百文　關口圖書助

四貫五百十七文　同　助七郎

三貫九百十九文　内海兵庫

四貫三百十文　關口助七郎

三貫貳百六十六文　牛込五郎左衛門

三貫貳百六十六文　關口神兵衛

三貫貳百六十六文　渡邊五郎右衛門

貳貫二百七十七文　九郎左衛門

壹貫九百六十五文　源左衛門

壹貫七百七十文　庄左衛門

壹貫百九文　源右衛門

三貫九文　彌二郎

五十貫八百六十二文　關口外記助手前

以上八拾七貫四百七十文

此内午納

廿五貫七百文

殘而

六十一貫七百七十文　御藏納申、

天正十一年四月二十七日　未進、

此内

廿貫文　午歳干損御用捨、但脇百姓前共ニ

猶殘而

四十一貫七百七十文　御藏納可申、

以上

此外

一九貫六百五十文　不作子丑刁之開、

此内

貳貫文　午御藏納、

殘而

七貫六百五十文　未進、

此内六百文荒地之由申、

合九十七貫百廿文　高辻

以上

右辰巳午號干損、大切之御年貢相ひかへ候、百姓爲御憐民(愍)於去未進者、干損



景勝命ヲ奉ゼズバ秀吉兵ヲ出シ之ヲ撃チテ成政ノ處分ニ任スベシ

與申分被引捨候、秋中御請申上之員數幷未歳分、少成共未進致ニ付而者、名主を始可被遂御成敗、存其旨此度御請申上候透、速來秋九月より霜月廿日を切而、悉御藏納可申旨被仰出者也、仍如件、

天正十一癸未卯月廿七日　朱印(北條氏照)

二十八日、庚辰、羽柴秀吉、書ヲ佐々成政ニ與ヘテ、上杉景勝トノ交渉ニ任ゼシム、

〔佐々木信綱氏所藏文書〕

越後(上杉景勝)儀彌遂相談、國切ニ於相澄者、執次之儀貴所へ可相定候、越後存分相滯儀も在之者、秀吉出人數急度申付、彼國之事者其方可被任覺悟候、爲其如此候、恐々謹言、

羽柴筑前守

卯月廿八日　秀吉(花押)

佐々内(成政)藏助殿

○秀吉、上杉景勝ノ、約ニ背キテ兵ヲ出サヾリシヲ詰ルコト、本月二十九日ノ條ニ見ユ、

義久ノ肥後防戰中宗運之ニ好ヲ通ズ

年寄

上杉景勝、其臣大石播磨守ニ領地ヲ給ス、

〔大石文書〕○陸奥

晝夜別而抽奉公之間、下平分幷惣介分出之候、彌無油斷於勤勞者、身上猶以可引立者也、仍如件、

天正十一年

卯月廿八日　景勝(花押)

大石播磨守殿

肥後御船城主甲斐宗運、島津義久ニ、太刀及ビ甲冑ヲ贈ル、是日、義久、之ニ答ヘテ、宗運ニ馬ヲ遺ル、

〔後編薩藩舊記雜錄〕十四　義久公御譜中ニ在リ　正文在飯野白鳥

肥州表防戰寂中之刻、各入魂候之段、尤賴敷子細候、向後者從當邦茂不可有疎遠候、殊太刀一腰、鎧甲到來、珍重之儀候、仍馬一疋月毛印、三目結、進之候、寔嘉瑞計候、猶年寄可申候、恐々謹言、

天正十一歟、卯月廿八日　義久(花押)

甲斐民部入(宗運)道殿

秀吉金澤ニ逗留ス

景勝ノ存分ヲ聞キ度シ

直江兼續

上包　甲斐民部入道殿　義久

○宗運、義久ニ降ルコト、十年十二月十一日ノ條ニ、マタ義久ノ弟忠平ニ刀ヲ贈ルコト、本年三月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十九日、辛巳、羽柴秀吉、上杉景勝ニ、柴田勝家ノ敗死ヲ報ジ、其誓約ニ從ツテ兵ヲ出サヾリシヲ詰ル、

〔歷代古案〕十

寺內織部方下國候之條、令啓候、仍一日於柳瀨表令一戰之樣子、幷柴田切腹相果候趣、委細景勝へ申入候之間、委不及申候、然者賀州、能州、越中屬一變候之條、國々置目等爲可申付、至金津(澤)城令逗留候、就中柴田謀叛之刻、秀吉至越前直於令亂入者、可有御手合之由、深重雖承候、其御手筈相違候條、寂前互誓紙取申談儀反古罷成候、前後之固候間、其許御存分之通急度承、可隨夫候、聊不可存疎意候、尙巨細織部方口上申達候條、懇被聞召屆、景勝へ可被申入事專一候、恐々謹言、

(朱書)「天正十一」卯月廿九日　秀吉

直江山(兼續)城守殿

天正十一年四月二十九日　四二一

天正十一年四月二十九日

狩野讃岐守(秀信)殿

○景勝、秀吉ト誓書ヲ交換スルコト、二月七日ノ條ニ、景勝、質ヲ秀吉ニ送ルコト、十二年六月二十日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、越後根知城主西方房家、信濃安曇郡ニ兵ヲ出ス、是日、上杉景勝、之ニ命ジテ、敵地トノ往還ヲ止メシム、

〔歴代古案〕六

芳札披見、仍上(景勝)様御樽被差上、則令披露候、自分へも送給祝著申候、次仁科(安曇郡)筋人數被遣由ニ候、吉左右候ハヽ、重而御注進待入候、將又先達而以書中申入候其元ゟ敵地へ之往復不通ニ可被相留由、堅御錠候間、左様御心得尤候、恐々謹言、

追而、青梅給候、賞翫申候、以上、

卯月廿九日　　直江

西方二(房家)郎右衞門殿　　兼續

○景勝、房家ノ功ヲ賞シ、仁科氏ノ舊領ヲ與フルコト、九月二十三日ノ條ニ見ユ、

仁科筋ニ兵ヲ出ス





條ニ見ユ、

是月、誠仁親王、和仁親王御父子、神祇大副吉田兼和ヲシテ、災厄ヲ祈禳セシメラル、

〔兼見卿記〕五　四月　自若御局御使御文、勸修寺亞相(晴子)侍、當年來年親(誠仁)王御方御祟歳也、若宮(和仁親王)御方七月迄御祟月也、御當所祈念之義被仰出了、御撫物モトイ也、御使へ申云、畏而令存知候、御撫物月々ニ替テ令進上也、御帶被置神壇可然旨申入了、御使尤之由申歸了、今夜御番祇候之次、大御乳人へ被召、先刻被仰下御祈禱之義、猶被仰聞了、委細申入了、以勸修寺(勸修寺晴子)亞相具被仰下ス、

羽柴秀吉、越前永平寺、平泉寺等ノ諸寺及ビ越前、加賀ノ諸鄕ニ、禁制ヲ

〔永平寺文書〕○越前

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、

一放火之事、

天正十一年四月是月

越前國
永平寺同門前

還住

天正十一年四月是月

一還住百姓成煩事、付小屋壊取事、
右條々堅令停止畢、若違犯輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(秀吉)(花押)　○昌藏寺文書、同文ノモノアレドモ、宛所見エズ、

## 〔白山神社文書〕 ○前越

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一放火之事、
一還住百姓成煩事、付小屋壊取事、
右條々堅令停止畢、若違犯輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(花押)

越前國 平泉寺 同門前幷同寺內十ケ所

平泉寺

## 〔稱念寺文書〕 ○前越

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一放火之事、

稱念寺 同門前

稱念寺





橘屋

一非分族申懸事、
右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(花押)

## 〔橘文書〕 ○前越

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一放火之事、
一還住百姓成煩事、付小屋壊取事、
右條々堅令停止訖、若於違犯輩者、速可處嚴科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(花押)

越州 きさの橘家

## 〔大連文書〕 ○前越

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一放火之事、
一還住百姓成煩事、付小屋壊取事、

越州 本庄鄉

天正十一年四月是月

天正十一年四月是月

右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十一年四月日　　筑前守(花押)

## 〔加賀〕前田家藏古文書

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、

一放火之事、

一還住百姓成煩事、付小屋壞取事、

右條々堅令停止訖、若違犯之輩在之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾一年四月日　　筑前守(花押)

## 〔菅君雜錄〕

〇加能越古文叢三十九所載

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、

一放火之事、

一還住百姓成煩事、付小屋壞取事、

右條々堅令停止訖、若違犯輩有之者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十一年四月日　　筑前守御判

## 〔柿園舍所藏文書〕

〇加能越古文叢三十九所載

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、

一放火之事、

一還住百姓成煩事、

付小屋壞取事、

右條々堅令停止畢、若違犯之輩在之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十一年四月日　　筑前守(花押)

## 〔北徵遺文〕

〇加能越古文叢三十九所載

天正十一年四月是月

右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、

天正十一年四月日　　筑前守(花押)

野田村
おしほ辻

大ねふ
おまへさか
もとねふ
荒屋

加州石川郡
大祿ふ　おまへさか
もと祿ふ(荒)あらや

賀州
野田村
おしほ辻

賀州石川郡
まつとう(松任)
くらミつ(倉光)
長嶋
うちかたしん保(内方新保)

道法寺村
井口村
新や村
小柳村
知氣寺村

禁制

一當手軍勢甲乙人亂妨狼藉事、
一放火之事、
一還住百姓成煩事、付小屋壞取事、
右條々堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可處罪科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(花押)

賀州石川郡
道法寺村　井口村
(荒屋カ)
新ヤ村　小柳村
(知氣)
ちけん寺村

みちの郷七村

禁制

一當手軍勢甲乙人濫妨狼藉事、
一放火事、
一還住百姓成煩事、
右條々堅令停止畢、若違犯輩在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　筑前守(花押)

賀州石川郡
ミちの郷七村



本莊郷

惟住長秀、越前本莊郷ニ禁制ヲ下ス、

〔大連文書〕○越前

禁制

一當手軍勢亂妨狼藉事、
一放火之事、
一還住百姓成煩事、付用水如有來、
右條々堅令停止訖、若違犯族於在之者、速可處嚴科者也、仍下知如件、
天正十一年四月日　五郎左衞門尉(花押)○昌藏寺文書、

川北
本庄郷

同文ノモノアレド、宛所見エズ、

德川家康、禁制ヲ甲斐廣濟寺ニ下ス、

〔廣濟寺文書〕○甲斐

(家康)
朱印

禁制

一山林放牛馬、濫剪採草木事、
一俗徒綺之事、
一諸沙汰閣住持出門外事、
廣濟寺

天正十一年四月是月

一殺生事、

一門前諸役事、

付山守宿事、

右條々於違犯□處嚴科者也、仍如件、

天正十一年四月□

○家康、甲斐ノ諸士、諸社及ビ諸寺ヲシテ各其所領ヲ安堵セシムルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

新發田刑部ノ川中島城ヲ攻ム

樓船

火矢

發知源六

## 上杉景勝、越後新潟ヲ攻ム、

〔上杉文書〕宗心様御代之御事

一同(天正)十一年四月、新潟御陣、

〔越後古實聞書〕一天正十一年癸未四月、新潟へ御出馬ありて、川中島の柴(新發)田刑部ゟ城を御せめ被成へきとあれとも、陸と嶋との事なれバ、是も思召よふにならぬして、大船を五艘宛ならべて、矢くらをあげ、ろうせん五ツ拵て、大綱を付ケ、川上より流しゟけ、繰廻しに引登せて、又ならし、火矢をしゟけて打入る、其時分の火矢のしゟけ、知さる者なくて、發知源六若



景勝六月初ニ兵ヲ收ム

河中島城

木津落城

けをとも、火矢のしゟけ知りて、夜白五日打なれとも、是をも用ひず、剰城より源六をふらひ、鐵炮にて只中を打貫ける、其日一日いきて、廿五日にて死けり、其後ハ火矢もならぬ被相止、六月初に御馬を被入、○下略、景勝、新發田重家ヲ攻ムルコトニカヽル、

〔景勝一代略記〕一天正十一年四月中旬、しハ田拘の地新潟御出馬也、此湊日本二番の大河也、此河中嶋に、立(縦)廿町横八町計ニ城を拵へ、しと田刑部少武主にて人數入置、陸と水の間七八町も有へし、舟にてよる外責へき様なし、大船を集め五艘つゝからくり、其中に勢(井)樓あけ、さん〳〵に鐵炮百計つゝのせ、舟に大つな付、河上より城際へなゟしゟけ、晝夜斷まなく責られける、乍去落居成ゟさし、日を送、御在陣專(詮)なしとて、新發田へ御馬寄給ふ、城際迄放火、御納馬也、

## 長宗我部元親ノ弟香宗我部親泰、阿波木津城ヲ攻メテ之ヲ拔ク、尋デ、又淡路ノ洲本城ヲ奪フ、既ニシテ、淡路ノ兵起リ、洲本城ヲ復ス、

〔香宗我部家傳證文〕四

去月廿一日之御札、今日披閲、本望候、仍此度以御手柄、即木津(板野郡)城被押落候由、

親泰菅平右衛門ヲ説ク湊衆雑賀衆元親ニ属ス

平右衛門洲本城ヲ取ル親泰淡路ニ渡ラントシテ果サズ

無比類儀候、以故悉貴國平均由候、隨而到淡州御入軍之由、旁珍重令存候、○下略、五月八日附、香宗我部親泰宛、快春書狀、全文ハ五月八日ノ條ニ收ム、

〔元親一代記〕中○土佐　一淡刕須本の城取さる事

右ハ香宗我部親泰計策を以、彼地菅平右衛門方繰狀を付らるゝ樣ハ、凡可被及聞候、とや紀刕湊雑賀衆、元親旗下ニ屬し、此先三好合戰の刻も、人數二千餘ニテ阿波勝瑞へ馳渡、忠功を勵ス、阿讃兩國の義ハ無殘所靜謐ス、此上ハ其地への手遣可有事程ハ有間敷、哀其内ニ忠節被仕候へゝし、如何樣ニも、御存分之儘ニ某御取合セ可申と、入魂せらをあをを、平右衛門早速同心致、既親泰へ人數ヲ指渡、平右衛門手合にて須本の城を取さり、此注進聞屆、追々人數ヲ打渡シ、親泰自身渡海をへきと、とや催さるゝ所ニ、折節打續難風、暫ク舟の通ひなし、其日に淡刕一國催して、城を取返ス、平右衛門一類ハ、其より阿州牛岐へ取退、親泰與力ニ付、知行過分ニ給居、

○親泰、木津城ヲ拔クコト及ビ須本城ヲ取ルコト、竝ニ月日未ダ詳ナラズ、今香宗我部家傳證文ニ依リテ是月トシ、姑ク茲ニ揭グ、ナホ元親勝瑞城ニ十河存保ヲ圍ムコト、十年九月二十一日ノ條ニ、讃岐ニ入リ、

野口肥前守

海上荒レテ親泰鳴門ヲ渡ルコト能ハズ

仙石秀久ヲ破ルコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔土佐物語〕十三　須本へ計策之事

香宗我部安藝守親泰ハ、如何ほをして他國を討取、忠功ほ備んと四方をそ伺ひなる、淡州ほ菅何某とて勇智兼備の士有、彼ゟ味方に引入、野口肥前守ゟ居城當國須本の城を攻取へしと、案し濟し、羽檄を飛して事れ由を談しなる、菅一義ほを及ハを同意して、急き人數を指越給へ、須本の案内仕へしとそ申なる、親泰喜ひ、究竟れ兵を勝立、淡州へさし遣す、菅某手を合、須本れ城へ押寄さり、城ほハ思ひも寄す、是ハ〳〵と驚騷き、防く兵壹人をなく、我先ふと逃行しゝハ、即時ほ城を乘捕、悦ひの鬨をそ擧になる、此由阿波へ注進しなれは、親泰大きに悦、追々人數を差向、其身も渡海せんと勢を揃、舟用意して既ほ打立ンとしなれとも、折節風烈浪荒る事日を經て止を、名ほおふ鳴渡の渡なをハ、渡るへきやうなゝりなり、親泰身悶をれ共叶ハを、數日を經る程ふ、肥前守當國れ勢を催し、須本れ城へ押寄、揉ほ捫て責さりなる、素より案内ハ知りさり、前後より責入なれハ、城中ほハ續く味方ハなし、終

四月親泰洲本ヲ攻ム

ま城を取返され、菅何某辛れ命ゑ遁まて阿州へ渡り、親泰れ與力ふき居さりける、

〔土佐國編年記事略〕七　同年、(天正十一年)香宗我部親泰、木津ノ城ヲ攻テ拔之、○中略、香宗我部古文書ヲ引ク、前掲香宗我部家傳證文ニ同ジ、

同年四月、香宗我部親泰、淡路國ノ兵將菅平右衞門尉ニ書送テ、威スニ元親ノ兵猛ヲ以シ、昵クルニ恩賞ヲ以ス、平右衞門尉畏服シテ、則與ニ計テ同國須本ノ城ヲ取ラシム、時ニ淡路ノ諸將等急ニ兵ヲ發シテ、須本ノ城ヲ圍ム、親泰風濤海荒ヲ以救事能ハス、是ニ依テ平右衞門尉城ヲ委テ阿波國ニ逃ル、○下略、元親記、香宗我部古文書ヲ引ク、前掲元親一代記、香宗我部家傳證文ニ同ジ、

五月　小盡　壬午朔

一日、壬午、羽柴秀吉、山城賀茂社惣中ニ、其祈禱卷數ヲ贈レルヲ謝シ、併セテ、北國悉ク平定セルヲ告グ、

〔賀茂別雷神社文書〕三　○山城

爲御見廻預使札、祈禱之卷數幷鳥目二百疋送給候、遠路御懇志祝著候、北國之儀悉屬存分、歸陣候間、期後音候、恐々謹言、

筑前守

五月朔日　秀吉(花押)

加茂

惣御中

爲音信、祈禱卷數幷鞦二懸到來候、每々御心入令祝著候、尙期後音候、恐々謹言、

筑前守

五月廿日　秀吉(花押)

加茂

惣御中

○秀吉、賀茂社ノ祈禱巻數ヲ贈レルヲ謝スルコト、三月二十九日ノ條ニモ見ユ、

官務下知狀

## 池田元助、攝津善福寺阿彌陀堂ヲシテ、寺領ヲ安堵セシム、

〔善福寺文書〕○攝津

當寺領并山林竹木之儀、如前々不可有相違候、可全寺納狀如件、

天正拾壹年　　池田紀伊守

五月一日　　元助(花押)

阿彌陀堂床下

## 二日、癸未、大神宮ヲシテ、天變ヲ祈禳セシム、

〔壬生家四巻之日記〕三　五月二日、

神宮御祈之事、

天變御祈事、一七ヶ日可抽丹精之由、被仰下、御教書如此候也、恐々謹言、

左大史判





大神宮司解

謹上　祭主殿

此解到來之日限未考、

太神宮司解　申進　申文

注進早可被經次第上　奏子細事

副進

二通二宮禰宜等解狀事、

右彼禰宜等解狀偁、子細載具也、仍相副言上如件、

天正拾壹年五月廿七日　　權主典

主典

大司大中臣朝臣滿長

權大司

小司

皇太神宮神主

天正十一年五月二日

天正十一年五月二日

依御教書天變御祈之事

右得當月二日御教書并次第施行偁、任被仰下、(旨脫カ)天變御祈一七ヶ日致懇祈事、者彌可奉抽丹精之旨、仍注進言上如件、

天正十一年五月廿一日　大内人正六位上荒木田神主氏雄上

禰宜從四位上荒木田神主守豐

禰宜從四位下荒〻　守通

禰〻　守是

禰宜正五位下〻　守基

禰〻　氏晴

禰〻　經逸

禰宜從五位上〻　經家

禰〻　定具

禰〻　守生

禰〻　守在



豐受大神宮禰宜解

豐受太神宮神主

注進　御教書之旨、致天變御祈事、

右就于天變御祈、五月二日宣下、同日祭主下知五月二日下著、同十三日神宮告知、因茲一七ヶ日抽丹懇、奉遂聖運長久、天下泰平之御祈之旨、注進言上如件、

天正十一年五月十九日　大内人正六位上度會久能上

禰宜從三位度會神主貴彥

禰宜從四位上度〻　匡彥

禰〻　完彥

禰宜從四位下〻　朝直

禰〻　貞德

禰〻　貞副

禰〻　辰彥

禰宜正五位下〻　堯彥

禰〻　貞行

天正十一年五月二日

禰〻〻　常晴

○吉田兼和、天變御祈ノ御祓ヲ上ルコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀吉、越前北莊ニ歸リ、安井定次ニ答ヘテ、其陣中見舞ヲ謝シ、北國ノ平定ヲ報ズ、

〔安井文書〕○津攝

爲在陣見舞示預、殊帷幷菓子一折、糀三袋到來候、遠路色々被取揃、心入段令祝著候、此表之儀、柴修其外一類不殘討果、越前、賀州之儀ハ不及申、能登、越中、越後迄一篇申付、隙明候付而、越前至北庄打入候、頓可令上洛候之間、期其節候、恐々謹言、

五月二日　筑前守
秀吉(花押)

安井清(定次)右衞門尉殿

〔安井系譜〕○津攝

同(秀吉)賤ヶ嶽陣中ヘ伺候ノ返翰壹通、本紙私所(安井九兵衞)持、

五月二日附、書判、安井清右衞門名當、

加藤清正筆トノ說

信雄美濃ニ入ル

右筆者加藤清正ノ由申傳フ、又宮崎縣內舊高領ノ內日向國都農神社宮司石神喜平次看定致置タリ、

是ヨリ先、北畠信雄、美濃ニ入リ、神戸信孝ヲ岐阜城ニ圍ム、既ニシテ、羽柴秀吉、柴田勝家ヲ滅スヤ、信雄卜謀リ、信孝ヲシテ、尾張內海ニ移ラシメ、使ヲ遣シテ、其死ヲ促ス、是日、信孝、大御堂寺ニ自殺ス、

信孝ハ野間ノ內海ニテ切腹

〔吉村文書〕○前肥

書狀披見候、柴田退治之上無別條候間、到濃州相動候、可得其意候也、

卯廿四日　信雄(花押)

吉村又吉郎とのへ

〔毛利家文書〕三

一三七殿儀者、信雄被出御馬、是又岐阜城被攻崩、三七殿儀者不及申、悉被刎首候事、○五月十五日附、隆景宛、秀吉書狀、全文ハ五月十五日ノ條ニ收ム、

〔多聞院日記〕三十○大和　五月十日、

○中略、秀吉、大乘院尋憲ニ祈禱卷數ヲ贈レルヲ一謝スルコトニカヽル、本月二十四日ノ條ニ收ム、三七殿(信孝)ハノマ(野間)ノウツミ(內海)ニテ被腹切了云々、不便之事也、

信孝ハ智勇人ニ超ユ

秀吉北國ヨリ歸リテ岐阜城ヲ圍ムト說ノ信孝ノ部

〔家忠日記〕三　五月十八日、己亥、小田(織)三七殿尾張うつゝにて腹御切候、

〔當代記〕二　三七主岐阜ヲ有退城、尾張ノ野間ニテ腹ヲ被切、○上下略

〔秀吉事記〕柴田退治

又織田三介信雄、率人數攻入岐阜、三七信孝亦將軍御息男而智勇越人、於自害豈可辭乎、彼山而沐髮清身燒香、以將軍所被下太刀、自刎而死、以逆心相亡事、殆不天命乎、○上下略、盛政、六條河原ニ斬ラルヽコト及ビ秀吉、柳瀨役ノ賞ヲ行フコトニカヽル、本月十二日及ビ六月五日ノ條ニ收ム、ナホ本書コノコトヲ、五月十七日、秀吉、安土ニ至ル條ノ下ニ掲グ、

〔大かうさぬくんきれうち〕一かんへ三七殿しんしの事に候あひ、御せうらくなされ、秀吉公へ、御ほんいかさじけなきと、御禮をもおほせられ、そのうへきやうようれにつきものを、御いとなゝなさるべき事に候を、しにさこくにし候て、ぶたうしごくれにさらき、てんたうのにやうすよにそむき、むげにあひにてられ、てんたうおそろしき事、○太田牛一雜記大抵同ジ、

〔豐鑑〕二　袖露

秀吉、北國をにかく仕置て、美濃國に至、きふれ城をかこまる、三七信孝、柴田をこそ頼に給ひしに、亡にしかは、草木れ根をさゝれし樣にて、郎從ともみな落て失、日比めくにれ深かわしもの計殘す留まり、三介信雄尾張の勢に具して、城をかこみ給ひぬ、使をにしらかし、尾張のかさに御座をよとさはかり給へに、城を出川舟に乘て、知田の宇津美に御座しなす、信雄のもさ中川勘右衞門主をつかはし、自害し給へとありしかに、兼而かくこそと思ひしとて、しけかに事をもしさゝめをき、手つから刀れをいにかき合、自害ありけれ、○上下略、秀吉、惟住長秀ニ越前加賀ノ地ヲ與フルコト及ビ瀧川一益北伊勢ヲ致シテ秀吉ニ降ルコトニカヽル、四月二十七日及ビ八月一日ノ條ニ收ム、

下多ク逃散ス

信雄中川勘右衞門ヲ遣シテ自殺ヲ促ス

秀吉岐阜ヲ攻メントス

一益くりか崎ニ兵ヲ出ス

〔川角太閤記〕二ノ下　一たきより御上り被成、直に岐阜へ可被成御座と思召候處、宇喜田八郎(多)(秀家)殿より早打參候、越前と近江の堺目にて、飛脚に被成御相候、其樣子は瀧川左近くりか崎迄罷出候との注進也、御返事には、秀吉登るならは、聞付定めて長嶋へ可打入なり、何とぞ調儀を以て、退され樣にあいしられ候へ、能次手也、彼地にて可打果者也との御返事、御心にも、直に岐阜へと被思召候へと、御心をあへ、瀧川陣取のくりか崎へ、直に御馬を可被寄と思召候處へ、又飛脚來候、瀧川事、昨日の夜引取候との早飛脚也、不及是非とおほし召、直に岐阜に被成御付候、柴田馬廻小性三人

勝家近臣ノ捕虜ヲ岐阜城ニ放ツ

信孝ニ扱ヲ入レテ内海ニ移ラシム

秀信ヲ岐阜ニ置クトノ説

信孝ノ辭世

氏家稻葉ノ兵岐阜ヲ攻メントス

美濃伊勢兩國ノ信孝ノ部下離反ス

の生捕を被召連御上候つるゝ、岐阜の城に三人乃生捕御入被成候、三七殿をとしめ、勝家、同玄蕃相果候通、城中のもれ是を聞、力を落申候と相聞え候、扨秀吉御分別にハ、をとや三七殿も下々に至まて、右之分別にハ、遙に引替る時分なりと思召候時、城中にはゐりあひを御入被成候へと、如案ありあひに三七殿御付被成、尾張の野間れうほゝに移し奉り、城之助殿（信忠）若君吉法様（秀信）をは、其まゝ岐阜れ城に先被召置候、御番衆をも入被置候事、一三七殿ゑ、のまれうつゝにて御切腹被仰付候、其時之御ゑせいに、むかしより主をうつゝれうらなれハむくれをまてやとしとちくせん

〔北畠物語〕七　岐阜の城落人の事

岐阜の城ハ、氏家、稻葉以下の諸勢ゑをを押へ戰ハんとに、柴田滅亡によつて、美濃、伊勢兩國の味方とゞく謀反をくハさて、城を退く、先信孝の家臣岡本下野守（良勝）ハ兼てより逆心し、幸田彦右衛門尉ハ義を守て討死を、神戸侍四百八十人のをもゐら一味同心に、をなゞ城をしりぞき、勢州へ落來る、堀内次郎右衛門、河西喜兵衛、山路玄蕃允、同彌太郎、太田監物、同織部、高田雅樂助、同孫右衛門尉、高瀨左近、村田治部、其ほかの諸侍くハしく記をにいとはあらぜ、いづをも一騎當千の勇侍、をの〳〵城を落行きをり、

太田新右衛門

小林甚兵衛

四月二十九日信孝生害説

信孝生害の事

其後岐阜の城にハ、近習外様の人々、いづをも落ちりて、殘るともがら太田新右衛門、小林以下をづかに廿七人なり、彼太田ハ神戸侍なりしが、近習のよしゝををすをぜ、一族にうむき、此節儀（義）を守る事、尤勇士の本意也、又小林甚兵衛ハ、神戸の住人石塔鍛冶但馬守國助が子なり、本武家にあらぜして、今の節にのぞゝ、城中にをゞまる事名譽といふをあまりあり、信孝此うへハ是非に及バず、敵の心にはかをんとす、岐阜の城をならき、尾張の國へおもむき、同廿九日、野間の内海におゐて生害し給ふ、行年廿六歳なり、信孝寂後に及て、むかし長田庄司忠致が、此所にて主君左馬頭義朝を討をてまつりし事おもひ出さを、辭世の歌を詠じ給ふ、

昔より主をうつゝの野間なをハをハりを待や羽柴筑前

太田新右衛門尉なゝざを押へて介錯し奉る、○勢志軍用記ニハ、幸田彦右衛門介錯トアリ、あハをなりし事どをなり、

〔細川忠興軍功記〕一秀吉公越前御仕廻被成、岐阜へ御歸陳被成、頓而御あ

岐阜城勝家ノ敗軍ニ力ヲ失フ

信孝ノ法名功岸徳虎

天正十一年五月二日

つゝいこ罷成、三七様岐阜之御城被成御渡、伊勢へ船よて御座候様こ被成度と被仰候こ付、船よて伊勢へ送り申躰こ而、野間之内海の浦へ船を著、内海よ而御切腹被成候事、

〔九鬼四郎兵衛働之覺〕一天正十一年、江州志津ゟ嵩合戰乃時分よゑ、三七殿美濃岐阜よ御在城こて、柴田修理勝家と被仰合候故、切々岐阜へ注進有之、柴田方よしといへは、諸人きおゑ、妻手の由申をい、力を落し申候、其後勝家敗軍切腹の後、三七殿も岐阜れ城をゐき、野間内海よて御切腹ゑさき、いつきも致牢人候、此時廣隆三十三歳也、

〔志津ケ嶽合戰小須賀九兵衛私記〕〇碩田叢史三十七所收 一太閤越前引取の時、中川勘右衛門よ被仰付、信孝を尾州野間の内海よて切腹させらる、信孝最期よ、

昔しより主をうつゝの野間なれと頓て報いん羽柴筑前

〔織田家雜錄〕

織田三七殿 天正十一年五月二日生害、

功岸徳虎大禪定門



持運坊ニテ生害

信孝ノ享年

信孝ノ生母

信孝神戸具盛ノ養子トナル

信長信孝ヲ四國ニ封ズ

右ハ尾州知多郡野間庄柿並村大御堂寺ニ在、生害ハ大御堂寺ノ寺内持運坊ニテノ事也、〇十竹齋筆記同ジ、

〔寛永諸家系圖傳〕五十五 織田

信長

信忠 秋田城介、

信雄 三介、

信孝 三七郎、

信孝 天正十一年、尾州野間乃内海よをひて卒ま、せし二十六、

〔寛政重修諸家譜〕四百八十八 織田

信長 贈太政大臣、從一位、

信孝 三七郎、今の呈譜三七、侍從、從五位下、

信孝 母は坂氏、神戸藏人具盛ゟ養子とゐりて神戸を稱ま、永祿十二年、〇天童織田家譜、十三年ニ作ル、共ニ誤レリ、伊勢國神戸城に封せられ、天正五年十一月朔日、從五位下侍從よ敍任ま、十年五月、織田右府、信孝を四國に封して、これを伐取しむ、信孝兵一萬五千ゟ將とし、攝津國住吉浦よ陣して、大よ兵船を備ふ、

天正十一年五月二日

時ニ本能寺ハ變あるにあひて、豐臣太閤とともに明智光秀を討、事平くゐゝち、岐阜城にうつり住せ、ゐち信孝、柴田勝家と謀を通して、太閤を滅さむとせ、事終にならせ、十一年五月二日、尾張國野間の内海大堂(御堂)御寺にをいて自殺せ、年二十六、高巖德公と號せ、

高巖德公

〔織田傳記〕○丹波　摠見院樣御君達

信孝

三七郎、嘗爲神戸藏人平具盛之養子、

照雲院　御廟

信孝ノ室神戸氏

〔織田家雜錄〕三七信孝之妻者、勢州神戸藏人具盛入道法名樂三之女也、樂三者、北畠晴具之舍弟、神戸氏之養子也、

〔十竹齋筆記〕二　織田上野介信包ノ室ハ、神戸城主神戸藏人具盛入道樂三ノ妹ナリ、織田三七信孝ノ室ハ、樂三ノ息女也、

〔常在寺記錄〕○美濃　岐阜城主織田三代之事

信忠生害ノ後、秀信ノ後見ノ爲ニ、信忠ノ弟(信長ノ三男)三七郎信孝、當城居ラレケリ、越前ノ柴田修理亮勝家ニ與セラルヽニ依テ、天正十一(癸未)年、尾州内海ニ於テ、行年廿六歲ニテ生害シ侍リヌ、○上下略

信孝部下ニ殺サルトノ說

〔日本耶蘇會年報〕(歐文材料第六號譯文)

一五八二年、八三年及び八四年の日本通信、

一五八四年一月二日○天正十一年十一月二十日ニ當ル、附、長崎發、パードレ・ルイス・フロイスより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

○上略、勝家自殺スルコトニカヽル、四月二十四日ノ條ニ收ム、三七は、是より先、天來の響に觸れ、其力に依りて、永遠の生命の幸福を悟りしが、統治の慾望に眼くらみ、且つ其聞きし說敎を忘れ、再び己を坊主等の手に委ね、神籤を引き、諸偶像に約束をなし、又願を立つるに至れり、彼は瀧川の後援と庇護とを請はん爲めに赴きし、旅行中に、その引率せし少數の兵士等は、羽柴の寵を得んとして、彼を殺したれば、憐れにも其日を終りたり、

○信孝自殺スル日時未ダ詳ナラズ、姑ク織田家雜錄、寬政重修諸家譜ニ據リテ、本日ノ條ニ揭グ、ナホ信孝、神戸具盛ノ嗣トナルコト、元龜二年正月是月ノ條ニ、加冠スルコト、同三年正月是月ノ條ニ、信雄等ト尾張伊勢ノ本願寺一揆ヲ討ツコト、天正二年七月十二日ノ條ニ、越前ノ

天正十一年五月二日

本願寺一揆ヲ討ツコト、同三年三月十五日ノ條ニ、金剛峯寺ヲ攻ムルコト、同九年十月九日ノ條ニ、四國出陣ヲ命ゼラレ、讃岐ヲ與ヘラルヽコト、同十年五月七日ノ條ニ、將ニ四國ヲ攻メントシテ、住吉ニ陣スルコト、同年五月十一日ノ條ニ、秀吉等ト光秀ヲ山崎ニ擊テテ之ヲ破ルコト、同年六月十三日ノ條ニ、淺井長政ノ後室織田氏ヲ勝家ニ配スルコト、同月二十七日ノ條ニ、書ヲ秀吉ニ遺リテ、勝家ト修睦セシムルコト、同年十月十八日ノ條ニ、勝家、一益等ト秀吉ヲ除カントㇾ圖リ、前田利家ヲ遣シテ、姑ク之ト和スルコト、同年十一月二日ノ條ニ、岐阜城ニ秀吉ニ圍マレ、秀信ヲ出シ、質ヲ添ヘテ和ヲ請フコト、同年十二月二十日ノ條ニ、岐阜城ニ據リテ、再ビ兵ヲ擧ゲ、秀吉ノ攻ムル所トナルコト、同十一年四月十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕十　勝家自殺、信孝衰滅、付誅佐久間盛政、柴田權六、幷瀧川一益服從部

秀吉又赴濃州、圍岐阜數重、三七信孝、以所恃之勝家已滅、勢忽盡、相從者又尤

秀吉再ビ岐阜城ヲ圍ムトノ說



岡本良勝信孝ニ背クノ說
齋藤利堯稻葉刑部少輔等稻葉一鐵ニ依リテ秀吉ニ降ルノ說
二十九日信孝內海ニ移ルノ說

少、時北畠信雄卒二尾張之兵、共圍二岐阜、使二人誘信孝一曰、可二移處於尾張、爲レ子乞命於秀吉矣、信孝出レ城浮レ船至二知(多)田宇津美、信雄遣二其臣中川勘右衞門一、勸二信孝之死、信孝曰、我固曾レ之、遂自盡、○上下略、秀吉、長秀ニ越前加賀ノ地ヲ與フルコト及ビ秀吉坂本ニ至ルコトニカヽル、四月二十七日及ビ本月十一日ノ條ニ收ム、

〔武家事紀〕十　續集譜傳五　秀信

北畠信雄、殺其弟平信孝于內海、尾張野間、勝家滅亡イタシケレハ、信孝ニ相從處ノ軍士皆落失、岡本下野守既ニ逆心ヲ企、齋藤玄蕃允(利堯)、稻葉刑部少輔ハ、元稻葉伊豫入道一鐵カ甥ナレハ、寄手一鐵カスヽメニヨリテ降參ス、神戶侍四百八十騎皆勢州ニ落行テ、侍ワツカニ廿七人ニナレリ、其內ニ小林甚兵衞尉ト云ヘル神戶住人、石塔鍛冶國助カ子也、年來信孝ノ恩顧ニ因テ、コノ度城ニトヽマレリ、尾州ヨリ信雄岐阜ヘヲシヨセ、和睦ヲトケ、廿九日、信孝ヲ舟ニテ尾張國智多郡野間內海ニノカレシム、信雄ヨリ中川勘右衞門尉ヲ以テ自害ヲスヽム、信孝自殺ス、年廿六、

〔武德編年集成〕二十六　四月二十九日、三七信孝、尾陽野間內海ニ於テ自殺、

天正十一年五月二日

享年三十六歲トノ說

秀吉信雄ヲシテ信孝ヲ內海ニ移サシム

信孝船中ニテ自殺ストノ說

羽柴長秀岐阜城ヲ攻ムトノ說

享年三十六才、神戶ノ士新屬ノ近臣太田新右衞門介錯シ、神戶ノ鍛冶石堂但馬國介カ子小林甚兵衞トモニ殉死ス、信雄、昆弟ノ好ヲ棄テ、中川勘右衞門雄忠ヲ遣シ、信孝ニ死ヲ勸ルト云々、

〔柏崎物語〕中　一夫より岐阜へ責詰、信孝不叶、ときに秀吉より信雄へ被申送ゐ、其元とより信孝ゐ兄弟れ好ミ有之候へゐ、尾張れ內海れ方へ行を候樣被申送候へとれふ、是ゐ、其通被申送、信孝熱田れ海邊を傳被參候時ゐ、信雄れ家來中川勘左衞門申ゐ、秀吉兎角合點不仕候、是ゐゐ切腹とれふ、信孝、我等も左樣とゐ思候へ共、乍去兄弟れ好ミ故、先是まゐ來より候とゐ、船中よゐ生害、殉死ゐ石堂但馬守國助ゐ子小林甚兵衞介錯ゐ太田新兵衞、

〔增補筒井家記〕坤　織田三七信孝ハ、稻葉山、瑞龍寺山、岐阜山ノ三城ニ楯籠リ、羽柴美濃守秀長、三好孫七郎秀次ニ對面(ムカヒ)シテ防戰ス、寄手初二万餘人タリシカ、後ニハ四万人ニ餘レリ、サレモ岐阜方事共セス、逼々ニ戰ヘハ、寄手每度利ヲ失ヒテ、手負死人及數百人、四月廿日、北國勢打勝、中川瀨兵衞ハ討レ、高山右近ハ敗レヌト聞ヘケレハ、城中益勇ミ出テ、三城ヨリ打出、上方勢ヲ東西ヘ追崩ケリ、寄手暫シハ遠卷ニシケル所ニ、北國ノ先勢打負ヌト



二十四日攻圍ノ兵勝家ノ自殺ヲ城中ニ告グトノ說

圓平九郎國分佐渡守

織田新八郎信峰濃守平田壹岐守

云ヨリ、寄手又押寄攻戰フ、廿四日ノ晚ニ、美濃守秀長ノ家臣羽田長門守、小川下野守城近ク馬ヲ掛寄、去廿一日ノ夜軍ニ、玄蕃頭盛政權六ヲ生捕、廿四日ニハ北庄落去シテ、匠作勝家夫婦ハ自殺在テ、北國ハ靜リヌ、岐阜籠城ノ諸勢モ圍ヲ出テ、免レ可去ト呼リケレハ、城內ニハ是ヲ聞、敵ノ謀ニヤト思ヒナカラ甚タ訝リケリ、持口々々ノ諸將ヨリ、敵陣ヘ忍ノ者共アマタ出シテ是ヲ聞ニ、彌以誠ナリケレハ、城內騷キ出テ、トテモ城兵計ニテ利運ハ不可得、北國ノ後詰ヲコソ待シニ如何セント囁合シニ、丑ノ刻ヨリ、早齋藤玄蕃、稻葉刑部、岡本五左(太郎カ)衞門等、上方勢ヘ返忠シテ馳加リシカハ、雜兵等ハ次第々々ニ落出ス、殘ル兩城モ猶如斯、然共主將美濃守信孝ヲ始トシテ、宗徒ノ名有所ノ勇將等ハ、少モ不驚、酒宴シテコソ明サレケリ、廿五日ニハ、寄手六万餘人ニ及ヒ、三城ヲ取卷テソ攻ニケル、稻葉山ノ大將圓平九郎、國分佐渡守堅固ニ防戰ヒシカ共、味方ノ從兵大半落散、敵大勢二三ノ郭迄攻入ケレハ、今ハ是迄ト思ヒ、百餘人ニテ切テ出、敵ハ十餘人打取、平九郎遂ニ討死セリ、兄平八郎ハ信忠卿トモニ、京二條城ニテ戰死ヲ遂、兄弟共ニ無雙ノ勇士也、佐渡守モ同討死ス、瑞龍寺山織田新八郎、七兵衞弟ト云、峰信濃守、平田壹岐守、

天正十一年五月二日

順慶美濃ニ赴キ信孝ニ和ヲ說クトノ說

天正十一年五月二日

一万五千餘人、寄手ニ對シ散々ニ戰シカ、味方或落失、又ハ討死シケレハ、纔二百餘人ニ成ニケリ、ヨシヤ城ヲ枕ニシテ討死セント勇ケレハ、郎等共諫テ、死スルハ易シ、信孝ノ專度ヲ見屆、一所ニ如何ニモ成玉ヘト云ケレハ、最ト思ヒ、大勢ノ中ニ割入切入、四五十人切倒シ、岐阜ノ攻手ニ紛入、其身ハ遂ニ手モ不負、上下七十餘人ニテ岐阜ノ城ニ掛入ケレハ、信孝不斜悅テ、一處ニ安否ヲ究メントソ勇マレケル、廿五日申ノ刻ヨリ、三所ノ寄手六万餘人岐阜城ヲ四方ヨリ取卷、洩サシト攻ニケル、城内ニ落殘シ勢二千五百餘人在ケレハ、三七信孝、新八郎眞先懸テ、三方ニ切出、薙倒追打シ、死ニ狂ニ勇マレケレハ、寄手二百餘人討レ、五百餘人手課ケレハ、不叶三ノ郭ニ引ニケリ、城兵百餘人討レ、其外手負落散者多カリケレハ、今ハ是迄ト思ヒ、三七、新八城ニ引入、其夜ハ休息ス、廿六日、四方ノ寄手二ノ郭迄攻入ケリ、爰ニ筒井順慶ハ濃州軍無心許思ヒ、松倉、十市、箸尾等一千餘人ニテ、岐阜ノ陣ニ赴キケルカ、馳付ヤ否ヤ攻手ニ談シ、松倉、箸尾ヲ城内ニ入、信孝ヘ被申シハ、落城今日ト相見タリ、柱テ城ヲ可被出、左有ニ於テハ、一國ヲ申與ヘハ、三郎主秀俊



内海ハ信孝誕生ノ地トイフ說

南化玄興信孝ノ追善ヲ營ム

可爲此儀、一命可相調云々、信孝、右近、宮内ニ直ニ對面有テ曰、順慶ノ芳志誠可無限、柴田家（勝脫カ）與我約シ、先達テ各殞命、我獨何ノ面目有テ全生哉、且我ハ信長カ子也、秀吉ハ我家ノ奴夫ナリ、惜命屬彼麾下、恥先考可爲累代ノ大瑾ト云テ、兩使ニ盃酒ヲ賜ル、我ハ速ニ可自殺、城郭ハ雖可放火、先考ノ心ヲ竭サレシヲ無下ニセンモ恐アリ、且諸士ノ命ハ、順慶又汝等カ心ニ可任トテ、殿主ニ登ラレケレハ、兩士モ再三不及屈理ヲ歸リケル、寄手此ヨリ攻鼓ヲ止テ扣ヘケル、同日申ノ刻、三七信孝諸士ニ向ヒ、苦戰ノ志ヲ禮謝シ、我ハ可自殺、諸士ハ織田家ノ郎從ナレハ、全生、秀信、信雄ニ可仕、於背此儀ハ、永ク可爲勘當ト云テ、信孝近習五十餘人ニテ城ヲ出、尾州野間ノ内海ニ至リヌ、是則信孝誕生ノ地ナリ、大御堂寺ニ入、信孝（廿六歲、私曰、信孝生害五月二日ト云、誠勇激ノ若將也、傅士幸田彦右衞門介錯シテ切腹ス、織田新八郎同自害ス、是秀吉ヨリ依內意也、譬順慶强テ宥ムトモ秀吉用ヒ玉ハシ、信孝若於存命ハ、天下秀吉ノ手ニハ不落、サアリトテ主君也、是秀吉誤ノ一也、近習五十餘人ハ追々ニ殉死セリ、則主從ヲ內海ノ禪寺ニ葬送セリ、岐阜ノ南和（化カ）和尙モ此事ヲ聞、急

天正十一年五月二日

天正十一年五月二日

彼地ニ至、衆僧ト共ニ追善ヲソ爲ラレケル、角テ岐阜落去シケレハ、諸勢國々ニ歸城セリ、

〔花押彙纂〕カ之部

神戸信孝

○人見民造氏所藏文書（丹波）

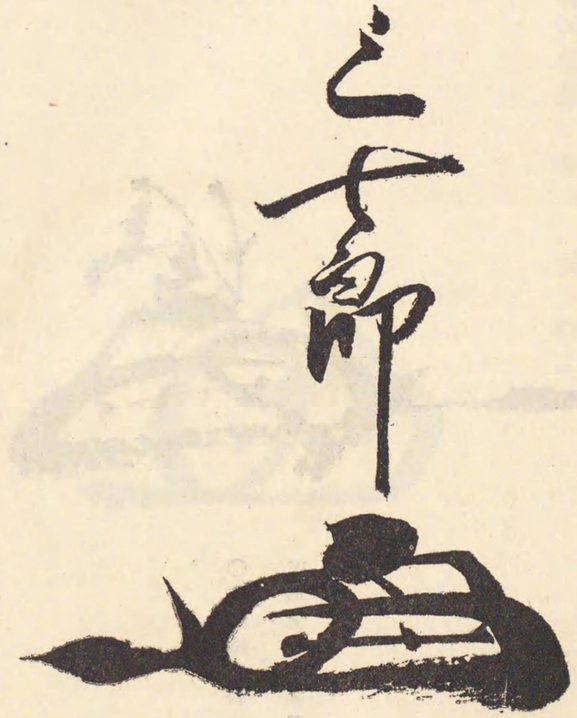
天正十年午五月十四日附丹州國侍宛

下知狀

天正十一年五月二日

○本能寺文書（山城）

天正十年七月三日附本能寺宛寺領安堵狀



○賀茂別雷神社文書(山城)
天正拾年十月日附禁制





〔印章彙纂〕神戸信孝

○高臺寺文書(山城)
天正十年十二月日附山岡三大夫
宛宛行狀

〔張州府志〕三十寺觀　智多郡　大御堂寺　此寺有織田信孝牌子、銘曰、右大將平朝臣淨岸大禪定門、按、信孝者右丞(相脫カ)信長庶子、故無敍爵、只稱三七、右大將官名不審、古記曰、信孝法名功岸德虎大禪定門、天正十一年五月二日自殺、與牌子矛盾、姑待後人訂正、○上下略

〔張州雜志抄〕四大御堂寺　知多郡柿竝村　織田三七信孝墓　在同所、義朝塔ノ南有北ニ向テ建之、高四尺計、織田信長三男、勢州神戸城主也云、天正十一癸未年、羽柴秀吉

天正十一年五月二日

信孝ハ勝家ノ聟トノ説　五月七日説　五月三日説　南坊ニテ生害

安養院

野間莊

内海莊

大御堂寺

與柴田勝家志津嶽一戰之時、信孝爲勝家聟故、勝家合力セラル、然勝家戰死ノ後、於此地自殺、年廿六、于時天正十一癸未五月二日、（イ七日）創業錄ニ五月三日云々、

〇中略當寺塔頭南坊ニテ生害云、南坊今安養院ト號ス、信孝法號功岸德虎大禪定門ト云由、古記出、然今安養院安置スル處牌子、淨岸大禪門ト有ト云、是故ヲ不知、又或云、辭世和歌石塔彫有シトイヘ𪜈、今苔テ不見也、

〔張州府志〕三十陵墓　智多郡　織田三七信孝墓　在柿竝村大御堂東、義朝墓右、信孝者右丞信長二子也、天正十一年、羽柴秀吉與柴田勝家爭權、信孝爲勝家聟、故協力守岐阜城、秀吉滅勝家、執信孝、遷之野間而殺之、信孝臨死詠歌曰、むかしより主をうつみの野間なればむくひをまてや羽柴筑前、時天正十一年五月二日也、

〔尾張志〕五莊名　知多郡　野間莊　上野間村を本所にて、其前後の數村をいふ、東鑑ニ野間莊又沼ともゝけり、

内海莊　東端村、西端村、吹越村等の數村をいふ、愚管抄に、義朝ハ馬にもえのらに、歩跣ニて尾張國まて落行て、内海庄司平忠致うち頼みて、かゝれ云々と見えさり、

〔尾張志〕五寺院　知多郡　大御堂寺眞言宗、　柿竝村ニありて、中嶋郡長野村万

藤原惺窩信孝ヲ弔フ

持善寺

太田新右衞門尉

深尾重政

德寺の末寺なり、

〔尾張志〕五墓塚　知多郡　織田侍從信孝墓　同所義朝の墓れ右ニあり、信孝ハ信長公れ二男（三男とするハ實ニあらす、）也、天正十一年、秀吉公の逆意ニ觸まて、岐阜の城をせめ落され、のゝまて此地ニ來り、五月二日生害ありし事、くわしく愛智郡の人物の條ニ記に、併せ見るへし、

〔惺窩先生文集〕二　過尾陽野間

今古義朝兼信孝、君臣亂逆後人哀、哀之不鑑應如此、莫道野間猶禍胎、

〔惺窩先生文集〕六　經織田信孝墓

大御堂中持善寺、曾聞信孝避讎來、寫懷歌詠思猶雅、辭別封書情欲摧、自割肝腸三尺刄、獨留骸骨一堆灰、行人今日問遺迹、竹雨松風聲帶哀、

〔神戸錄〕太田丹後守、又有新右衞門尉者、以故神戸士、仕信孝爲近習、信孝之敗、新右衞門尉獨離族人、守義不移、及其自殺、贊斬其首曰、自君之幼我未嘗貳也、當世之人、宜觀我之所爲、以爲勇士之模範矣、亦刳腹截喉而死、時人稱之、

〔土佐諸家系圖〕二〇土佐　深尾系圖

重政　同（天正）十一年、信孝爲秀吉公於野間内海自殺、依之家臣悉蟄舊邑、重政往

景勝去年越中新山ニ出兵ス

加州大聖寺之領主溝口伯耆守秀勝許、秀勝者以爲永井彌兵衛利直之內緣故也、〇上下略

下野宇都宮城主宇都宮國綱、上杉景勝ニ答ヘテ、景勝ノ越中攻略及ビ羽柴秀吉トノ和親ヲ賀ス、

〔上杉古文書〕七〇羽前

誠其已降良久不能音問條、內々可令啓達由、逼塞之砌預親封候、一段本望候、然者萬邦彌被任御所存之由肝要至極候、就中去歲至于越中新山地御出勢、卽時被入掌握之由、心地好次第候、殊秀吉近日御入魂候哉、猶以深重被相談、都鄙平均ニ可被廻御調略事尤候、當表之儀、一味中無二申合、諸口仕置等堅固候、可御心安候、餘事自是可申述候間、期其節閣筆端候、恐々謹言、

五月二日　山內殿御報　國綱(宇都宮)(花押)

三日、甲申、青蓮院尊朝法親王、天台宗諸山學頭ニ命ジテ、日吉社再興奉加ノ事ニ盡力セシメラル、

〔青蓮院文書〕〇山城

繪圖

忠重伊勢ニ出陣ス

就日吉社造立之儀、奉加之事於馳走者、宗中再興之神忠不可過之候、猶大敎院可申候也、

五月三日　天台宗諸山學頭中

是ヨリ先、三河苅屋城主水野忠重、北近江ノ戰況ヲ德川家康ニ報ズ、是日、家康、之ニ答ヘテ、其勞ヲ犒フ、

〔水野文書〕

於江北表、合戰之模樣幷繪圖被差越、卽令披見、得其意候、仍柴田討死之儀、方々同說注進候、次勢劦へ在出陣之由、御辛勞候、尙期來音候、恐々謹言、

五月三日　水野惣(忠重)兵衛尉殿　家康(花押)

〔寬政重修諸家譜〕三百二十八　水野忠重藤十郎、惣兵衛、和泉守、從五位下、(天正)十一年、豐臣太閤と柴田勝家と江北ニ於いまたゝかひ、勝家敗死をしかゝ、合戰れさはを圖し、使於をつくはふはニ告たてまりをしに、五月三日、御書をゑはふ、〇上下略

五日、丙戌、羽柴秀吉、近江長濱ニ歸リ、屬將因幡鳥取城主宮部繼潤ニ答ヘテ、

近ク播磨姫路ニ還ラントスルヲ告グ、

〔萩藩閥閲録〕九十二 山縣小傳次

書狀披見候、仍北國表之儀平均ニ申付、長尾人質以下迄相ト隙明之間、今日至長濱打入候、近日姫路ゟ可令歸城之間、旁期來音候、恐々謹言、

筑前守

五月五日　秀吉 御判

宮部善(繼潤)淨坊 ○本日秀吉、長濱ニ歸ルコト、本月六日、同七日ノ條ニ收ムル黄微古簡集、高木文書ニモ見ユ、

〔兼見卿記〕五　五月□(五日)□、丙戌、○中略、兼見、戰勝祝賀ノ勅使トシテ、越前ニ向ツテ出發スルコトニカヽル、本月七日ノ條ニ收ム、傳聞、筑州北郡長濱へ歸城之由申了、

○秀吉、進ンデ加賀ニ入ルコト、四月二十五日ノ條ニ、越前北莊ニ歸ルコト、本月二日ノ條ニ見ユ、

六日、丁亥、羽柴秀吉、備前本德寺ニ書ヲ與ヘテ、其物ヲ贈レルヲ謝シ、北國表平定ト、長濱歸陣トヲ報ズ、

〔黄微古簡集〕一垣見喜左衞門所藏

爲御音信帷五贈賜候、御懇之儀、怡悅之至候、仍北國表儀屬平均、明隙付而、昨日至江州長濱納馬候、猶御使可被申候、恐々謹言、

五月六日　秀吉(花押)

本德寺 御坊中

(朱書)「上包紙ニ」　羽柴筑前守

本德寺 御坊中　秀吉

本給紺ノ瓶役改替

本領得替

德川家康、甲斐ノ士坂本忠豐ヲシテ、所領ヲ安堵セシム、

〔古文書〕坂本 ○記錄御用所本　坂本武兵衞忠豐拜領、同武平太忠敬書上、

東照宮御判物

甲州本給河東紺之ゟめ役高百貫文、定納七拾五貫文、信劦之改替、藏田之內壹貫九百四十三文、同國替、同所之內眞々部主膳分百四十文、嶋三條之內夫丸三分壹之事、

右本領內得替領掌不可有相違之狀如件、

天正十一年

五月六日 (朱印)

坂本武(忠豐)兵衞殿

秀吉光明ヲ誘フ

光明名字ヲ和田ト改ム

小里光久

神戸信孝ノ遺臣美濃小里邑主小里光明、遠江濱松ニ赴キテ、德川家康ニ仕フ、

〔譜牒餘錄〕四十松平丹波守　和田五郎右衛門先祖小里助右衛門御感狀御證文拜領之覺書

一小里助右衛門光明、本家ハ土岐氏、濃州小里ニ住セるニ依て小里と改、父出羽守光忠より織田信濃(長カ)公ニ屬セ、光忠ゟ嫡男を光次と云、元龜三年、甲州勢と信州境ニて合戰し、濃州下村ニて討死仕候、其子光久ハ明智亂之時、二條ニて討死仕候、光明ハ光忠ゟ二男ニ〻御座候、信長公逝去之後、三七信孝卿ニ仕ふ、然るニ信孝卿生害之後、羽柴秀吉公、森武(長可)藏守連狀を以、味方ニ屬すへき由申來候得共、光明義を守〻不從、天正十一年五月六日、居城小里を立去、氏をも和田と改め、遠州濱松へ參、東照權現樣ニ御奉公を奉願、井伊兵部少輔殿御披露ニて御目見仕、三州小原ニ罷在候、其頃森武藏守人數度々三州へ來ヲ侵申ニ付、光明父子每度防戰仕候、○寬政重修諸家譜

小里光明譜大抵同ジ、

〔略譜〕小里本名土岐　光明小里助右衛門、　小里彥太郎光久、天正十午年六月二日、於京都

和田玄劫

島原口ノ戰

肥後口ハ無事

深江安德兩城鎭貴ニ降ル

本能寺討死仕、悴無御座候ニ付、伯父小里助右衛門光明跡式相續仕、在所小里村ニ罷在候處、秀吉公、森武(長可)藏守御連判ニ而、可御手著旨、被仰越候得共、不隨其意、在所を浪々仕、半俗ニ而和田玄劫与改罷在候處、天正十一未年、權現樣ハ被召出、御扶持方拜領、三州小原ニ罷在、其後關東ハ御供之刻、相州岡田ニ而知行三百石拜領之、○下略

龍造寺隆信ノ屬將肥前深江城主安富純泰、安德城主安德上野介、降ヲ日江城主有馬鎭貴ニ請フ、既ニシテ、純泰、約ヲ變ジ、隆信ノ援ヲ得テ勢振野フ、島津義久、自ラ肥前ニ出馬セントシテ止ム、

〔上井覺兼日帳〕九○日向　五月

一十日、○中略、谷山志摩介、田尻赴援ノコトニカヽル、正月十三日ノ條ニ收ム、有馬表へ當(宮崎)所之二三人之衆も續候、安德樣(マヽ)御手ニ入候由申候、虎仁原藤七兵衛尉嶋原口ニて手負候間、拙者ハ舟より罷歸由也、横山玄蕃介も彼人ニ相添候、志摩(谷山)助計陸路を參さる由申候、肥州口無何事之由也、○下略

一廿日、○中略、田尻鑑種ノ兵、龍造寺隆信ノ兵ヲ破ルコトニカヽル、正月十三日ノ條ニ收ム、又有馬殿よりハ書狀是又持セ預候、是も去六日、深江、安德兩所改先非、御奉公之由申候間、此方之

義久ノ兵安徳ニ入ル

深江ハ覺悟相違ス義久出馬セバ日向衆モ參陣スベシ

勝利ニ依リ義久出馬ヲ止ム

十五町ヲ一人宛ニ課シテ有馬ニ赴援セシム

番衆地下衆兩所へ指籠候由也、〇下略、遊行調ノコトニカヽル、四月二十五日ノ條ニ收ム、

一廿二日、〇中略、吉利忠澄等、覺兼ノ病ヲ見舞フ此日忠棟より書狀を以承候趣ハ、有馬表深江、安徳御奉公可申由候間、先々安徳へ軍衆指籠被成候、然處深江之事頃相違仕、一圓ニ御奉公仕間敷ニ相定候、然ハ安徳之當番衆及難儀候條、太守樣も、來月二日可爲御進發之由候ハヽ、日州兩院衆續之儀可申渡候由候條、卽刻寄々次第々々ニ申渡候也、

## 〔上井覺兼日帳〕

〇十日向　五月

一廿七日、諸篇如常、平田狩野介鹿兒嶋へ頃被參候、然を拙者又中書(家久)公へ爲御使豪仰候趣ハ、先刻有馬境及難儀之由候間、來月二日可爲御進發相定候處ニ、此節ハ彼表も勝利之由候間、此度御發足ハ指延し、然ハ境目へ從所々十五町ニ人躰一人ゟヽ被仰付、有馬ニ御渡海御談合相定候、如其日州兩院可申付之由候也、拙者當時養生寂中候條、諸方へ申渡事銘々難成候ハヽ、佐土原(家久)よりも寄々被仰付候而可然之上意也、卽諸所へ申濟候、佐土原よりも被仰濟候て肝要之由、使者ゟて申候、彼方も早々御校量候由也、狩野介殿柏原將へ賴して會釋申候、拙者見參ハ不仕候、此日嶽米良殿



新納忠堯
川上忠堅ヲシテ安徳ニ入ラシム

深江城守備堅シ

被來候、鹿兒島へも無沙汰申候間、伺公之覺悟候、然處此方ゟて續之儀、御聞付候如何之由候也、先々鹿兒嶋へハ御不參候共、續之事肝要之由申候也、〇醫三宜、覺兼ノ許ニ來ルコトニカヽル、六月六日ノ條ニ收ム、

## 〔後編薩藩舊記雜錄〕

十四　義久公御譜中

于鹿兒嶋、其書曰、去六日深江、安徳兩城主改先非、請屬旗下、許諾、將旗下兵(ヲヽ)於入其地也、

有馬氏丁入守兵於安徳之時、深江變前約、以不得屈旗下云爾由、是安徳之守兵窮困之至也、因此之旨、義久來月二日欲向夫地爲進發、先遣新納刑部大輔忠堯、川上左京亮忠堅、領騎步赴其地、各已渡于高來郡安徳、則城主及有馬氏之一族等迎來海濱、而遂對面賀渡楫矣、同郡深江、島原屬隆信、深城隍警衞實堅矣、是以敵城難拔而、我軍只鎭守安徳一城耳、聞此之告、六月二日之進發彌以必定、揃兵器催士卒之際、忽有告來曰、我師旅之在于高來者度々有勝利、無敢敗績、由此言、止義久之進發、田賦每十五町定勇士一人、欲渡有馬增軍勢者也、

## 〔後編薩藩舊記雜錄〕

十四　〇出所書名ヲ闕ク、

天正十一年五月六日

新納忠元疾ム
同忠堯有馬ニ渡海ス
川上忠堅
箕田平馬
相良忠房
ノ兵ヲ率

一田賦毎拾五町定勇士壹人、

右天正十一年五月六日、肥前國高來郡深江、安德之兩城、屬于義久公御幕下之旨、有馬氏より到來候付、自此方安德ニ被入守兵之時、深江依變前約、安德之守兵及困窮ニ候旨、申來候付、義久公同六月二日、彼地ニ御發向之御催ニ候、先達而新納刑部太夫忠堯、川上左京亮忠堅ハ人衆少々相添被差越候處、味方得利之由捷書到來候ニ付、義久公被止御出陣、田賦毎十五町定勇士壹人、援兵ハ有馬ハ被相渡候時之盛ニ而、御譜中ニ有之、

〔新納忠元勳功幷家筋大概〕一同(天正)十一未五月、是より以前龍造寺隆信有馬領之嶋原深江を乘取候ニ付、有馬鎭貴此御方ハ御加勢被申上候處、此月六日、深江、安德之兩城主ハ御味方仕度申上越、其時分忠元ニも病氣ニ而、忠堯幷川上左京亮忠堅ニ被仰付、人衆召列、有馬ハ罷渡、安德城ハ致在番候處、深江城者謀叛ニ而、却而此御方之隙ヲ窺候、○下略、忠堯戰死スルコトニカヽル、六月十三日ノ條ニ收ム、

〔諸家由緒〕川上左京系圖○舊典類聚十三所收　川上忠堅初久堅、左京允、　天正十一年夏、肥前國有馬修理大夫鎭貴乞援兵義久公、忠堅與新納刑部太輔忠堯共爲將入肥

キテ軍ニ從フ
伊地知助右衞門
福崎新助
求摩衆八代衆
深江島原ハ隆信ニ屬ス
安德志ヲ變ジテ義久ノ兵ヲ引入ル
深江佐賀間ノ通路

前、肥後住人箕田平馬卒(率)相良勢從之、安德城主有馬氏族皆迎出對面、○上下略

〔伊地知助右衞門家筋之事〕○舊典類聚十下所收　一肥前國之於安德、有馬殿爲御加勢人衆被差渡候、其砌五月十五日、嶋原ゟ敵一二千ほと、安德野鈴ハ指寄候、折節我等馬一騎ニて敵中ハ掛入候而粉骨仕候、其刻御證跡人ハ福崎新助殿、其外求摩、八代衆、於有馬可有之事、

〔藤原有馬世譜〕二御靈公之譜上　一同年(天正十一年)五月六日、深江、安德の兩城主、先非を改め、御幕下ニ屬さん事を請、是ニ依て、薩州の人數を安德の城ニ入て守らしむるの處、深江の城主前約を變して人數を入れも、安德守兵困窮も、嶋津義久此事を聞たまひて、來月二日、親ら進發あるへしと、先新納刑部大輔忠堯、川上左京亮忠賢(堅)を大將として、有馬へ渡も、此時深江、嶋原皆隆信ニ屬して籠城も、其城堅固ニして、急ニ攻へからハ、薩摩の軍勢唯安德一城を守り居とり、此ニ因て、義久既ニ進發あるへきの處、味方所々勝利ニ因て、其事延引も、○越前丸岡有馬家譜異事ナシ、

〔普聞集〕六　四月、深江ニ一味シタル安德氏、俄ニ心ヲ變シテ、薩州勢ヲヒクニヨリ、深江ヨリ佐賀ノ通路斷テ城中困ム、義弘長臣伊集院肥前守、新納

中斷ス

安富純泰援ヲ隆信ニ乞フ

純泰隆信ニ屬シテ鎭貴ニ背ク

隆信肥後ヲ攻ム

島津忠平肥後ニ赴援ス

鎭貴安富左兵衞入道德圓等ヲ遣シテ隆信ヲ助ク

鎭貴隆信ニ背キテ義久ノ兵ヲ引入ル



武藏守(忠元)、長男刑部大輔、椛山播磨守、福崎新兵衞、蓑田平右馬助、川上左京亮等ニ、七千餘騎ヲサシソヘ、有馬安德ヲスクフ、薩州勢有馬來リ、深江城ヲ攻ルコト十八日ニ及ヘリ、伯耆守(安富純治、同純泰)父子ヨク防キテ援ヒヲ佐賀ニ乞、隆信政家藤津郡ノ兵士ヲサシツカハス、吉田、嬉野、德島、犬塚、原、永田、辻、上瀧以下高來ニ至リ、東邊ノ横岳鎭貞(家實)、安武鎭則等モ、深江ニ赴テアヒ加ハル、

## 〔鍋島直茂譜考補〕四　深江城軍

今年ノ夏、高來島深江ノ城主安富下野守純泰、佐嘉ヘ志ヲ通シテ、有馬方ト相戰フ、其軍ノ樣ヲ尋聞ニ、去々年ノ九月、肥後國宇土隈本ノ城主共、龍造寺方ヨリ攻ラレ、是ヲ防カンタメ薩州ヘ申送リ、援兵ヲ乞シニ依テ、島津兵庫頭義弘(忠平)八代ヘ來リ在陣シ、龍造寺方ト相戰フ、依之佐嘉ヨリモ其援ノタメ、去年天正十年十月、隆信公ノ御下知ヲ蒙リ、船路手寄ノ由ニテ、高來島中ノ歷々有馬左衞門佐鎭貴ハ、名代トシテ安富左兵衞入道德圓(純生)ヲ差出シ、其外安富下野守以下ノ輩、下村生運ヲ監使トシテ、十月九日、肥後ヘ渡海シ、横島ノ城ヘ入ル、斯ル處ニ有馬鎭貴、又々龍造寺ヘ對シテ心ヲ變シ、其跡ヲ計リ、翌ル十日、島津勢ヲ引入、新納武藏守、嫡子刑部大輔、伊集院肥前守、河上左京



義久ノ兵鎭貴ノ兵ト深江ヲ攻ム

純泰横島ニ在リ純治ハ島原城ニ在リ

安德上野介義久ノ兵ヲ其城ニ入ル

隆信安武家教等ヲシテ純泰ヲ助ケシム

亮、樺山播磨守、福崎新兵衞、幷八代侍蓑田平馬助高來ヘ押渡リ、有馬ト勢ヲ合セ、先ツ龍造寺一味ノ安富下野守カ深江ノ城ヲ攻ヘシト、深江布津村不殘燒拂ヒ、城際迄取懸ル、折節下野守ハ横島ニアリ、父伯耆守純治ハ、島原式部大輔カ島原ノ城ノ入番ニテ不在合、城中無勢ナリシカ𪜈、下野守ノ妻女下知ヲ加ヘ、留主居ノ家人等ヲ相勵シ、城ヲ持、足輕少々打取リ、勝利ヲ得、二三ケ村ノ男女牛馬ニ至ル迄、皆城中ヘ取込ル、此事早速横島ヘ聞ヘシカハ、明ル十一日、下野守深江ニ歸リ、城内ヲ取靜メ、敵ヲ防キ、安德上野介純俊、島原式部大輔純豐ト心ヲ合セ、手堅ク籠城ス、然ルニ彼安德ハ、下野守ノ伯父ナリシカ、如何ナル所存カアリケン、今年(十一)四月廿八日、俄ニ心ヲ變シ、有馬方ト成テ、薩摩勢ヲ己カ城ヘ招キ入レ、佐嘉ノ通路ヲ取切リ、兩方ヨリ深江ノ城ニ取詰、夜晝十八日ノ間火矢ヲ射掛、烈シク攻戰フ、下野守氣ヲ屈セス、鐵炮ヲ打セ、火矢ヲ消サセテ是ヲ防ク、此事佐嘉ヘ聞ヘ、隆信公ヨリ御加勢トシテ、筑後ノ安武式部大輔家教、三根郡ノ横岳兵庫頭家實ヲ初メ、藤津衆ヲ段々ニ高來ヘ被差越、深江ノ城ヘ入、其上兵粮ノ用ニ多比良村ニテ五十町凡一千石、ノ地ヲ被相渡ケリ、斯リシ程ニ、城中彌堅固ニ成テ籠城ス、

安富純泰

純泰烏原純豐ト共ニ鎭貴ニ背キテ隆信ニ屬ス　鎭貴モ亦隆信ニ附屬ス　鎭貴隆信ニ叛キ義久ノ援ヲ乞フ　純泰ノ室ヨク城ヲ守ル　安富正佐同德圓等鎭貴ニ屬ス

〔深江家譜〕一安富下野守純泰（純治之子）道叱入道、

當知行先祖累代之地高來東鄕、幷自龍造寺隆信公、同鎭賢公、同鄕之內布津村給之、

此時屬有馬左衞門佐鎭貴、雖然天正之頃、鎭貴對龍造寺隆信公手切之半、至下野守樣々無曲心底依有之、天正八年、嶋原式部太輔純豐申合、龍造寺方仁相成故、高來嶋中過半同心、有馬領手狹成、鎭貴不及力、又々相隨于龍造寺、然所同十年之冬、嶋津義弘攻入於肥後國、龍造寺方之輩與相鬪、此時高來衆海上手寄之間、肥後橫嶋城之可勤加番旨、隆信公之蒙仰、皆々彼表江發向、自有馬鎭貴茂安富左兵衞入道德圓爲頭人、歷々指渡、下野守寂爲其數同十月九日、橫嶋江罷向、自佐嘉之檢使下村生運也、于時有馬鎭貴計其跡、再對龍造寺企逆意、嶋津衆申合、爲手切、下野守領知布津、深江之兩村仁相働、城之際迄令放火、俄事云、野州留主云、城中雖迫難儀、始內室、留主居之家人等百姓以下迄守城防戰、敵之輕卒少々討捕之、得勝利、二三箇村之者共其儘至男女牛馬、城內仁取込、此時祖父正佐入道、末子德圓父子、其外親族共多爲有馬方之間、心被引可通敵歟與、色々危事雖有之、內室正佐與





純泰歸城ス　四月二十八日安德上野介義久ノ兵ヲ其城ニ引入ル　安富正佐同德圓德圓ノ子藤右衞門尉父ト絕

兵粮料所

申論、竟爭勝自相働、防敵事絕言、彼內室伯父安德上野介純俊女也、

一此事於橫嶋注進有之、下野守翌日令歸城、至城中見其躰、前後不覺之仕合也、雖然百姓原取靜、城之普請等加下知、安德上野介、嶋原式部大輔一味同心申合、段々相續堅固籠城、其後嶋津有馬之兩勢度々押寄、數日之間雖攻、一族家人百姓等迄每日每夜防戰、碎手持城終不屈、

一然處翌天正十一年四月廿八日、安德上野介、如何成謂不知、俄心變、己之城嶋津衆引入、依致手替、佐嘉江之通路茂絕果、嶋原鞍掛山溫泉山傳之於路々、家人等餘多依被討捕、子息助四郎（童形）于時九歲對龍造寺爲人質、頃日雖在于柳河、其音信茂不相叶、雖然自隆信公爲御加勢、藤津衆宇禮志野、辻、永田、上瀧、久間、犬塚原、德嶋以下、其外東目衆橫岳兵庫頭家實、安武式部大輔家教等、代々深江之城仁被指遣、爲兵粮料所、於多比良村五拾町之地被下置、海上茂且丈夫被仰付、因茲彌勵機成勝色、敵自兩方取詰、日夜十八日之間、火矢射掛雖責城、城中之者女童迄猶々防之、數度之軍一度茂後不取、

一祖父正佐入道及老耄、初德圓、敵方好多故、有馬心不切、依之有家村迄送之、德圓ニ渡、此時德圓之子藤右衞門尉在于深江之城、德圓ト父子之好有之間、正

チテ純泰ニ屬ス

鎭貴ハ政家ノ外舅

佐可有同道旨雖勸之、藤右衞門不承引、留深江、其心底猶徹、後野州去深江之時同心、共來於藤津、

## 〔肥陽軍記〕八　島原合戰事

有馬左衞門佐義純（鎭貴）ハ、政家公ノ御シウトヽ成ヌレバ、野心ナドハヨモアルマジキト思シ召ケルニ、西肥前ヲ責トラレシフルキ恨ヤノコリケン、又始終タノミガタシトヤ思ケン、先年ヨリ心ヲ變シ、田尻ト共ニ薩州ニ通シヌ、一族深江伯耆守ハ、深江ニ在テ有馬ヲ放レ、龍公ニ心ヲハコブ、政家公ヨリ江上家種、横岳家實、馬場鑑周以下ニ七千餘騎ヲソヘテ、深江ニ加番サセラル、深江ヨリ有馬ガ城ハ一里ニ足ラザル間ナリ、義純カクテハ叶フマジト思ヒ、義弘ニ人質ヲ遣ハシ、援兵ヲコフ、義弘卽長臣新納武藏守、嫡子刑部大輔、伊集院肥前守、枇山播磨守幷ニ川上左京兆（落字アルベシ、鎭田平馬介、川上左京兆タヽ三騎ノリイタシテ、深江邊ヲ巡見ス、

## 〔北肥戰誌〕二十七　高來深江城軍ノ事

今年天正十一年ノ夏、高來島深江ノ城主安富下野守純泰、龍造寺ニ一味シテ、島津、有馬ト打戰フ、其次第ヲ尋ルニ、去年一月九日ヨリ隆信ノ下知トシテ、當島中ノ輩、有馬家人ヲ初メ、肥後ノ橫島ノ城番ニ赴キ、下野守モ其人數也、然ルニ有馬左衞門佐鎭貴、其留主ヲ計テ、又々龍造寺ニ至テ心ヲ飜シ、島津ヘ一味スヘキヨシ云送リ、先龍造寺へ手切ノタヽメ、布津村、深江村ヲ放火シ、下野守カ深江ノ城際マテ取詰ル、此時下野守ハ橫島ヘ赴キ、父伯耆守純治ハ島原式部太輔純豐カ島原ノ城ノ入番ニテ不在合、深江ノ城中ナカ々々無勢ニシテ、難防見ヘシカトモ、下野守カ妻女（幷）留守居ノ者共、百姓以下迄同前ニ相働キ、敵ノ足輕少々討トリ得勝利、領知三ケ村ノ男女牛馬迄悉ク城内ニ取込、城ヲ持堪ヘタリ、然ニ此時下野守カ祖父ニ、但馬守貞直ト云者アリ、入道シテ正佐ト號ス、至極年老シ故、老耄シテ有馬方ニ心引レ、樣々危キ事モ多カリシニ、下野守ノ妻女（姓）ノ賢女ニテ、正佐ヲ押籠、城中ヲ下知シ、悉皆彼女一人ノ働ヲ以テ籠城ス、此事橫島ヱ早速聞ヘシカハ、下野守同十一日、深江ニ馳歸リ、安德上野介、島原式部太輔ハ元ヨリ一味成シカハ、其城々段々相續キ、彌堅固ニ城ヲ持テ、有馬方ノ軍兵ト日夜防戰シケリ、斯テ有馬方色々行テヲ以テ是ヲ攻シカトモ、下野守カ家人、其外百姓以下迄骨ヲ碎テ相働キ、去年天正十年ハ歲ヲ重テ籠城ス、

純泰ノ妻ヨク鎭貴ノ兵ヲ防グ

一斯ル處ニ、今年四月廿八日、深江一味ノ安徳上野介純俊、如何ナル所存ヤ出來ケン、俄ニ心ヲ變シ、有馬方ト成テ、薩摩勢ヲ己レカ安徳ノ城ヘ招キ入レ、佐嘉ノ通路ヲ絶テ、龍造寺ニ對シ逆意ヲナシケリ、此上野介ハ下野守カタメニハ伯父ニテ舅ナリ、是ヨリ深江ト佐嘉ノ通用相切、下野守難儀ニ及ヒテ、島原山鞍掛越、溫泉山傳ヒ忍々ノ通路ニモ、途中ニテ家人等多ク討セケリ、斯ル半ニ薩摩ヨリ有馬安徳ヘ加勢トシテ、伊集院肥前守、新納武藏守、同長男刑部大輔、樺山播磨守、福崎新兵衞、河上左京亮其外八代侍ニ、蓑田平右馬助ヲ初メ、七千餘騎高來ヘ押渡ル、此勢ハ皆島津兵庫頭忠平此比八代ニ在テ下知ヲ加ヘ、肥後ヨリ差向シトソ聞ヘシ、斯テ島津ヨリノ加勢各安徳ノ城ヘ入テ、有馬勢ト同ク安富下野守カ深江ノ城ヘ取懸、兩方ヨリ差詰火矢ヲ射掛、鐵炮ヲ放テ烈シク攻戰フ事夜晝十八日カ間也、サレモ城主下野守下知ヲ加ヘ、稠シク鐵炮ヲ打セ、敵ノ火矢ヲ消サセテ大キニ禦キ戰ヒ、島津有馬ノ敵軍ヲ追散シケリ、此事隆信ヘ注進アリシカハ、急キ加勢ヲ越スヘシトテ、筑後ノ安武式部太輔家教、三根郡ノ横岳兵庫頭家實ヲ高來ヘ被差越、深江ノ城ヘ入ラレ、其後藤津、彼杵

安徳上野介ハ純泰ノ伯父ニシテ外舅

義久ノ援兵八代ヨリ渡ル

純泰ヨク拒グ

隆信モ亦援兵ヲ遣ス



ノ輩ヘモ下知有テ、安富ヲソ援ハレケル、其上又兵粮ノ用ニトテ、多比良村ニテ五十町ノ田地ヲ被相渡シ間、下野守彌心强ク成テ、シカト籠城シケリ、

## 〔日本耶蘇會年報〕（歐文材料第七號譯文）

### 耶蘇會のパードレ及びイルマンの日本通信　第二編

一五八四年一月二十日（天正十一年十二月八日ニ當ル）、附、長崎發、パードレ・ルイス・フロイスより、印度地方區長アレッサンドロ・ワリニヤニに贈りし書翰、

當シ(下)モの地方に於ては、有馬の領主ドン・プロタシヨ(有馬鎭貫)が、彼を苦しめたる暴君龍造寺に叛きたる後、種々の事起りたるが、今日まで何等重大なる事なし、何となれば、有馬殿が保護を請ひたる薩摩の王は、既に一年半を經たる今日まで未だ其救援をなさず、軍隊を高來地方に出して、有馬殿に叛きたる諸城を降伏せしむることは希望に留まれり、薩摩の兵は肥後國の征服に從事し、此處に其兵を用ひ、全力を之に注げり、而して高來を守る要ある時は、通常此海上に於て掠奪を行ひ、敵味方共に赦すことなき者を派遣せり、安徳の城は薩摩の味方となりたり、然れども甚だ小なる城なれば、敵の

島津氏ハ有馬ヲ救援セズシテ肥後ノ征服ニ從フ

安徳城島津氏ニ歸ス

鍵なる島原に入る爲め大なる助とならず、

鎭貴深堀氏ヲ說キテ成ラズ

有馬殿は昨年深堀殿と親しみ、其臣下の領地に足を入るゝことを試みんと欲し、左兵衞殿といふ年少の寵臣に此交涉を命じたり、彼は他に四五人を伴ひ、深堀を訪ねしが、深堀殿は、計略に於てはユグルタ（ヌミヂヤの王なり、）の如き人なれば、大に之を歡迎し、彼等と交涉を遂げたる後、盛なる饗宴を設け、彼等が回答を喜び歸途に就き、船に乘りたる後、數艘の船を準備し、一人も殘さず彼等を殺したり、

有馬城燒ク

ドン・プロタシヨは又他の不幸に遭遇せり、卽ちアントニオ・ガルセスのジヤンク船が、口ノ津より支那に歸りたる後、四五日を經て、有馬の城に第三回の火災起り、同所に有りし物を悉く燒きたれば、甚だ窮迫せり、然れども神の恩寵に依り、尊師が同所に在りし時、彼の住みし家の上の山頂に家を建つることに著手したり、彼の叔父左兵衞殿は善きキリシタンにして、力の限り助力すれども、同所には收入を有せず、賴るべき物なきが故に皆弱し、殿の兄弟等は人質として、代る代る薩摩の王の兄弟の居城八代に赴けり、

鎭貴ノ兄弟ヲ質トシテ八代ニ抵ル

○上下略、大友宗麟、豐前ニ攻入ルコト及ビ秋月種實、大友氏ト爭フコトニカ、ル、九月二十七日ノ條ニ收ム、



○島津忠平、比志島國貞ヲ有馬ニ遣シテ、鎭貴ヲ援ケシムルコト、正月六日ノ條ニ、鎭貴、義久ニ手火矢衆ノ來援ヲ求ムルコト、三月二十三日ノ條ニ、義久ノ將新納忠堯等、深江ヲ攻メテ戰死スルコト、六月十三日ノ條ニ見ユ、

安德城主有馬德圓

隆信藤津郡ノ衆ヲシテ深江ニ赴援セシムル

島原兵部少輔鎭貴ニ與スト

## 〔參考〕

### 〔歷代鎭西志〕　十八

（天正十一年）夏四月、肥前國高來郡安德城主有馬德圓、（德圓或曰安德宗泉、亦曰安德雅仙、）先年龍造寺隆信征有馬之日、最初從隆信、々々據安德、依深江安德之和談、以有馬氏與隆信相親交、爾來隆信以安德及深江城爲有馬之藩鎭、於是安德依嶋津之誘、叛龍造寺而及籠城、亦請援兵於肥後嶋津、島津義弘遣新納武藏守、同刑部大輔、谷山播磨守、伊集院肥前守、樺山刑部少輔等、救有馬安德、而薩軍三千騎渡海而入安德城、廿八日也、塞佐嘉之通路、取懸于深江城、或射火箭、或放鐵炮、攻責夜日十八日也、城主安富伯耆守、同下野守父子一族、能守焉能拒焉、未敢毀、於是隆信令藤津郡衆吉田、嬉野、德嶋、犬塚、原、長田、辻、上瀧等、向於高來、橫岳兵庫頭鎭貞、安武式部少輔鎭則等東方衆、渡海于有馬、救深江、退治嶋津有馬也、仍藤津郡衆到神代、茲島原兵部少輔爲敵塞其路、橫岳、安武航

ノ說

鎭貴隆信ニ降ル

隆信蒲池鎭漣一族ヲ滅ス

天正十一年五月六日

而入深江、隆信以高來郡多比良村之米一千石、納之深江、但爲城兵兵粮、夏四月下旬五月六月之交也、數回挑戰、雌雄互交、

〔有馬龍造寺島津大友合戰異說〕○碩田叢史十六所收　有馬家と龍造寺家と合戰之次第相違ニ付兩說ヲ記、

一肥前國高來郡有馬之城主有馬修理太夫義純入道仙岩と、天正の始メ隆信ニ降參にて、一族嶋原大學介、土黑備前守之士兩人を隆信方ニ人質ニさし遣す、又仙岩の娘を佐賀の城ニ遣し、隆信乃長男民部太夫政家ゟ婦(夫下同ジ)人とおす、是故ニ暫らく無事なりしゟ、天正十年ニ至て、又有馬、龍造寺牟(矛)楯ス、此起る、去ル九月隆信筑後柳川の城主蒲池鎭竝(漣下同ジ)ヲ佐賀へ招寄せ、討果し、直ニ柳川ニ押寄せ、鎭竝ゟ妻子從類悉く打亡ス、鎭竝ニ男子等四人有り、三人ハ害せらす、嫡女壹人乳母ニ扶ラレ、有馬を賴んとて高來ニ到ル、樣子を伺ひ、筑後方ニ而、賤き者の由にて奉公を勤メゟる、其名を德女と云、其秋七月七夕の祭りに、城中の女ヒ集り、色々の衣を掛祭る、德女と何とて衣を掛ケヌヤト伴人の問ゟれる、德女此時歌を詠しゟる、

生殘ハ(マヽ)何をゟ借ん七夕に涙の外ハ身にすハヽおす

鎭漣ノ女鎭貴ニ賴ル

鎭漣ノ女鎭貴ノ嫡孫ノ妻トナルトノ說

安德宗家

有馬ハ名家ナレドモ力足ラズ

仙岩此歌を聞より、去ハこす始より唯人ならすおもひしゟ、歌の心さ哀す也、父母と誰すと尋、是悲(非カ)なく有りれ儘ニ語出し、親の敵を討度よし、涙なゟら賴ミゟる、仙岩大きニおとゝき、鎭竝の息女とる夢ニ茂知らて過ぎゟるこす無禮の程こす本意なゟれ、鎭竝と仙岩とる、本より宿緣有りゟれとも、海山を隔し故、打過ゟるす悔しす、我隆信を討取て、汝ゟ心ヲ安せん、今ゟ後と仙岩を親と賴メとて、簾中にかしつき入、嫡孫某ゟ婦人とす成りゟる、是より有馬と甚タ野心を含て、蜜(密)ニ薩州ヲ賴ミゟる、島津も是を幸と頓て許容しタリ、有馬一族ニ深江の城主深江伯耆守、其子下野守、此事を度々諫言す、仙岩承引なし、是故一族を離す、隆信ニ通す、仙岩怒りて、天正十年十月ゟ薩州勢ヲ招キ寄、深江の城を責圍ム、城の守衞堅上ニ、安德、嶋原の將曾(曹)等一ハ成相戰ふ、日數經ル內ニ、翌十一年四月ニ成ル、安德入道宗家心替りして、嶋津勢と一味し、深江と佐賀の通路を斷、

○下略

〔三州軍鑑〕○日向　一肥後(前)高向之(來下同ジ)城主有馬修理太夫ハ、柏原之天皇の後胤平親王將門ゟ末として、高家也、中頃より屋形の號を蒙るといへとす、無

天正十一年五月六日

千々石城
土黒城



力之依身躰たるに、自立もること不叶、近年ハ肥前の龍造寺隆信ニ、本之儘勢いたらむ、有馬是を遺恨におもひ、嶋津之幕下に屬して本意を達んと欲に、依之太守許諾有之同心に、右筑後之國田尻の城主も、龍造寺を背く薩州の幕下と成り、天正十年より、嶋津、龍造寺鉾楯ニ及ひ、合戰企に、同年冬、山城守隆信田尻表へ出陣に、此旨を聞く、薩刕より加勢を差向、此勢高向之嶋へ押渡り、地興輪(千々石)之城を攻落に、然共龍造寺陣を不退故ニ、高向より又人數を出し、同國ひしゝ(土黒)の城を責落に、彼城隆信の味方なるゆへ也、され共重臺を限く、皆肥前の方人をるゆへ、早速功難成、薩兵是より歸り、又同十一年夏之頃、有馬番勢を請れニ依く、新納武藏守ゟ嫡子刑部太輔幷川上左京亮等を始として、宗徒のものとも有馬方へ加勢として指向ふ、同國安德の城主も嶋津に屬に、同國深江嶋原抔いふ侍とも、未肥前之味方にして、薩州へ不順、嶋津勢安德ニ在番をかに、○下略

七日、戊子、神祇大副吉田兼和ヲ遣シテ、羽柴秀吉ニ戰勝ヲ賀セシメ給フ、是日、兼和、近江長濱城ニ秀吉ヲ見テ、叡旨ヲ傳達ス、

〔兼見卿記〕五　五月二日、癸未、自勸(勸修寺晴豐)亞相申來云、御用之間、早々可罷出之旨



兼和召ニヨリ參内ス
誠仁親王御所ニ伺候ス
御太刀
誠仁親王ヨリハ薰衣香

使者云、畏之由申入了、後刻罷出、以外雨降、向勸亞相、彼卿云、越州筑前守へ爲御使可罷下之仰也、各(中カ)院仰出、故障也、乍造作申御請可然之由被申了、去月廿三日頃内々仰也、去月中當社御祭神事之間、非自由之由申入候處、于今誰こも不被下、重而被仰出之間、難及其儀之間、畏之旨申、則祗候了、參大侍典(典侍カ)御局、御見參、賜御盃、罷下義御懇こ仰也、退出之砌、銀子一枚被下之、忝候旨申入了、自上者御太刀也、明日可被渡下之旨、勸亞相云、參御方御所、薰衣香五十袋、被遣之、明日同前可被相渡之由也、大御乳人御見參、賜御盃、自若御局御扇、匂香三具、勘作、給之、今度下向造作辛勞之由、御懇こ以勸亞相承了、忝之由申入退出、自二條殿御使、越州へ罷下之旨被聞食也、可有御音信之間、可相添御使之由被仰下了、畏之由申入了、參德大寺、向清少納言、及晚皈家、今晚於侍從(兼治)相伴夕食、御方女房御汁菜興行之也、

三日、甲申、雨降、五月雨之雲氣也、明後日晝立之覺悟也、天氣如此、迷惑也、供之者各難儀了、耕作最中一段迷惑了、○中略、佐久間盛政捕ヘラル、コトニカヽル、本月十二日ノ條ニ收ム、勸亞相へ御太刀以下爲請取修理進遣了、各請取罷歸也、御太刀赤銅作也、サヤナシ地、備前物歟、ナカコ不見之、自御方(誠仁親王)御所薰衣香五十袋、惟住五郎(長秀)左衞門ニ自禁

惟住長秀ニモ物ヲ賜フ

裏薫衣香五十袋、自勸亞相相添使者爲見舞而來了、賀茂祈念結願、

四日、乙酉、自午刻天晴、明日之下向天氣晴仕合也、祝著了、御太刀路次之用意

兼和京都ヲ發ス

裏之、○下略

守山ニ宿ス

□(五日)、丙戌、天晴、○中略午刻筑州へ爲勅使發足、越州へ下向之覺悟也、今日至森山而一宿訖、申刻下著、供之者十六人也、傳聞、筑州北郡長濱へ歸城之由申了、

長濱ニ著ス

□(六日)、丁亥、早々發足森山之旅宿了、未下刻至佐和山麓、路次飯陣之衆相尋之、筑州長濱ニ逗留之由申了、○中略、柴田襠六及ビ佐久間盛政捕ヘラレテ、京都ニ護送セラルヽコトニカヽル、本月十二日ノ條ニ收ム、申之下刻長濱へ下著、筑州在城也、尤仕合祝著々々、旅宿悉指合、無途方、森村丹波衆也於當町面會、宿之事各定而可指合、先森村宿所へ可來之由申之間罷向、暫休息、龍庵、德雲へ遣喜介、卽喜介罷歸云、宿之事自龍庵申付也、則罷向、盛方院罷下、才兵衛自越州只今令歸陣、宿以下萬端馳走了、次今日御使之旨可罷出歟、龍庵、德雲へ相尋之、數刻以後使者歸云、今夕所用之間、明日可有對面之由筑州被申云々、相意得之由、休息了、

龍庵德雲軒

□(七日)、戊子、早天、德雲、龍庵へ遣使者、可爲何時哉、使者歸云、漸罷出可然之由申



陣中故異態

之間、則令用意罷向、予異躰也、陣中之間此分可然之由、自京都覺悟了、城中之殿廣間ニ在之、御太刀、御方御所遣之物共置上座、數刻相待了、烏丸黃門(光宣)下向也、同座相談了、自二條殿御使、令路次同道、唯今罷出了、午刻筑州對面、予御使之旨申渡、御太刀遣之、次自御方御所薰衣香五十袋、遣之、各畏而被頂戴了、次奧之間へ請予、今度北表合戰之樣、其外越州加州濃州悉申付條々雜談也、次有一盞之義、烏丸次之座敷也、盃、予初之、次筑州、次予、次又筑州、次烏丸、次又筑州、次濃州衆、次德雲軒呑之、取立盃也、次予令暇乞、起座之處、達而抑留也、不及是非令逗留、筑州入奧之間、次有夕食之儀、采(菜)三、二ニ烏丸、予、盛方院相伴、烏、予足付、盛平折座也、食已後以德雲申禮、起座歸旅宿、則發足了、今度仕合無類也、殊更筑州機嫌尤安堵了、二條殿、九條殿、鷹司殿、勸修寺音信書狀之返事各在之、今夜エチ(愛知)川ニ一宿、自長濱八里程在之歟、

戰況竝ニ北國及ビ美濃ノコトヲ雜談ス

秀吉ト對面ス

長濱ヲ發ス

仕合無類

愛知川ニ宿ス

歸京

八日、己丑、早々エチ川ヲ發足了、於森山最前之旅宿暫休息、午刻也、申刻歸宅、路次歸陣之衆皷騷了、

參內復奏ス

二條殿人夫之遲々在之而、所々滯留了、無別義召連罷上了、

□(九日)、庚寅、齋了、參內、筑州御返事樣御兩所へ申入了、筑州雜談之條、可被聞食

誠仁親王王女御事アリ
舟橋枝賢近衛邸ニ孟子ヲ講ズ

十七日安土ニ入ルトノ説

秀吉安土ニ信雄ヲ拜ストノ



旨被仰出而、伊與殿御局被出、具申入了、次大御乳人へ參、以勸亞相御方御所へ申入、御あちや〳〵れ御局へ今度樣躰申入也、令退出承了、一昨日姫君御事也、唯今且以不存故、不尋申、迷惑了、○誠仁親王王女御生誕ノコト、二月七日ノ條ニ見ユ、次清（舟橋枝賢）三品於近衛殿孟子講、此間祗候之由被申了、向清少納言、今度仕合相談了、○下略、今宮祭ノコトニカヽル、本月九日ノ條ニ收ム、

羽柴秀吉、近江長濱ヲ發シテ、安土ニ入ル、

〔毛利家文書〕三

一、○中略、秀吉、金澤ニ抵ルコトニカヽル、四月二十五日ノ條ニ收ム、去七日ニ安土まて打入申候事、○五月十五日附、小早川隆景宛、秀吉書狀、全文ハ本月十五日ノ條ニ收ム、

〔秀吉事記〕柴田退治

五月十七日、至ニ安土一者也、○上下略、加能越ノ諸將降ルコト及ビ佐久間盛政等捕ヘラルヽコトニカヽル、四月二十五日及ビ本月十二日ノ條ニ收ム、

○秀吉、長濱ニ歸ルコト、本月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔別本豐臣秀吉譜〕上　一秀吉追討柴田、威風普天下、至安土信雄卿成拜趨禮、



信雄大悅、秀吉奉仰主君之旨、君臣禮尤嚴重也、○上下略

羽柴秀吉、美濃今尾城主高木貞久ノ子貞利ニ書ヲ與ヘテ、鶴ヲ贈レルヲ謝シ、北國ノ平定ヲ報ズ、

〔高木文書〕○美濃

御狀并生鶴一贈賜候、此比者稀成儀候處ニ、御志別而祝著之至候、隨而北國表之儀、屬平均、一昨日至長濱打入候、○秀吉、長濱ニ入ルコト、本月五日ノ條ニ見ユ、猶期來信候、恐々謹言、

五月七日　羽筑

高木權（貞利）右衛門尉殿御返報　秀吉（花押）

○秀吉、貞利ニ賤嶽ノ戰勝ヲ報ズルコト、四月二十一日ノ條ニ見ユ、

羽柴秀吉ノ將黑田孝高、書ヲ安國寺惠瓊（瑤甫）ニ遺リテ、北國ノ平定ヲ告ゲ、毛利輝元ヲシテ、其兵ヲ伊豫來嶋ヨリ撤退セシメンコトヲ促ス、

〔小早川家文書〕一第十六號增田右衛門外九名ヨリ隆景公外五名ヘ與ル手柬

尙々、來嶋之儀、急度御人數被甘候て、御理尤候、其段於御油斷者可相破

秀吉ト和セント欲セバ速ニ來島ノ兵ヲ撤退スベシ
油斷セバ軍船ヲ差向クベシ

天正十一年五月七日

候、

態申入候、北國無殘相濟申候、其段具從御兩所可被仰下候、隨而御無事之儀、是非御理於可被仰者、來嶋表之御人數、片時も急可被成引御取候、右旨於御油斷ハ、警固急度可差下之旨被申候間、御分別不可過候、御兩(元春、隆景)役樣へ被仰上、御返事待申候、御使者も被成御上、可然存候、貴僧樣者御上之事、先御無用ニて候、恐惶謹言、

五月七日　孝高(花押)

(切封ウハ書)「ハ〳〵」　黑官兵

安國寺樣　孝高

人々御中

○來島城主村上通昌、輝元ニ叛キテ、信長ニ降リ、能島城主村上武吉等ニ攻メラレテ、京都ニ走ルコト、十年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

惟住長秀、其臣松原五郎兵衞、上坂大炊助等ニ、領知ヲ宛行フ、

〔丹羽家譜傳〕六　松原五郎兵衞ハ之知行目錄

領知方



用木幷ニ海川ヲ除ク

支配

領主

五千石　向駿河守分

右爲支配宛行(之脫カ)條、遂糺明、全可令知行、用木幷海川相除之、用木無之山爲領主可申付者也、仍如件、

天正十一年五月七日　五郎左衞門長秀(尉脫カ)

松原五郎兵衞殿

〔溫故古文抄〕○加能越古文叢三十九所收

領知方

七百石　本知分

右爲支配宛行候(之カ)條、遂糺明、如當知行全可有領知、但用木在之山幷浦川可除之、用木無之山者、爲領主可申付者也、如件、

天正拾一年五月七日　五郎左衞門尉

上坂大炊助殿　長秀(花押)

〔中川文書〕○近江

領知方

天正十一年五月七日

給人　石崎源丞　順慶郡山城ニ天主ヲ築ク
松村家政

土橋孫六郎分内

貳百石

右爲支配宛行之條、遂糺明、如先給人全可有知行、但用木有之山幷浦川可除之、用木無之山者、爲領主可申付者也、仍如件、

天正拾一年五月七日　五郎左衞門尉　長秀(花押)

石崎源丞殿

〔松村家由緒〕第五十六世家政　天正十一年、丹羽五郎左衞門長秀公ヨリ地所拜領ス、是ヨリ先、筒井順慶、近江ニ出陣シ、既ニシテ大和ニ歸ル、是日、又伊賀ニ出陣ス、

〔多聞院日記〕三十　四月廿二日、
○大和

一筒井ニハ、今日ヨリ天主俄ニ被上云々、世上大事ト存歟、

廿四日、

一宇多ハ澤、秋山同心ニテ、東門院勢州ヘ入用意參宮了、道物忩、各々機遣之由尤々、

廿五日、筒井今日江州ヘ出陣了、番匠善四郎ハ郡山ヘ下、平二郎一人來、



廿七日、○略　中江州筒井與力衆國衆昨夕歸、又伊賀惣人數今日立云々、畑ノ城ヘ牢人出間合力歟云々、番匠二人來了、

五月六日、筒順今日歸國云々、仕合不勝由沙汰也、○下略

七日、番匠善四郎來、西ノツイ地ノヤ子申付之、今朝順慶伊賀ヘ早旦ヨリ出陳云々、

○順慶、近江ニ出陣シ、大和ニ歸ルコト、四月九日ノ條ニ、伊賀ヨリ大和ニ歸ルコト、本月二十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔祖父物語一名朝日物語〕筒井順慶ト柴田ト内通事、順慶ハ其頃大和伊賀兩國ヲ領シ、大名ナリ、殘多キ事也、

信濃松本城主小笠原貞慶、横内傳次ノ軍役ヲ定ム、

〔横内文書〕○信濃

去年自以來能々奉公相勤ニ付、軍役之鐵鉋(ママ)五挺可被召連候、猶可被抽忠節者也、仍而如件、

天正十一癸未年

天正十一年五月七日

惣人數ハ四月二十七日伊賀ニ向フ

順慶勝家ニ内通ス

鐵炮

五月七日（朱印）（小笠原貞慶）　溝口美作守奉之

横内傳次との

上杉景勝、越後新發田城主新發田重家ヲ攻メントシテ、先ヅ重家ノ屬城新潟ヲ圍ム、是日、新潟ニ著陣ス、

〔築地文書〕○羽前

景勝信州口仕置成就スト稱ス

其以來不申屆候、上口信州表仕置令成就之條、下郡出馬議定、來朔日爲吉日之間、當府打立候、令得其意、彌可勵粉骨事肝要候、謹言、

卯月廿五日　景勝（花押）

築地資豐

築地修理（資豐）亮殿

五十公野ニ向ハントストイフ

先達如申屆、朔日府内打立、七日新潟之地著馬候、當津之仕置急速成就、至于五十公野表可押著之條、其内彌堅固之備專一候、巨細外山可申候、謹言、

五月十二日　景勝（花押）

築地修理亮殿

○景勝、蓼沼藤七等ノ新潟ニ於ケル戰功ヲ褒スルコト、四月十九日ノ條ニ見ユ、

八日、己丑、羽柴秀吉ノ臣木下祐久、助休、小早川隆景ニ書ヲ遺リテ、北國ノ平定ヲ告ゲ、高松媾和ノ實行ヲ促ス、

〔小早川家文書〕二　小早川家御什書寫九

木下助左衞門入道　助休

小早川左衞門佐殿（隆景）御報

輝元高松媾和ノ條件ヲ實行セズ

去春之御返事、御兩所御歸國之節可申入候、重而御使被差上候、委細長秀（羽柴カ）御返事申入候、拙子ゟさへも御懇之趣、本望之至候、仍北國面悉以此方任存分候、於時宜者、可被安貴意候、御方与御間之事、寂前之模樣聊可相易候哉、被加御分別、何樣こも御入眼簡要存候、於長秀不可存疎意候、隨而銀子廿兩拜領、過分候、毎々御芳情難謝候、尚自御兩所可被仰達候條、令省略候、恐惶謹言、

五月八日　助休判

小早川左衞門佐殿御報

○秀吉、輝元ト和スルコト、十年六月四日ノ條ニ、秀吉、隆景ニ復書シテ、

北國平定ヲ報ズルコト、本年四月二十六日ノ條ニ見ユ、

高野山ノ僧快春、長宗我部元親ノ弟香宗我部親泰ニ答ヘテ、畿内ノ形勢ヲ報ズ、

〔香宗我部家傳證文〕四

去月廿一日之御札、今日披閲本望候、仍此度以御手柄、卽木津城被押落候由、無比類儀候、以故悉貴國平均由候、隨而到淡洲（州）御入軍之由、旁珍重、令存候、將亦越州表之儀、依不慮之働、柴田方敗軍候、於手前玄蕃舍弟保田久六郎、其弟三左衞門、當國保田左助討死候、勝家者越前へ被打入、城中ニ而被切腹候、玄蕃茂賀州迄罷退、城内ニ而相果候、其外付々衆悉果申候、三七殿勢州長嶋へ被退候共、又岐阜ニ而御生害共兩說候、猶珍敷事候者、重而可申越候、雖然天下之躰、未相定候、畿内之儀茂不靜候之間、一旦羽筑得利候共、其運又程有間敷候存候、然上者彌南方一味候、以御覺悟御調略乍恐可爲簡要候、恐々謹言、

五月八日　　快春（黒印）

香宗我部左近大夫（親泰）殿　御宿所

○高野山ノ僧勢雄、親泰ニ勝家ノ江北出兵ヲ報ズルコト、三月十一日ノ條ニ見ユ、

木津落城元親ノ兵淡路ニ入ル

勝家敗死ス

天下未ダ定ラズ



信濃木曾城主木曾義昌、三村勝親ノ同國箕輪ニ於ケル功ヲ賞シ、領地ヲ與ヘンコトヲ約ス、

〔三村文書〕○信濃（木曾義昌）朱印

於箕輪（伊奈郡）表、走廻之由候之條、鄉村穿鑿之上、□○三村系圖所收文書ニハ、壹トアリ、騎前可被下置旨、被仰出者也、仍如件、

天正拾一年
五月八日

三村纖部（勝親）佐殿

千村次郎右衞門尉奉之

壹騎前

三十人扶持

散分之内定納□□□□□○三村系圖所收文書ニハ、米三十人トアリ、扶持了、猶兩郡本意之上、可加恩者也、仍如件、

天正十一癸未
五月八日

（木曾義昌）朱印

七月廿三日

三村織部丞殿

九日、庚寅今宮祭、

〔兼見卿記〕五　五月□(九日)□、庚寅、○中略、兼和、長濱ニ使シテ、復命スル、コトニカ、ル、本月七日ノ條ニ收ム、今日今宮祭也、小川之東成氏子祭禮企、興二千餘(マヽ)罷出、近代之奇麗之由申訖、令歸宅承、不見物也、

徳川家康、甲斐ヨリ遠江濱松ニ歸ル、

〔家忠日記〕三　五月十二日、癸巳、雨降、家康甲州より一昨日九日ニ濱松へ御歸之由候、

○家康、甲斐ニ入リ、國制ヲ定ムルコト、三月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔武德編年集成〕五月上旬、神君甲州尊體寺ノ旅館ニメ、井伊兵部直政カ輔翼、元ハ馬場美濃氏勝カ屬士、廣瀨美濃昌房、三科肥前形幸ヲ召テ、信玄、謙信信州川中島軍ノ體ヲ圖ニ成サシメ御覽アリ、

小幡景憲カ說ニ、神君ノ曰、信玄弓箭五ケ條ノ祕奥アル由、第一問働、第二

家康廣瀨昌房三科形幸ヲ召シテ川中島合戰ノ狀況ヲ聞ク



信玄ノ弓箭五ケ條

小笠原貞慶北條氏政ニ屬スルノ說

井戸覺弘

島清興

立競ハ味方大斥候ニテ報ス、第三敵國ヘ深働メ日數ヲ歷ヘキ時、五間ニ一堆、第四天地人三ツノ備、第五剛敵ニ遭フ時、大正大奇ノ格、是ヲ川中島ニテ信玄用ユルト見ヘタリ、至極ノ理ニメ、庸將ハ通曉スヘカラサル旨命アリ、廣瀨、三科カ曰、川中島在陣ニハ、謙信モ五間ニ一堆ヲ用ユルト云々、又仰ニ曰、敵モ亦味方ノ如クンハ、大正大奇ニ非スシテハ、奈何ソ勝事ヲ得ンヤト宣フ、誠ニ兵道明察ノ御批判ノ由、兩人是ヲ歎美スト云々、或曰、甲州御在留中、去年北條ニ屬シ、忽神君ニ降ル眞田安房守、保科越前守、且神君ニ屬メ又北條方ト成リ、再ヒ麾下ニ歸服スル小笠原喜三郎貞慶、諏訪安藝守賴忠等、群參メ拜謁ス、

附考メ曰、貞慶去年謀叛メ此時歸服ス、或ハ叛キ或ハ服スルノ說、十三年ノ件ニアリ、

十日、辛卯伊賀ノ兵、筒井順慶ノ營ヲ襲フ、死傷頗ル多シ、

〔多聞院日記〕三十大和　五月十日、○

一今曉於伊賀、筒井陣ヘ夜討アリ、散々ニ手負數多、井戸重郎(帶刀)、豐田、白土、楊本、岸田、菅田、嶋左近(清興)、松藏彌八郎、同彌二郎、中村九郎三郎以下悉手負了、內衆

討死手負數不知、道具悉取散了、乍去本陳無殊儀、故不崩踏留了、一圓油斷故云々、大事之疵衆多候、スカタハ既死歟云々、萩、別所モ死歟、但不苦トモ云々、

廿五日、

一椿尾ハ先日蒙疵、昨夜死了云々、誠歟、今夕葬送云々、十九才、不便々々、

○順慶、近江ヨリ歸リ伊賀ニ赴クコト、本月七日ノ條ニ、マタ勝家、伊賀衆ヲシテ、兵ヲ起サシムルコト、三月三日ノ條ニ見ユ、

十一日、壬辰、羽柴秀吉、近江坂本城ニ入リ、軍ヲ休ム、

〔伊豫國新宮田邊氏藏古文書〕○土佐國編年記事略七所載

書中令披見候、北國之儀悉任存分、隙明申候、一昨日江州坂本城マデ打入候、

○下略、五月十三日附、仙石秀久宛、秀吉書狀、全文ハ本月十三日ノ條ニ收ム、

〔兼見卿記〕五　五月十二日、癸巳、雨降、筑州至坂本在城云々、盛方院（吉田淨勝）自坂本上洛之次來云、明後日邊上洛之沙汰云々、○下略

〔秀吉事記〕柴田退治

秀吉ハ者爲休息（サセンガヲ）諸士移（リ）江州坂本城ニ暫（ク）相停（ル）、○上下略、信孝自殺スルコト及ビ柳瀨役論功行賞ノコトニカヽル、

五月三日坂本ニ入ルトノ說

本月二日及ビ六月五日ノ條ニ收ム、

〔太閤記〕六　賀州表御出勢之事

五月三日にハ、江州坂本之城ヱ御歸陣有、

評曰、美濃國大柿之城を、卯月廿日ヱ打さち給ひ、至今月朔日、十一日之日數ふして、如此大なるさう行し事、和漢ヱ稀ならんう、○上下略、秀吉、惟住長秀ニ地ヲ與フルコトニカヽル、四月二十七日ノ條ニ收ム、

柴田權六佐久間玄蕃允事

秀吉卿より諸侯大夫其外馬廻小姓中へ、端午之祝儀として、美酒佳肴夥しく下し給ふ、坂本に十餘日御滯留有しう、○下略、盛政等斬ラルヽコトニカヽル、本月十二日ノ條ニ收ム、

○秀吉、安土ニ入ルコト、本月七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔新撰豐臣實錄〕十　勝家自殺信孝衰滅、付誅佐久間盛政、柴田權六幷瀧川一益服從部

五月三日、秀吉至江州安土、見三法（秀信）師、而班軍于同國坂本壘、同五日、秀吉祝端午、遍施酒肴於群士、以慰今般之勞劬、○上下略、信孝、自殺スルコト及ビ盛政等斬ラルヽコトニカヽル、本月二日及

ビ十二日ノ條ニ收ム、

〔柏崎物語〕中　一五月七日、秀吉安土へ歸る、夫より江州坂本へ歸る、諸大名勝家滅亡れ祝儀を申、自然と棟梁ゐかる、

前田利家、能登末森城ヲ修メ、其臣奥村永福ヲシテ之ヲ守ラシム、是日、永福、入城ス、

〔可兒才藏誓文日記袖書〕

一九日(五月)、奥村助右衛門(永福)へ祝儀有之、助十郎へ使遣、

一同十日、雨降、助右衛門宅ニ居ル、

一十一日、末森へ飛脚遣、

一同日、末森へ奥村入城、祝儀有、

〔可兒才藏誓文日記〕一某シ昔日賀州之太守公ニ御奉公相勤候刻、能州末森陣天正十二年ニテ有之、同十一年五月十一日ニ、加州太守公前田又左衛門利家公、以奥村助右衛門尉ヲ能州末森之城主ニ被任を、奥村嫡子助十郎、二男又十郎父子三人同道ニテ令入部、

〔太閤記〕四　前田又左衛門尉利家末森之城後攻之事

可兒才藏

秀吉利家ヲシテ加賀ノコトニ任ゼシム

利家諸城ヲ受取リテ秀吉ニ報ズ

末森ヲトシテ加賀能登兩國ノ連絡ニ備フ

羽柴筑前守秀吉卿、江州志津嶽之合戰ゟ得勝利、北庄へ推寄、城を攻ぬる勢ハ誰彼と仰付られ、賀州へハ前田又左衛門尉を賴入條、被相越よきゟ計ひ給候へと有しあハ、早速打越、城を請取、其旨秀吉卿へ注進有し處ゟ、速成之功悅ひ給ひ、卽賀州之内石河河北兩郡可進退との事ゟ付て、金澤ゟ在城も、信長公ゟて同しさはなる傍輩なりしゟ因て、如此の挨拶ゟ及へり、かくて能登、加賀之間、はなれの城なくてハ叶ふまあらに、何もの所ゟ宜しあるへきと評議しをはゟ、唯末森之城兩國之堺目なれハ、是ゟ增さる所侍らしと、各一決してそ申をる、利家も内々斯思ひ寄し事なれハ、啐啄ゟ同し、此城ゟハ武之備も有て信厚く、萬之裁判も兼備をさる者ゟあらすハ、おほつあなし、奥村助右衛門尉を城主ゟ定め宜しかりなんと思ひしゟ共、家老之者共ゟ評議なくてはあれハしと、各を呼あけ、件之旨申出され、誰ゟ宜しからんと尋られしゟ、十ゟ七八助右衛門尉を指ゟ々れ、利家心よけゟ打笑、吾も内々奥村をおもひ寄しとて、卽助右衛門を末森之城主と定らをしなり、允ゟ先祖乃面をおこし、武運ゟかなひさる奥村あなと、人皆申あへりき、かくて吉日を撰ひ、助右衛門、同嫡子助十郎、二男又十郎一族繁榮之粧を刷ひ、天

永福五月七日入部ストノ説

末森城普請

秀吉奥村永福ヲシテ末森ヲ守ラシム

正十一年五月七日、入部之規式いと勇々敷そ見えさりをる、與力之面々家來之者共、宜しきよ隨て、屋敷を相渡し、有付の用意を沙汰し置、助右衞門尉い金澤へ參り一禮申上、扨普請等一々繪圖を以、利家之内意を請、令歸城、其翌日をわ晝夜のけあひもなく普請等申付、或櫓々、或所々之門々、けまりけまりの塀柵、心之不行所もなし、親しき朋友之人々見廻とし來り諫けるい、何方よも未敵の色も見えぬよ、普請作事等れ急なる事以外也、少ゆるあせよをあれかしと申けをい、奥村聞て、是い各よ似もつあける御異見よ候、歷々人もこそ多きに、若輩之某を撰ひ出し給ひしい、自然不意よ起る敵を防申せとの爲よも有へし、此城の有さはよてい、其用よあなひ可申や、皆々供よ具せられ候者共よ、普請の合力を給へとて、見廻の面々五六日つゝとめ置、万れ手賦理よりなひしりは、年月をも不經成就してけり、〇下略、佐々成政、末森城ヲ圍ムコトニカヽル、十二年九月十一日ノ條ニ收ム、前田家譜異事ナシ、

〔寛永諸家系圖傳〕百三十四　前田利家をしゑを前田又左衞門尉と號ほ、生國尾張、　秀吉治世のを

しゑ、利家れ家人奥村伊豫守をして、能州末森ま城ゑ守らしむ、〇下略、成政、末森城ヲ圍ムコトニカヽル、十二年九月十一日ノ條ニ收ム、ナホ寛政重修諸家譜コノ事ヲ載セズ、

土肥伊豫

夫丸

臺所入

〇秀吉、加賀石川、河北二郡ヲ利家ニ與フルコト、四月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔越登賀三州志〕三十三　故墟考五　能登羽咋郡　末森押水北ノ庄吉田村領ニアリ、末森トハ城地ノ名也、〇中略

十一年、(天正)但(土肥)馬柳ケ瀨ニ於テ戰死ニヨリ、國祖(利家)、但馬ノ弟一爲甥、伊豫ヲ在城セシメ、要害ヲ修補アリテ、本丸ニ奥村助右衞門、二丸ニ千秋主殿助、瀧澤金右衞門、三丸ニ土肥伊豫ヲ置、〇下略

〔附錄〕

〔加能越古文叢〕三十九

夫丸之事

拾人　あな水臺所入分、

右從七尾(鹿島郡)府中へ米を下候條、來廿八日ニ可著城者也、

天正拾壹年

六月廿五日　○(利家)

右北徵遺文載之、原書能登國鳳至郡穴水川嶋村七郎兵衞所藏、

天正十一年五月十一日

## 〔能登古文書〕

七尾城修築

已上

急度申遣候、當(七尾カ)城之用、へいはしら並なかきらせ、其地之以舟早々可越候、急用候間、於延引者、可爲曲事者也、

六月二十七日　　利家 印

穴水百姓中

## 〔加能越古文叢〕三十九

尚々、いそきの事候、不可有由斷者也、

急令申遣候、仍而飯田(珠洲郡)、正院(同)、上戸(同)、直郷、此四ヶ村ゟ堂をこほち取候、廻舟之儀申付、彼地ゟ府中(鹿島郡)まて可相屆候也、

天正十一　　利家 印

七月八日

穴水南北(鳳至郡)　百姓中

## 〔能登古文書〕

以上

穴水城普請之用に、竹貳百束、板六拾間五足、有次第、屋竝鍬爲持、早々彼地へ可越候、於延引者、可爲曲事候也、

八月廿九日〇本書年次未ダ詳ナラズ、　　利家 印

諸橋(鳳至郡)六郷百姓中

## 〔加能越古文叢〕三十九

はゐり船之儀、繩打公用之高次第可申付者也、

天正拾壹年　　利家 印

十一月十四日

穴水百姓中

右北徵遺文載之、原書能登國鳳至郡穴水川嶋村七郎兵衛所藏、

## 〔金峰寺文書〕

のぼりさほ三十本きらせ、七尾まで取り候也、

天正十一十二月五日　　利家 印

三輪藤兵衛殿

天正十一年五月十一日

はゐり船繩打

轙竿

盛政ヲ車ニ載セテ洛中ヲ渡サシム

權六ハ佐和山邊ニテ生害

盛政ノ首ヲ京都ニ送ル

盛政專ラ武邊ヲ執行フ

十二日、癸巳、柴田勝家ノ子權六及ビ將佐久間盛政捕ヘラル、羽柴秀吉、其臣淺野長吉ニ命ジテ、權六ヲ近江佐和山ニ斬ラシメ、是日、又盛政ヲ山城槇島ニ斬ラシム、尋デ、二人ノ首ヲ京都六條河原ニ梟セシム、

〔西村小六氏所藏文書〕

佐久間玄蕃(盛政)搦取之條、載車洛中可被渡旨申付候、○上下略、卯月廿八日附、國司右京亮宛、秀吉書狀、全文ハ四月二十六日ノ條ニ收ム、

〔兼見卿記〕五　五月三日、甲申、佐久間玄蕃於越州而令生捕云々、追々其沙汰治定之由申了、○上下略、兼和、勅使ト爲リテ、秀吉ヲ訪ハントスルコトニカヽル、本月七日ノ條ニ收ム、

□□(六日)、丁亥、於路次而云、柴田息、十四才、佐久間玄蕃今度生捕、今日上洛云々、予上海道下向也、右之者下海道通之云々、柴田息於佐和山邊生害云々、○上下略、兼和、森山ヲ發シ、長濱ニ到ルコトニカヽル、本月七日ノ條ニ收ム、

十四日、乙未、天晴、傳聞、佐久間玄蕃致生害、首京都へ上云々、○下略

〔當代記〕二　玄蕃ハ專執行武邊、此度成生虜、自秀吉渡洛中、刎首被掛獄門、○上下略

〔秀吉事記〕柴田退治

權六盛政府中ノ山林ニテ捕ハル

盛政ヲ六條河原ニ斬ルトノ說

盛政ト權六ヲ梟ス

盛政下民ノ爲ニ捕ヘラル

宇治川ノ邊ニテ斬ル

權六ト盛政トヲ六條河原ニ斬ルトノ說

長吉盛政ヲ嘲ル

又勝家嫡男柴田權六、佐久間玄蕃助者、最前驅越前府中山林生捕來、爲後證、引廻隣國方々城、權六於江州掉山(棹)誅之、玄蕃助今度矛楯張本人罪多故、車渡洛中於六條河原誅之、柴田權六首同懸獄門者也、○上下略、秀吉、安土ニ入ルコト及ビ信孝自刃スルコトニカヽル、本月七日及ビ同二日ノ條ニ收ム、

〔豐鑑〕二　袖露

佐久間玄蕃ハ軍破てより、如何にもして我しるところ加賀れ尾山の城に歸おんと思ひ、山中ヨ懸りて忍行ヨ、山賤ともあやしめ、搦て秀吉ヨ奉る、柴田息權六をうらめ來りぬ、ともに都ヨ遣し、宇治川の邊ヨて頭を切りけり、○上下略、勝家自殺スルコト及ビ勝豐、勝家ヲ去リテ、秀吉ニ屬スルコトニカヽル、四月二十四日及ビ十年十二月二十日ノ條ニ收ム、

〔太閤記〕六　柴田權六佐久間玄蕃允事

○上略、秀吉、坂本城ニ入リ、滯留スルコトニカヽル、本月十一日ノ條ニ收ム、權六郎、玄番事(蕃下同ジ)洛中を渡し、六條河原にて生害有へ歩旨、淺野彌兵衛尉ヨ被仰出ヨ依り、其沙汰ヨ及ひぬ、權六ハ不及是非躰骨髓に徹し見えてけり、玄番允ゟ曰、中川を討捕し後、勝家任下知、早速本陣へ引取おれ、何そ及此期乎、戰功を全して、上方勢を侮もんハ、秀吉を我ことくせん物を、果報いとし歩筑前なるゟ事と云しゟハ、淺野打聞

盛政モ亦長吉ヲ罵ル

盛政ハ大剛ノ士

盛政ノ辭世

鬼玄蕃

盛政捕ヘラル

く、散々に惡口しまれハ、玄番ふり仰ぐ、大忍之志ハ、をのれらに云ぐ聞せんもいろゝなれ共、夫頼朝卿ハ、生捕の身と成、池の尼に便ず、赦を請、討平平家、父の讎を報しなり、生く不得封侯、死五鼎に烹はゝ共悔ななん、是大丈夫之志なり、吁不知よなと云、淺野は白眼にし大にしろずしハ、あけしを大剛之者なりと、人皆感しあへずし也、所詮夢なずとく、硯をこひ一首ろくなん、

世中はゑくりもしてぬ小車ハ火宅のうちは出はなりなわ

中々色もうしらせ、首はうけく終りになり、鬼玄番と云をし事も有し物を、

〔川角太閤記〕二ノ下　一左候得し、佐久間玄蕃事、志津ろたなの御合戰より、越前のほはろれおく在郷へ、主從三人にて百姓の家へ立より候つるあ、山路を傳ひ候故、とををふミ、杖にもかり、百姓にもくさをもらひ候て、とれ口に灸を仕候、内の者主にまなひ、あのもの我々召はを候者にて候、殊之外草臥申候間、食をあい可申候、しや〳〵燒候へと頼候處、百姓しら心に、あれとをぬミこはハ主人也、二人の者ハときぬミれ内の者あと見及、食燒をうり可申候、其うち御やもミ候へと申たまし、となり百姓等に云聞せ、棒もくめにして召捕也、百姓推量れとく、とをふミハ佐久間玄

秀吉盛政ヲ槇島ニ置ク

盛政ヲ捕ヘシ百姓ヲ磔ス

蕃也、二人ハ玄蕃内之者なり、召捕同國北之庄に注進する事、

一秀吉御心にハ、無情繩をかなこれよなと思召候へとも、不及是非仕合也、秀吉御心にハ、繩をとを、身をもはゝ〳〵を持せ、乘物に乘せ、道中よをにいたをり、おれより直に上をよ、所ハ宇治の槇嶋におなよと御意候て、道中よきに痛り、槇嶋に置、乍去御番ハ堅被仰付候事、

一其百姓しら被召寄、褒美可被成候、手はたい仕これ百姓しらも、皆々參をとれ御意なり、百姓御褒美を望ミ、我も手つこひ仕候、我も〳〵と申、其召捕たる家に入たる程れ者十二人被召寄候事、

一秀吉御分別にハ、合戰れあちまなハ世間のならひ也、秀吉まけ候者、今日ハ人乃上、明日ハ又我身れ上と思召被出、百姓にハ不似合事を仕出しこは物あな、令見れこめ、褒美にしこ物に御なよを御意にて、其時の十二人しこ物に御なを被成候、是ハ明智討こる百姓にハ不可似、被討手に科の輕重有なれし也、

〔川角太閤記〕三ノ上　一佐久間玄蕃を御教訓の事、蜂須賀彦（正勝）右衞門を槇の島に御使に被立、御意にハ、勝家事ハ右之通なれし、定て無是非と可被思

秀吉大國ヲ以テ盛政ヲ誘フ

盛政辭ス

苦痛ヲ免ルヽヲ愧ヂテ自殺セズ

盛政車ニ乘セテ洛中ヲ渡サレンコトヲ望ム

也、さや跡之儀ハ何事もをくさんしてをてられよ、やかて明國おゝく出來をへき也、大國を一國可宛行者也、此上秀吉を勝家と被思なハ、秀吉滿足たはゐをれと被仰遣候處ニ、案れ外なる玄蕃か返事と聞え申候、御意之通りハ承屆候、合戰のかちまけハ世間れ有ならひ也、勝家合戰利運ニもなれならハ、秀吉を我等か成行姿ニ可成とおき存候ニ、勝家自害の其上ハ、玄蕃浮世ニ留り、たとへ天下を被下候とも、勝家に可思替事存もよらハ候、自害と存候へつるか、待えハし、我ゟ心いかやうなるきうめいニも可相事を悲、玄蕃自害したるよと取沙汰於有之さ、かさまれ上のぬゟくたゐゐきため、自害ハとはりぬる也、死罪れ體いか樣にも可被行者也、さや〳〵と御返事ニ及候事、

一玄蕃ゟ返事之通被申上候へさ、さりとは玄蕃ニ似合されぬ返事かな、心底を不被殘候事神妙さよ、君子に二言なきれハ、重而乃教訓ニ不及、さらハ腹を切をよとて、森勘八を御使ニ被立候、秀吉ハ一言れ訴訟あり、是ニてかうへを被刎候へさ、ひきゟの樣に候、ふゟハくれ車に乘を、繩下之躰上下に見物させ、一條の辻より下京ハ引下させ給ふ程ならハ、可忝もの也、

大紋ノ紅ノ物ノ廣袖

紅梅ノ裏ノ小袖

箔ノ廣袖ノ小袖

繩ヲ掛ケテ車ニ乘ス

それ上秀吉威光も天下へ響渡るニてハなきやれ事、

一秀吉被聞召、さらハ玄蕃遺言ニまかせよと乃御意ニて、京ハ被召寄、車れ次第そさうにをへゟらハ、いさをよくかさりたてよとの御意ニて、玄蕃所ハハ是を被著候へとて、御小袖二重被遣候、玄蕃是を見て、忝存候、乍去紋あら仕さて樣氣ニ入不申候、大もんのゐにれ物のひろ袖、裏ハもみこうさいの小袖可給候、是を著申、車れ上ニ打乘候者、目ニたち、あをこき玄蕃よと可被見ため也、軍陣之時れ大さし物と人目ニかゝる可申者也、右之小袖にてハ軍陣之時の鐵炮之者なとれさし物ニ似さるゐを也と申上候事、

一秀吉聞召被屆、最期まてふゐんれ心忘不置事よな、おし〳〵と御意候て、望のとくなる小袖二ツ、一ツハさくれ小袖、何をも廣袖也、玄蕃宿へ被遣、玄蕃さしはき戴、ゐにの物れをうもんを上ニ著、さて車をさしよする時、態と繩を掛よ、越前つるあれ在鄕ニて、百姓さらに被召捕候時、玄蕃繩掛さる事天下ニ其無隱事なり、繩を不掛して被渡ならハ、繩侘言仕さるかと、見物れ者も不審可立也とて、繩を掛り車ニ乘ほ、一條れ辻より下京ま

夜中槇島ニテ斬ル

盛政ノ墓

て玄蕃遺言にまかせ渡しあるゝ、京中れ上下見物衆いかうくんしゆをなに事かきりなし、さて下京れ町屋に入置、角と申上候事、

一御意には、夜に入又本れ槇島に被遣、御成敗之次第晝ゟ無用也、夜る頭を刎よと被仰出、又森勘八に被仰付、槇島に著しゟは、直に野に敷皮を敷き直し、御腹被召候得とて、脇差を扇にもへ指出し候へと、腹を切るなとゝ申事いよれつねのゐりかゝりの事にてあき候へ、腹を切るき程あらい、何とて今日の車れ上の繩を可掛、此上を後手にまわし、よくいましめらるよと被申候へとも、晝のたかてこれいましめれ繩迄にて、頭を刎事、勘八殿玄蕃死骸に念を入、よくおさめ置、其後石堂をもへ、玄蕃墓印と定被置候事、

一秀吉、玄蕃を槇島に久敷被成御置候事、おしく被思召、心も和られ候いんと被思召ためと聞え申候、自然秀吉直の御かうくん被成候いゝ、可申上との御座候いん、さにてゐ無御座、一通彦右衛門を被遣、君子に二言なしと被思召出、一通と相聞え申候事、

柴田お國

盛政お國ト秀吉ノ麾下ニ捕ヘラルトノ說

盛政ノ一族

中川秀成ノ室

〔賤嶽合戰記〕秀吉公北國入事

佐久間玄番(蕃)い、味方ちり〳〵に敗北すれい、柴田殿子息おくふと申、生年十六に成給ふを同心ふて、越州敦賀を心さし、山中へかゝれ落のひけれあ、うへふ望ミ畑へ入、桑覆盆子を食しゑのひ居れかる、秀吉の御馬廻り衆見付出し、兩人共に生捕、京都へ引渡し、七條にて被誅かる、○上下略、上文勝家自殺スルコトニカヽル、四月二十四日ノ條ニ收ム、

〔志津ケ嶽合戰小須賀九兵衛私記〕○碩田叢史三十七所收　一權六玄蕃と、京中を引渡し、首を獄門に梟ル、

〔寛永諸家系圖傳〕六十四　佐久間

盛次　久六郎、久右衛門、生國尾張愛智郡、

盛政　理助、玄蕃允、生國尾張、

女子　中川修理大夫の妻、内膳正が母、

安政　久六郎、久右衛門尉、從五位下、生國同前、

勝政　柴田三左衛門尉、生國尾張愛智郡、

盛政加賀半國ヲ領シ金澤ニ治ス

盛政ノ法名

新庄直頼ノ養女

母ハ勝家ヘ姉

勝之 佐久間源六郎、大膳正、從五位下、生國同前、

盛政 信長ニ從ヘ、屢戰忠をぬきんで、漸武名をあらはし、賀州半國を領し、金澤城に居住し、天正十一年、外舅柴田勝家を大將として、弟安政ともに江州梁瀨の城を攻せめたとし、中川瀨兵衞尉をころし、翌日、勝家、秀吉と合戰し、利あらずして加州に退く、時に盛政不幸にして生捕にせらる、同年五月十二日、秀吉れさめにころさる、法名善俊、道號英伯、

〔寛政重修諸家譜〕五百三十三 佐久間

盛次 久右衞門、

盛政 理助、玄蕃允、

女子 新庄駿河守直頼ゟ養女、

安政 久六郎、備前守、從五位下、

勝政 三左衞門、柴田修理亮勝家ゟ養子、

勝之 源六郎、大膳亮、

盛政 母ハ勝家ゟ姉、天文二十三年、尾張國愛智郡御器曾に生る、織田右府

盛政ヲ三條河原ニ斬ルトノ說

惟住長秀權六ト盛政トヲ捕フ

秀吉盛政ヲ長吉ニ預ク

に於ゟへ戰功あり、加賀國尾山今の金澤城、乃城主となり、其半國を領し、天正十一年、舅柴田修理亮勝家に屬し、弟安政と共に近江國梁瀨の城を攻落し、中川瀨兵衞清秀を殺し、翌日勝家、豐臣太閤と戰ひ、利あらずして加賀國に退くのとき、生捕となり、五月十二日、三條河原にをいて誅せらる、年三十、法名善俊、室ハ佐久間大學介盛重ゟ女、

〔寛永諸家系圖傳〕百十 丹羽長秀五郎左衞門尉、少名万千代、兒玉の人なり、 秀吉、長秀大軍をひきゐてきれ(北莊)をせめゟおむ、翌日勝家自害し、越州卽時に平均し、長秀、勝家ゟ子權六、ならびに佐久間玄蕃允を虜、これをきてまゐる、○上下略、長秀、盛政ノ軍ト大ニ戰ヒ之ヲ破ルコト及ビ長秀、秀吉ヨリ越前加賀若狹ヲ與ヘラルヽコトニカヽル、四月二十一日及ビ同二十七日ノ條ニ收ム、

〔淺野考譜〕一 淺野彈正少弼之佳言善行聞書清水穗齋老愚誌記

一秀吉、濃州大柿より只一夜中に志津ヶ嶽に押著、佐久間玄蕃と戰、速に打勝て、則玄蕃を生捕、長政公に預ケ置きし時、長政公より湯漬食を與へて饗應有、玄蕃の曰、今日秀吉の軍法ハ天晴出來物成といふ、長政公申さるゝハ、出陣の度々某供せさる事なし、今日迄ハ一度も不出來の事も無之、

太閤記ノ不審

長吉ハ罪人ヲ特ニ憐ム

天正十一年五月十二日

玄蕃又いへく、それハ敵よりもよるへし、此玄蕃汝相手よして、是程の勝ハ仕合ハとこいふ時、扨々ゑらそ口汝いへるハ人やと笑と生しと、太閤記よ書出せしと不審あり、其時を以見るよ、是ハ山口甚兵衛ハ添田甚左衛門ゑ謂あるへし、常を以て考るよ、差當り死よ近つきたる玄蕃に向ひ、ケ様の惡口なと申さるへき生質よはあらに、長政公ハ指當有罪人をは、別て惠と深く撫し憐給ふと云、

## 〔日本耶蘇會年報〕（歐文材料第八號譯文）

一五八二年、八三年及び八四年の日本通信

一五八四年一月二日（天正十一年十一月二十日ニ當ル、）附、長崎發、バードレ・ルイス・フロイスより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

○（上略、勝家、北莊ニ自殺スルコトニカヽル、四月二十四日ノ條ニ收ム、）この事を行ひて後、越前、加賀、能登及び越中の諸國は、すべて羽柴に屈伏せり、羽柴は其有せし最も大にして、且最も強き敵の消滅したるを見、又今は何等の反對なく天下の君となり、多數の國々を治むるに至りしを見て〔不幸に對抗するよりも、幸運に對抗する

秀吉ノ傲慢尊大ハ信長ノ上ニ出ヅ

權六ノ年齡ト才能

權六モ洛中ヲ引カルトノ說

こと難きは人の常なればなり〕次第に傲慢尊大となり初めたるが、諸人の評によれば、この點に於ては、遠く信長の上に出づべしとなり、柴田の總司令官にして又甥なる人は、此間越前の國の土民等の家に身を隱しゐたるが、其一人、褒美を得んとの希望にて、之を裏切るに至れり、柴田の一子も亦捕へられたり、此人は年齡十二歲にして、稀なる才能を有し、信長は己が一女を之に嫁せしめんと定めゐたり、此兩人は都に引かれ、一種の車に乘せて、主要なる市街を引き廻されたり、〔此は當地にて此上もなき不名譽にして、我國に於て、馬の尾に縛して引きずるに當れり、〕斯くて市外に定めたる一所にて、羽柴の命により、各其首を斬られたり、

○盛政、荒山ヲ攻メテ、溫井備前守等ヲ斬ルコト、十年六月二十六日ノ條ニ、中川清秀ヲ大岩山ニ襲ヒ、之ヲ破ルコト、本年四月二十日ノ條ニ、秀吉ノ爲メニ賤嶽ニ破ラルヽコト、同月二十一日ノ條ニ見ユ、

## 〔參考〕

〔花押彙纂〕（サ部）　佐久間盛政

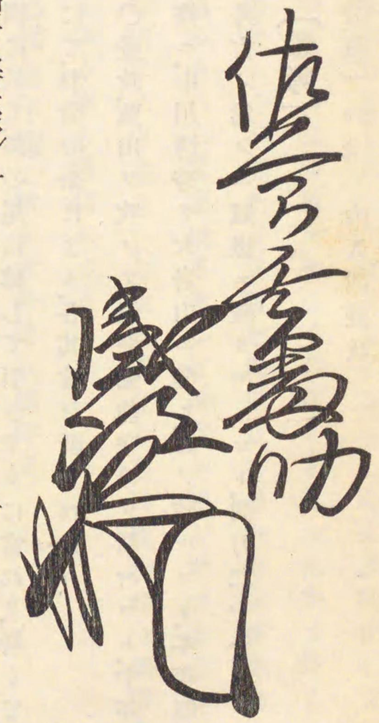
天正十一年五月十二日

淺野忠吉盛政ヲ慰ム

盛政忠吉ノ芳情ニ感謝ス

〔新撰豐臣實錄〕十　勝家自殺信孝衰滅、付誅佐久間盛政、柴田權六幷瀧川一益服從部

淺野彌兵衛長政受秀吉命、暫衛佐久間盛政、彼本以强力勇士囚牢獄、俾其諸士嚴轉番之、時丁淺野右近(忠吉)今按、長政老臣、之番、宥獄進浴與兩刀懇懇曰、人間之榮衰本如車輪、何喜何悲、故余不忍强苦吾子、吾子若有勃起欲再弔勝家之術、則我潛免之、以爲吾子死貳心之罪、是又志士之芳情也、余何怨之、汝速去之、倘又欲不能、則吾子定情於獄而要歇逃走之志、然則余又請長政宥獄、少解其苦、盛政感曰、余未聽子之言之先、實以一破獄報怨爲素志、今聞子之義諫、余甚重其量、



○劍神社文書(越前)
二月十七日附織田寺中宛書狀



權六ヲ佐和山ニ斬ラシム

盛政壯語ス

時人之ヲ稱ス

盛政ヲ六條河原ニ斬ルトノ說

縱令余雖幸有免此難、勝家亡後誰其克從余事豪士之優情豈不感之、自今某捨怒忘恨、忽斷復讐之念吾子莫訝余、於是右近告長政以許囹圄一等之苦擧世无不賞右近之高義、今按、其子淺野甲斐守仕松平安藝守光晟據備後國三原壘、領三万石、秀吉令長政曰、柴田權六可牽曝於近國城下、以斬于江州佐根(和)山、盛政最敵中之首魁、其罪甚重、可使之乘牛車渡洛陽而后斬于六條河原、長政蒙命卽告赴於二虜、以爲成其事、權六始終噤口不出一語、盛政獨大呼曰、討中川清秀之後、應勝家之命而速皈本陣、則今何及此耻、且倘謹勝利不侮南軍則宜使秀吉換今日吾儕之事而已、嗚呼秀吉其幸全草頭之露、風前之燈者耶、長政聞之、大忿罵之盛政仰視微笑曰、雖鷃鶡不知鷹隼之志、汝能聆余言、疇昔賴朝爲清盛所擒之時、據池尼請赦、遂亡平家、報父之讐、此謂知命之童子、宗盛爲源氏爲虜之日、就義經哀死、永汚祖考、傳人之嘲、此謂命之愚將也、人間倘得時命之助、則誰阻古今與貴賤、只怨吾人爲不知熟否、漫費心力、遂陷擭穽死者、人之常也、余豈歎之、彼曰大丈夫生不得封侯則死烹五鼎無悔者、吾儕今日之會意也、汝曷知之、大白眼、人皆無不嘉之、乃乞硯紙書辭世之歌云々、今按、其歌云、世中逡不果小車火宅門出也矣、遂斬權六於佐根山誅盛政於六條河原、梟頸於一處、○上下略、秀吉、安土ニ抵ルコト及ビ一益降ルコトニカヽル、本月七日及ビ六月是月ノ條ニ

盛政加賀ノ一揆ヲ平定ス

盛政享年二十四歳説

信雄盛政ヲ見ル

牧ム、

〔武家事紀〕十三織田家臣續集　佐久間玄蕃允政盛（盛政下同ジ）ハ勝家カ甥也、武勇人ニスクレ、若メ戰功尤多シ、信長加賀國ヲ簗田出羽守（後改戸次右近大夫、）ニ賜ル、簗田敷地ノ天神山ニ在城ス、加州ノ一揆蜂起ニ付テ、簗田天神山ノ在城不叶メ、大聖寺ニ引退、コレニ因テ、勝家乃信長ニ言上シ、政盛ヲ以テ是ニカハラシム、政盛加州ノ一揆悉退治仕リ、ツイニ加賀國ヲ賜テ、小山（或云、在松任城、）ニ在城、（後改金澤、）天正十年六月、前田利家カ乞ニ因テ、能州石動山ニ働、荒山ヲ攻落ス、至ル處ニ戰功ヲアラハシ、多ク賊ヲ屠ル、世ニ鬼玄蕃トヨハル、志津嶽ノ一戰ニ中入ヲイタシ、中川、高山カ要害ヲ一時ニ攻落、中川清秀戰死ス、其時速ニ兵ヲ不入、ツイニ秀吉ノ猛勢ニカケ立ラレテ敗北、政盛クミノ木林ニノカレ入テ、フミヌキヲイタシ、行歩不叶、遂ニ縲紲セラル、秀吉其勇猛ヲ感シテ、助ツカヘシメンコトヲ云、政盛不肯、自大紋ノ小袖ヲ望テコレヲ著用シ、京中ヲ引マワサレテ、頸ヲ刎ラル、年廿四、（有女、後嫁中川修理大夫秀重、生内膳正久盛、）

〔祖父物語（一名朝日物語）〕其トキ佐久間玄蕃ハ、合戰ニ打負ケ、越前ノ鯖竝（江下同ジ）ト申在所ヘ退ケルヲ、百姓共搦出シケレハ、ホダシヲウチ、尾張常眞也、御目ニカケ、京



惟住長秀盛政ヲ捕ヘタル百姓等ヲ斬ル

秀吉盛政ニ肥後ヲ與ヘントイフ盛政辭退ス

ヘノホセテ洛中ヲ引廻シ、首ヲハ子、獄門ニソカケラレケル、（○中略、勝家、賤ニ自殺スルコトニカハル、四月二十一日及ビ同二十四日ノ條ニ收ム、）二十ソノ後越前丹羽五郎左衞門拜領シテ、鯖竝ニメノ佐久間玄蕃生捕出シタル百姓共不殘參レ、褒美ヲトラセントテ呼出シ、男女老若三百五十六人首ヲハ子、獄門ニソカケラレケル、（○中略、勝家、賤ヶ嶽ニ敗レ、北莊ニ收ム、）二十ソノ後越前丹羽五郎左衞門拜領シテ、美ヲ取ントノ志、ニクキ仕合トテ如此行ヒ玉フト也、（○下略、長秀疾ミテ死スルコトニカハル、十三年四月十六日ノ條ニ收ム、）

〔佐久間軍記〕玄蕃生害

秀吉越前ヲ丹羽長秀ニ、加賀ヲ前田利家ニアタヘ上洛、山口甚兵衞、副田甚左衞門ハ佐久間盛政ヲ警固シ上京、秀吉使淺野長政、盛政云、我汝カ大功ヲ知ルニ依テ、誅スルニ不忍、怨敵ノ心ヲヒルカヘシ、予ニ可從、九州諸將未屬、汝ニ授肥後國、九州ヲ可使征ト、盛政答テ云、命ヲタスカリ、剩授大國コト後代ノミメ也、我赴九州ハ、擊治メン事一年ノ中ニアラン、然シテ我上洛シテ秀吉ニ對面セハ、必忿怒ヲ生シテ、不思ニ秀吉ヲ可切、シカラスハ肥後ニ下リ謀叛ヲ起スヘシ、命ヲタスカルノ恩國主トナルノ恩ヲ報セスシテ、返テ禍ヲナサハ可乎、トテモノ恩ニハ、早死罪ニ可行也ト、長政歸テ告秀吉、々々

天正十一年五月十二日

又使長政言盛政云、以我有謀トスルカ、我不僞コト天ノ照覽ニ任ス、ハヤク可從我求ト、盛政カ曰、全秀吉ニ有謀ト爲ス、勇士タランモノ一言ヲ出シテ又ヒルカヘスヘカラス、我明日必車ニ乘テ洛中ヲ一見シ、河原ニヲヒテ可被誅ト云々、秀吉聞テ、勇士ノ一言ハリンケンニヲヤナシ、迚隨マシトテ、盛政最期ノ衣裳ヲ給ル、盛政自小袖ノ上ニ染物ノ赤ウラ付タル大ヒロ袖ヲ衣テ、車ニ乘、其姿長六尺、血服（服カ）面シヤクミ、ホウヒケアリ、五月十二日、年ハ三十、洛中ヲ渡ル、世ニキコヘタル鬼玄蕃ヲミント、貴賤上下馬車道ニヨコタハリ、男女チマタニ立ナラヒ見之、盛政ニラミ廻シ行、於河原被討云々、

享年二十七歲說

盛政ノ容姿

〔常山紀談〕佐久間盛政生捕るゝ事　附　久右衞門安次、源六郎實政ゞ事

志津ゞ嶽ゖ軍破ゃて、佐久間を生捕來る、秀吉見て、汝ハ武勇逞しゖ者かな、助て國を與ふべし、二心なゕらんやと問ゎ、盛政冷笑ひ、我ょ國を與へなゞ、汝を生捕搦ん事、今日我身の上ゖ如くせん、新ょ恩を受るとも柴田を忘れんやといふ、死すべきょ及て、犬紋紅裡廣袖の小袖、白帷子ょ空だきして、ら㊧よ、一生の終ㇾに風流を盡しさし、是一つゖ望なりと言しゕば、秀吉其望ょまゕせられしゕゞ、大ょ悅んで是を著さりゃ初、玄蕃其時廿七才、ミ



人をしみあへり、略〇下

盛政秀吉ニ內應ストノ說

〔柴田勝家始末記〕親族

高貳十萬石　加賀尾山城主　勝家公甥　佐久間玄蕃允成（盛）政

天正十一癸未年、志津嶽合戰ノ時、羽柴筑前守秀吉方江裏切スルノ故、四月廿二日、越前敦賀郡山中ニヲヒテ虜レ、五月六條河原ニテ淺野彌兵衞長政後彈正大弼奉行トシテ誅セラレ、辭世、〇下略、盛政ノ辭世ニカ、ル、前揭太閤記ニ同ジ、キ、

〔中川家譜覺書〕一奥山雅樂頭娘あり、秀吉是を媒して、佐久間玄番（蕃）允盛正（改ト）ょ嫁（同ジ）せしむ、幼女あり、二歲のせき、盛正志津ケ嶽の戰ょとらゝれ、誅せらる、是ょ依て盛正ゥ妻幼女を携へて、父雅樂頭家ニ歸る、其後新庄駿河守妻を喪ひて新ょ寡なり、秀吉聞て、雅樂頭娘をまゝ新庄ょ嫁せしむ、是ニよつて幼女を携へて駿河守方へ行き、駿河守己ゥ娘とし、生長して、秀吉命して、秀成（中川）妻とゝ、是駿河守娘さりとゝいへとも、實ハ盛正娘也、さるによつて中川、佐久間由緒有之、

盛政ノ妻奥山氏新庄直賴ニ再嫁ス

盛政ノ女清秀ノ男秀成ニ嫁ス

上杉景勝ノ老臣直江兼續、皇大神宮御師藏田左京亮ニ書ヲ與ヘテ、越後

棟數十間人脚十人地下鑓十人

糸魚川同宮領ノ夫役ヲ定メ、同國一宮蓮臺寺ノ町屋ヲ安堵セシム、

〔伊勢古文書集〕二下

追而、一宮蓮臺寺九間之町屋共、不可有相違者也、

於糸魚川伊勢領、何之人脚成共、毎度ニ棟數拾間の相定候上者、誰人違亂候共、拾人之外被出之間敷候、幷地下鑓之儀も、何方へ成共、拾人宛可被調之候、爲其一札ニ如件、

天正十一年

五月十二日　山城守(直江兼續)(花押)

御師

藏田左京亮殿

十三日、甲午、羽柴秀吉、其將仙石秀久ニ答ヘテ、近江坂本ニ歸レルヲ報ジ、併セテ、近ク長宗我部元親ヲ擊タントスルヲ告ゲ、備前、播磨ノ艦船ヲ督セシム、

〔伊豫國新宮田邊氏藏古文書〕○土佐國編年記事略七所載

書中令披見候、北國之儀悉任存分、隙明申候、一昨日江州坂本城マテ打入候、將又其表之儀、諸事心遣之由尤ニ候、備前浦々、播州灘目諸警固之儀申付候、長宗我部ヨキ所ヘ出候テ、於そ〻幸之儀候條、可打果候、其間之事無聊爾樣專用候、尙追々可申述候、恐々謹言、

五月十三日　筑前守秀吉判

仙石權兵衞尉殿

○秀吉、石井與次兵衞尉ニ書ヲ與ヘテ、近ク大坂ニ到ラントスルコトヲ報ジ、其艦船ヲ大坂ニ集メシムルコト、本月二十日ノ條ニ見ユ、

島津義久、肥後人吉城主相良忠房ニ、誓書ヲ遺ル、

〔相良家文書〕二

(折封ウハ書)「起請文」

起請文之事

今度以御誓紙、條々露顯、殊更永々可被勵忠懃之趣、寔令感懌訖、剩戰死(義陽)之跡相續之上者、聊無緩疎、倍可爲連綿者也、若有違犯者、

奉始上梵天、帝釋、四大天王、下堅牢地神、惣日本六十餘刕大小神祇、別當國鎭守新田八幡大菩薩、開門正一位、取分麑嶋擁護諏方上下大明神、稻荷、祇薗、春

日勸請諸神、天滿天神御部類眷屬等、神罰冥罰可蒙者也、

天正拾一年五月十三日　　仍起請如件、

相良四郎(忠房)太郎殿　　義久(花押)

○忠房、弟賴房ト共ニ鹿兒島ニ赴キ、義久ニ謁シテ誓書ヲ致スコト、三月二十日ノ條ニ見ユ、

## 十四日、乙未、三河洪水、

〔家忠日記〕三　五月二日、癸未、雨降、

三日、甲申、雨降、○下略

六日、丁亥、雨降、

七日、戊子、雨降、

九日、庚寅、雨降、

十日、辛卯、雨降、○下略

十一日、壬辰、祈禱候、雨降、

十二日、癸巳、雨降、○下略



十三日、甲午、酉刻より雨ふり出候、大雨ヲ刻ふり候、

十四日、乙未、雨降、所々大水出候、田地そんし候、濱松へ人をつかわし候、

## 十五日、丙申、羽柴秀吉、小早川隆景ニ答ヘテ、畿内北國ノ形勢ヲ報ジ、毛利輝元ヲシテ、益舊盟ヲ修メシム、

〔毛利家文書〕三

去五日御狀、於江州坂本令拜見候、

一如仰去月廿一日、柴田修理亮四ケ國之人數有儘召連、三七殿引入、瀧川令一味、武篇を仕懸候事、

一各懸合戰候を、筑前守面白存、先手之備をハ貳万計濃州岐阜口へ相向、瀧川をも二萬計よて取卷候事、

一柴田修理亮罷出候處へハ、秀吉馬廻計よて、敵三万餘御座候處へ、三手ニ分切懸候、柴田儀ハ、於當方せり合の時をりも、度々武篇を仕候者付而、三度まて鑓を合、度々戰驚目候、自卯刻未刻迄切合依在之、互下ニ居敷、休息候て、勝負不相著候事、

一秀吉見合候而、小性共計よて柴田旗本へ切懸、卽時衝崩、五千餘討致候之

天正十一年五月十五日



二萬ヲ以テ信孝ニ對シ二萬ヲ以テ一益ヲ圍ム

勝家ノ兵三萬

秀吉麾下ヲ以テ勝家ヲ破ル

日本ノ治此時

天正十一年五月十五日

處ニ、惣人數ハ木目之弓手馬手榮中へ迯入候事、

一廿二日、越州府中へ取懸、諸城雖相拘候、乘崩、刎首候へ者、相殘城悉退散仕候事、

一柴田越州北庄居城事、數年相拵、三千計留守者居申候處へ、修理亮馬百騎計ヨて迯入候事、

一廿三日、不息繼追懸、惣構乘破、則城中之廻拾間拾五間ニ陣捕申候事、

一柴田息をはゝせてハ、手間も入可申候ゝと秀吉存、日本之治此時候之條、兵共を討死させ候ても、筑前不覺ヨて有間敷と、あけはと思切、廿四日の寅刻ニ本城へ取懸、午刻ニ本城へ乘入、悉刎首候事、

一城中ニ石藏を高築、天主を九重ニ上候之處へ、柴田貳百計ヨて相拘候、城中狹候之條、惣人數入こミ候へハ、互共道具ニ手負、死人依在之、惣人數之中ヨて兵を撰出、天主内へうち物計ヨて切入せ候へハ、修理も日比武篇を仕付さる武士ヨて候條、七度まて切而出候といへとも、相禦事不叶、天守之九重目の上へ罷上、惣人數ニ懸詞、修理ゝ腹の切樣見申て、後學ニ仕候へと申付而、心もある侍ハ涙をこほし、鎧の袖をぬさし候ニ依て、東西



勝家自殺ス

草木モ靡ク體

景勝人質ヲ出ス

信雄信孝ヲ滅ス

一益ハ包圍ノ中ニアリ

秀吉ハ人ヲ切拔クヲ好マズ

ぬつりと靜候へハ、修理妻子共其外一類刺致、八十餘不身替者切腹、申下刻ニ相果候事、

一廿五日、賀州へ出馬、諸城雖相蹈候、筑前守大刀風ニ驚、草木まても相靡躰ヨて候ニ付而、越中境目金澤と申城ニ立馬、國々置目等申付候内ニ、越後長尾出人質、筑前次第令覺悟候之條、令赦免、去七日ニ安土まて打入申候事、

一三七殿儀者、信雄被出御馬、是又岐阜城被攻崩、三七殿儀者不及申、悉被刎首候事、

一瀧川儀者、勢州内長島と申所ニ、數年有付候足輕共ニ取卷候之間、是又可被刎首儀、日數不可有幾程事、

一明隙候間、筑前守ハ江州坂本ニ在之、此中忠節仕候者ニ者國郡を遣、安堵之思を作候事、

一此日比どうだまりぶしやう者ハ成敗可仕儀ニ候へ共、秀吉人を切ぬき申候事きらい申候付而、助命、先々國ヨて替地を遣、何之御國をも念をやり申付候事、

天正十一年五月十五日

六月中旬ニハ國分知行分ヲ終ラン

兵ヲ毛利氏トノ境目ニ出サン

秀吉ノ立腹セザル樣覺悟スベシ

氏政景勝マデ秀吉ノ命ヲ奉ズ

賴朝以來ノ統一

隆景ヨリ輝元ニ說カシム

天正十一年五月十五日

一來月中旬ニ者、國分知行分も相濟可申候間、此中諸侍骨を折候之間、七月卅日間ハ相休可申候事、○秀吉、知行割ヲ行フコト、八月一日ノ條ニ見ユ、

一惣人數徒ニ可置儀も不入事候間、其御國端へ罷越、境目之儀をも相立、連々無御等閑驗を相見可申候條、能々有御分別、秀吉腹を不立樣ニ御覺悟尤候事、

一東國者氏政、北國ハ景勝まて、筑前任覺悟候、毛利右馬頭殿秀吉存分次第ニ被成御覺悟候へハ、日本治、賴朝以來これよハ爭ふ可增候哉、能々御異見專用候、七月前ニ、御存分於在之者、不被置御心、可被仰越候、八幡大井、秀吉存分候者、彌互可申承候事、

一右之趣、一々輝元へ被仰入尤存候、尙御兩使口上ニ申渡候、恐々謹言、

秀吉（花押）

五月十五日

小早川左衞門佐（隆景）殿

御返報

〔萩藩閥閱錄〕百十八 內藤彌兵衞

（○上略、五月十五日附、隆景宛、秀吉書ニカ、ル、前揭毛利家文書ニ同ジ、）右從隆景狀ニカ、ル

樣爲御使者、私先祖內藤三河守元實儀、秀吉公ハ被遣之由御座候、此返書いろ樣之子細候て傳來之段者、存不申候、右御使者相勤罷歸候節、段々樣子被

內藤元實

羽柴秀吉書状　公卿

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

羽柴秀吉書状　公爵毛利元昭氏所藏

原寸　縦〇・二六五米

公爵毛利元昭氏所藏

原寸 縦 〇・二六五米

成御尋候上、苦勞仕之由被遊御感、折節御膳被召上候御時節ニ而、御手自御定椀を以御酒被下之候、右之御椀于今所持仕罷居申候、

〔日本耶蘇會年報〕（歐文材料第九號譯文）

一五八二年、八三年及び八四年の日本通信、

一五八四年、一月二日（天正十一年十月二十日ニ當ル、）附、長崎發、パードレ・ルイス・フロイスより、耶蘇會の總長に贈りし書翰の一節、

山口の王は、當八十三年の始め、彼等の間にありし爭鬪に關し、使者を羽柴の許に遣はしゝが、羽柴は彼の見聞せし所を其國王に報告せしめんと欲し、始終之を己が身邊に留めたり、是に於て之に書翰を與へしが、彼は先づ多數の武士等の前にて、高聲に其書翰を朗讀せしめたり、其文意左の如し、

去年我未だ甚だ强勢ならざりし時、人を卿の許に遣はし、卿が有せる九ヶ國の中五ヶ國を我に讓れ、我之を信長に約したればなりと言はしめたり、卿は我が事幸に進行せざるべしと考へ、之を聞かざるの狀をなせり、事の進行如何は、卿の使者之を卿に語るべし、我甚だ卿の國を渴望するにあらざれども、卿が約を履まんことを希望す、而して若し此事に付

天正十一年五月十五日

秀吉輝元ノ使者ヲ留メテ其輝元ニ報告セシメント欲ス

輝元高松ノ條約ヲ履行セズ

き滿足を與へなば、我等は平和を保持すべし、然らざれば武器を手に取りて相見るべし、而して勝利は幸運なる者の有たるべし、卿若し之に決心せば、我其地に赴きて卿を見るべし

と、この手紙を受取り、使者其他の報告を聞きて、山口の王は驚愕し、其國々と人質を彼に與へて、其申出を容れたり、斯くの如くして媾和調ひたり、〇一五八四年一月二十日附、ワリニヤーニ宛、フロイス書翰殆同ジ、

〇秀吉、輝元、隆景等ニ北國平定ヲ報ズルコト、四月二十六日ノ條ニ見ユ、

元、人質ヲ秀吉ニ遣ルコト、十一月一日ノ條ニ見ユ、

**蘆名盛隆、陸奥鹽松ニ出兵セントシ、小田切但馬守ニ命ジテ、來リ會セシム、**

**〔伊佐早文書〕**二〇羽前

急度啓之候、鹽松（安積郡）境之者共、一兩ケ所心替候、因之無據候間、來十八、無嫌風雨出張候、無濟限大義ニ候共、早々馳相立可然候、恐々謹言、

五月十五日　　盛隆（蘆名）

小田切但馬守殿

鹽松境ノ者盛隆ニ背ク

履行セザルニ於テハ秀吉ハ戰ヲ辭セズ



**十六日、丁酉、神祇大副吉田兼和、天變御祈ノ祓ヲ上ル、**

**〔兼見卿記〕**五　五月□□日、丁酉、天變御祈之御祓進上之、注別帋喜介遣之、近衞殿、二條殿御祓進上之、〇下略、兼和、祓ヲ羽柴秀勝ニ贈ルコトニカヽル、本日下ノ條ニ收ム、

〇大神宮ニ天變ヲ祈禳セシメ給フコト、本月二日ノ條ニ見ユ、

**神祇大副吉田兼和、祓ヲ羽柴秀吉ノ養子次（秀）勝ニ贈ル、**

**〔兼見卿記〕**五　五月□□日、丁酉、〇兼和、天變御祓ヲ上ルコトニカヽル、本日上ノ條ニ收ム、毛利河内守（良秀）同母儀ヘ遣御祓、連々祈念之儀申來也、母儀信仰也、唯今母儀ヘ持遣之、遣書狀、返事、一俵到來了、喜介持遣了、龜山御次ヘ御祓持遣之、薰衣香十袋、母儀ヘ御祓、取次ちや〳〵ヘ遣書狀了、及暮修理進罷上、母儀向坂本ヘ御下向也、御次ヨリ御祓頂戴、祝著之由返事、家中祈念百座天度（度カ）之御祓、各頂戴之、

毛利長秀

秀勝ノ母坂本ニ赴ク

〇兼和、次ノ疾平愈ヲ祈禱スルコト、二月十二日ノ條ニ見ユ、

**羽柴秀吉、攝津高槻城主高山重友ノ柴田勝家ニ通ズルヲ聞キ、兵ヲ遣シテ、其城ヲ攻ム、山城勢多城主山岡景隆モ亦勝家ニ通ズルヲ以テ、城ヲ棄テ、逃レ去ル、**

天正十一年五月十六日

大和衆ニモ勝家ニ通ズルモノアリ

山岡景猶石山城ヲ去ル

山岡景佐モ所領ヲ沒收セラル

〔多聞院日記〕三十〇大和　五月十六日、中日、供目代一獻在之云々、天氣快然、攝州高ツキノ城高山厨(重友)書筑前ヨリ人數取寄責云々、今度柴田ヘ一所ノ衆故也、瀬田(多)ノ山岡モ逃散了云々、當國衆モ少々同心衆在之、佐久間玄蕃白狀ト云々、

〔寛政重修諸家譜〕千百四十二　山岡景隆美作守、從五位下、母は維政ゟ女、是年(天正十一年)、太閤れたゑよ退おられ、勢多城を去て、毛牧邑ニ幽居ま、これ景隆、柴田勝家ニ與し、ひきゝ志を東照宮によさゝてゐつれるによれり、〇上下略

景猶〇玉林齋、備前、景隆弟、十一(天正)年、兄と共ニ退おらま、石山城を去て、加藤清正ニ屬ま、〇上下略

〔寛政重修諸家譜〕千百四十三　山岡景佐或景祐、又景成、山岡美作守景之ゟ二男、母は和田伊賀守維政ゟ女、十(天正)一年、柴田勝家ニ志を通ましにより、太閤れためニ采地を沒收さらま、それゝちめされて東照宮に仕へたてまつり、駿府ニ候ま、〇上下略

〇重友、秀吉ノ爲メニ改易セラルヽコト、天正十五年是年ノ條ニ、家康ノ爲メニ海外ニ追ハルヽコト、慶長十九年九月二十四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

重友賤嶽ノ不首尾ニ依リテ改易セラルトノ說

兼和吉田社領沽却分ニツキ秀勝ノ母ニ賴リテ秀吉ニ訴フ

〔明良洪範〕五　高山右近長房ハ、攝州高槻ノ城主ニテ、七萬石〇契利斯督記ニハ、十二万石トアリ、ヲ領ス、勇猛ノ人也、始石山本願寺光佐上人ニ一味シテ、一向宗大亂ノ中ニテ第一ノ者也、信長モ攻アグミテ、高山ヲ漸味方トシ、カレカ謀計ヲ以テ、其亂ヲ治ラレシカハ、是ヨリ信長、此高山ヲ擧ケ用ヒラレ、賞祿ヲ給フニ依リ、高山モ忠ヲ盡シケル、信長弑セラレシ後、秀吉公ニ一味シテ、山崎ノ南ヲ固メ軍功有リシカハ、各賞祿ヲ配分ノ時、攝州高槻ノ城ヲ秀吉公ヨリ與ヘラル、其後賤ケ岳合戰ノ時、佐久間盛政ニ追レテ、秀吉(長カ)公ノ陣ヘ逃入、此時ノ不出來ニ依ツテ、秀吉公ニ終ニ勘氣ヲ受、加賀利家ニ預ケラル、是ヨリシテ加賀ノ家臣ト成、

十八日、己亥、羽柴秀吉、磯谷彥四郎ヲシテ、山城山中ニ還住セシム、尋デ、彥四郎ヲ奉行トシテ、山中ノ道路ヲ修メシム、

〔兼見卿記〕五　五月十八日、己亥、坂本ヘ下向、御次御袋ヘ爲御禮也、ちやゝゝをもて御祓、白スヽシ一面持參、次當社領沽却分之儀、筑州ヘ訟訴以彼御袋申入了、ちや〳〵ヘ相談渡一書了、ちや〳〵一段馳走也、以索麵酒肴在之、仕合能、及晚上洛、山中磯谷彥四郎在所ヘ還住之旨、自筑州被申付、一